竜の下へ

竜のかんすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の下へ

【Ｎコード】

Ｎ００１０Ｉ

【作者名】

竜のかんすけ

【あらすじ】

人の理性と竜の本能の狭間に戸惑う青年のお話。そして彼が向かう先は・・・

第一部：一人の心一日記（前書き）

厳密にはまだ未完成です。表現の変更などしたいなぁと思ってます。

第一部：一人の心ー日記

竜の下へー自作作品　　著者：竜のかんすけ

1人の心

日記

ア・・カ・・・・大丈夫だ。字は、まだ覚えているようだ。村の商隊駐留所で字を習っておいてよかった。
俺は、自分が人間である証拠に、ここで日記を書くことにした。字は人間のものだから。岩に刻んでおけば、気が狂って暴れだす時も消える事はないだろう。
書いているのは自分の爪だ。そして書いている俺は、怪物だ――――この衝動、この苛立ちは、人間のものじゃない。姿だけでなく、心までが獣になってきているみたいだ。俺はどうして――――

今日はいつもよりも体が熱い。餌がなければ気が狂ってしまいそうだ。（ここで岩肌には深く三本の爪跡がついている。）　だが俺はもうあんなおぞましい事はしたくない！俺は人間なんだ。
この爪で字を書くとすぐに腕が裂けるように痛くなり、強張ってしまう。細かい事をするためにこの腕はできていない事がよく分かる。
人間の手はなぜあんな形をしているのかも――――
今日もこれ以上文字を刻むことはできない。

腕の痛みは取れた。だがあの苦痛を我慢するために鹿を三頭も喰ってしまった。でもこれでしばらく、あの”人間でない欲求”を押さえつけることができるだろう。いくらか不安がなくなる。
最近、なんだかいろいろな事を忘れ始めているようだ。自分の過去さえも消えてしまうというのか。そんなの嫌だ。だから、ここに俺

の過去を刻んでおこうとおもう。
俺は、ある理由で村から離れた森の中を走っていた。理由なんて書くまでもないだろう。思い出すだけで、洞窟の中だというのに咆哮が止まらない。まあ、それはいい。俺はそのときに木か何かに足をすくわれて転び、頭をぶつけてしまった。そして気がついたら、突然この姿になっていたのだ。理由も分からない。
俺が倒れている間に、俺は夢を見た。それは歌のように流れていくような、不思議なものだった。
俺はどこまでも、磨き上げられた白い床は続いていた。辺りも全て同じく統一され、俺が立っている冷たい床は、俺を映していた。顔中に赤い筋が刻まれていて、季節に似合わない薄手の服装は、さらに木々に切り裂かれていた。ここはどこなのだろうと、俺は辺りを見回した。
不規則に立つ白い柱が、見たこともない美しい天井絵を支えていた。小さな村に住む俺には、到底縁が無い華麗な壁画。はたして人の力でこのようなものが作れるのだろうか。壁の端までは一体どれだけあるのだろうか。山育ちだから距離の目算には自信があったが、両端の距離は想像がつかなかった。何かの錯覚かとも思えるほどだ。
なんだか今日は頭が冴えている。だがもう腕の関節が枝のように固まってしまったから、また明日はひどい痛みだろう。痛みが引いたら続きを書くと思う。

神様って本当にいるのだろうか。今はずっと考えている。この姿に俺を変えたのは俺が悪い事をし続けたせいだろうか。俺はこれからどうなるのだろうか。
過去を記すうちに、なんとなく気が楽になるのが分かる。何も変わってはいないけれど、なんだか何かを償っているような感じだ。続きを書こう。
夢の中の、真っ白な建物の中での続きだ。俺の目の前の、崖の絶

壁を思わせる巨大な壁には、他と同様に見たことのない、現実では有り得ないほど大きな硝子の図柄――――ステンドグラスが掲げられていた。奇妙で複雑な図柄。俺は体の底から湧き上がる何か恐ろしいものと、狂った歓喜のような、何かがその絵から感じられた。瞬く間に外の光を美しく変化させて、鮮やかに俺に降り注いだ。俺自身の体を色づけ、床に同じ模様を描いた。本当にあれは硝子でできているのだろうか。あれだけの大きさのものを、あれだけの高さに作り出すなんて、なんとすごいことだろう。

その絵柄は初めて見るというのに、意味は全くわからないというのに、妙に吸い込まれる、そう、親しみがあるものだった。今思えばそれこそがこの姿になる予兆であったと言ってよかった。だがあの時は、これが都で使われているという“魔法の素”なのだろうか、などと呆然と考えていた。俺の周りには、そういった技術は全く入ってこない。生きるのに最低限なもの以外、行った事も見たこともなかった。だからその光景は俺を麻痺させていた。

それは突然、前触れもなく、なんとステンドグラスは無音で粉々に砕けた。あまりにも豪快で、それでいて優雅に見えた。俺は一瞬だけ感じたことのない感動を受けたが、体は思っていることとは反対に、顔を腕で覆った。天の光を受けながらキラキラと輝くたくさんの破片たちが、瞬く間に腕の影に覆われる。直後、不快な、何かが肉に刺さるような音が、何重ものこだまのように反響して聞こえてきた。

もちろん自分に刺さったのかと恐怖した。硝子の破片はそもそも死を意味する不吉なものだったし、さっきまで見ていた光景は、明らかに自分に降り注ぐ凶器だったから。でも、それに気づく最後最後まで、俺の体に痛みはなかった。俺が恐る恐るゆっくりと目を空け、自分の腕を確認し、さらにその腕を退かすと、先ほどまで繊細な色を作り出していたはずの壁面からは、切り取られたやわらかな白い空が見えた。一点が輝いていたのではなく、外の全てが俺を照らしていた。あれは、神様の光だったのかもしれない。

やっと状況が飲み込めてくると、破片は自分のいるところにまでは届いていなかったことが分かったが、刹那の俺にはそんなことはどうでもよかった。鮮やかな額縁の光の下の影に、巨大な赤い竜が、何十条の白い槍で壁に貼り付けになっていたのだ！まるで罪を犯した罪人の、処刑後のようだ。ふと、誰かほかの人がここにいるのかと思ったが、いないことはなんとなく感じ取っていた。風一つ存在していない。耳鳴りがするほど無音で、それだけは現実味を帯びていた。

俺は、一歩ずつ確実に竜の元に近づいていった。何かが、そうしろと命令している。自分の求める何かが、そこにあると叫んでいた。今もそうだが、その光景を思い出すと胸の奥から何かがふつふつと湧き上がってきて、咆えるのを抑えられない。こいつは何だとか、誰がこんなことをしたのだとか、そんなことどうでもよくなっていた。

竜の血が滑らかに壁を伝い、地面を伝い、いくつかのの段を流れ落ち、それを中心に半円形に広がっていく。竜はぴくりとも動かず、死んでいるように見えた。息をしている様子もなく、時間が止まっているかのようだった。だが、眼だけは、恐ろしい獣の赤い眼だけは俺を見続けていた。そして、俺もそれを見返し続けていた。それを見た瞬間から、視線も心もそれに囚われてしまっていた。

足の裏の痛みで、割れたステンドグラスを踏みつけたことに気づいたが、歩みは止まらなかった。森の中を走り出したときと似たような衝動を感じる。歩みを止めたくない、という。

俺は赤く染まった段をゆっくりと、確実に上り、壁に縫い付けられた竜の目の前に来た。赤い目は、相変わらず自分を捉え続けている。

『我は死する。だから、汝は我となる。』

俺はうなずいた。自分が自分でないかのようだった。劇や物語を聞いている時のように蚊帳の外。理由も意思も、何も分からない。ただ怖くないと感じている自分に恐怖した。自分の心の隅で、俺は

恐怖を叫んでいた。その永遠のような無音の視線の中をずっと。
次に気がついた時、目の前は真っ赤になっていた。いや、竜が俺に向かって血を吐き、血まみれになったのだ。俺は真っ赤になった自分の手を見た。熱を持ったその紅は、なぜか自分の血のように感じた。いや、それは完全には間違いではない。俺の足から流れる血によって、血は交わっていたのだから。
俺は、頭に響くほど激しい自分の心臓の音を聞きながら唾を飲んだ。何かが変わった。何かが自分ではなくなったのを感じた。歓喜、していたのかもしれない。
そのまま焦点を足元に移し、血に映る自分の姿を見た。そこには、写るべきものは写っていなくて、外からの光を浴びて、くっきりと映った赤い竜が、俺の代わりに俺を見つめていた。
――――もう我慢できない。喰ってくる。

空。
俺は空が好きだ。あれほど自由で優美で広大なものはない。いや、言葉では言い表せない。この姿になって唯一よかったこと、それは空に同じこの青い羽で、自由になれるということだけだ。
だが、その代償に人という存在を投げ出したくはない。
そういえば今日、はぐれ星を見かけた。たしかあの星は、太陽の動きを真似ようとした愚か者で、自分で止まるやり方も知らずに天から抜け出して飛びまわり始めた星だという。普通に回る事をやめた孤独の星。分かるような気がする。

もうすぐ冬だというのに、洞窟の外では珍しく雨が降り続いている。人間だったとき、雨を眺めていると外に出れなくて憂鬱になったが、今は物思いにふけっていてさらに憂鬱だ。雨音が頭の奥底にまで入り込んできて、骨の髄まで暗くなる。そう、こういう日には、いつもこの姿になった日のことを思い出す・・・。
野獣になった日のこと、きっと忘れはしないと、思う。

森の奥深くで目を覚ましたとき、まずひどかったのが激しい頭痛と体中に燃え盛るような痛み、いや熱さだった。あれで何度気が狂いそうになったかは分からない。何の飾りも無く地獄だった。赤と青の何か分からない変なものが頭の中を飛び交い、俺の意識をぐちゃぐちゃにして、さらに黄色の、同じくよく分からないものが、目の端で嘲り回っていた。その時の俺という存在は苦痛に等しく、それ以外の何にも等しくなかっただろう。

そして、きっと永遠の時間が過ぎ去った。

俺の体を最初に冷やしてくれたのは、一滴の水滴だった。そして、降り始めた雨だった。後で分かった事だが、俺はその場で、この巨体でのた打ち回り、その周囲の木々をみんななぎ倒してしまっていたから、俺は森の地面よりも真っ先に雨に触れることができた。その雨が俺の体の熱さを冷やし、飛び回る文字たちを追い払ってくれた。いや、実際はあまり変わってなかったかもしれないけど、錯覚でも俺を鎮めてくれたのは確かだ。

俺はいつの間にか、頭の中にあるその青と赤を必死に選り分け、それぞれの色同士をつなぎ合わせようとしていた。まるで奇怪なパズルをしている感覚で、今思えば途方もない。うん、これまた途方もない時間を使った。だが行っていくうちに暴れるピースは少しずつ少なくなり、頭の痛みが消えてゆくのを文字通り全身で感じ取っていた。俺が最後に感じたうれしさだった。

完成した二つの塊。青の塊には倒れた木、むき出しの地面、そして、地面にひれ伏している一匹の竜が、そこには描かれていた。長い角に、鼻の上にも短い角を生やした長く大きな口、牙が上と下にそれぞれ二本ずつ突き出ていた。凶器な頭部を支えるのは長い首で、背骨の模様が背中を通して長い尾まで続いている。前脚は人並みの太さで長さだが、爪は三本。足は大木のように太いく逞しいが、体の大きさにしては、少し短いように思えた。足も鋭い三本の爪、さらにかかとにもう一本。背中には大きなこうもりのような羽がついていた。

目で見ていないというのにそういったことを知る事ができることに気づいたのはずいぶん後、そしてそれが自分だと気づくのには更にその三倍を要した。
赤の塊はその竜の内側を示していた。胃や腸、内臓の隅々、筋肉や骨、神経の一本一本まで感じることができた。人間のころ感じたことは無いが、例えて言えば、自分の中身が綿だと知っている人形のような感覚だった。
何の決定権もなく、獣にされてしまった俺。
怖かった。

壁に左脚をつけて上半分を支え、右脚で字を記すということに、体が慣れてきた。
だが、さっきから息が荒い。体中が興奮しているし、涎も飲み込むのを忘れると口からあふれ出てしまうようだ。今の俺は何をしたいのか。
狩りだ。人間である俺が必死に心を留めているが、あの滴る血や生の肉、休んでいる獲物に音も無く近づき、あの喉下を掻き切ることを思うだけで、俺の体は操られた人形のように、外に足を向けようとする。
そうだ、あの時もそうだった。俺が始めてこの姿での狩りの楽しみと快感と、苦しみと絶望を知ったのは、赤と青の図を完成させてから四日後の事だった。
この体は当時、指一本動かすのにも大岩を持ち上げているかのような労力が必要で、その上今までの、人間の動きで歩く事はできなかった。指は二本減って器用に動かないし、歩くときには尻尾で頭とのバランスを取らなければならなかった。
さらに、今では意識していなくても安定しているが、少しでも気が散ると、またあの二色の塊がばらばらになって暴れだした。つまり、まず体に慣れるまで一日かかった。考えが今の状況についてきたの

は二日目だったろう。
触れる外観は人間のころとは全くの別世界だった。目では見えない範囲の物がよく分かり、それがどれだけの硬さを持っているのかということが、実際に触れているように分かった。自分を取り巻く風の流れも知る事ができて、常時自分は風の一部のような錯覚にとらわれる。目の前に口と鼻がしっかりと見えるのも変な感じだった。そしてなにより、長く降った雨の水溜りに映る自分を見たときの、あの絶望感と背中を駆け抜けた寒気。青い鱗を鈍く光らせた竜。そう、自分が今この瞬間、本当に生きているのかと疑った。
なぜこうなってしまったのか。自分が村から逃げてきたから？異国にあると言われる魔法の呪いにでもかけられたのだろうか。でも、なぜ？誰がやったのか？いや、あの時こけたショックで妄想を見ているだけかもしれない。だったらしばらくすれば元に戻る！そう俺は俺を納得させようとした。
だが俺はその時、何かを感じた。自分でない部分なのに、そこに触覚があって触られたような、不気味な感覚。それは、この身のはるか後方、人の足で五十歩あたりのところだと、正確に認識できた。すこし意識を開放すれば、散らばっていた感覚はそれに集中して、やがてそれが雄の鹿だと知った。知った瞬間、そう、ちょうど俺が今感じている衝動が体の奥底から噴出してきたのだ。この巨体が燃えるかのように熱くなり、一気に息が上がる。体中の筋肉は緊張した。あのときの俺の、手に余るものではなかった。考えが何かに押し流されて、俺が獰猛で強欲な存在に成り果てていくのを黙って感じているしかなかった。あのときの俺は本当に弱かった。
欲望の操り人形と化した俺は無意識に翼を広げ、次の瞬間には木々が自分の下を舞っていた。そういう記憶はあるが、あのときに心にあったものは鹿一匹だけで、他に何もなかった。
俺の翼はこういった狩りのためにある。飛び立つときなど特別な事がない限り、鳥のように無駄に羽ばたく必要がなく、羽を広げているだけで空を無音で滑っていく事ができる。薄い羽には不思議な文

字が書かれていて、夜空では微かに光っているから、もしかしたら魔法かもしれない。そのおかげで獲物は、近づく俺の存在に気づかなかった。

俺はそのまま体を休めている鹿に向かって突っ込んだ。だがその一瞬前に、俺の翼が木々の葉に当たったその音に、鹿は間一髪で反応して俺の牙を逃れた。

俺は捕らえられなかった怒りと苛立ちで、鹿が逃げていった方向に向かって激しく咆えた。するとすぐにその音は返ってきて、俺に鹿の正確な位置が頭の中の青の図によって、はっきりと与えられた。俺はその場から低空で飛び立って、木々の間を縦になって飛んだ。あっという間に目標に近づき、この身が覚えている本能に従って、必死で逃げている鹿の喉を噛み切った。鹿は一瞬絶叫の声を発して、俺の脚の下敷きになった。簡単に命が消えた。そう、そのときの狩りの達成感は、この姿になって始めての狩りともあって最高のもので、勝利の叫びが止まらなかった。もう、獣だった。

それから冷静に考えられるようになったのは、たぶん鹿の足を食べているときだったと思う。俺は今も獲物の脚を最後に食べる性分だし、次に来たときに、そこに足の骨だけが残っていたから間違いは無いだろう。俺はそれから間もなく正気を失い、次の瞬間には、今いる洞窟の一番奥でうずくまって泣いていた。いいや、人間の心としては泣いていたが、この目から涙は一滴も流れなかった。それどころか狩りの余韻で笑っていたかもしれない。口の周りや前脚など体中血だらけで、そこは血の匂いが充満していたから、ますます高揚感は収まらなかった。それにはすぐに気づいてすぐ近くの川で洗ったが、匂いは体から消えなかった。それから、今までの一度も。きっと人間だったら、思い出したくないものは無意識に思い出さないようにしていただろう。だが俺はもう違った。無意識は何度もその興奮を思い出し、味わおうとしていた。肉を裂き、内臓を貪り食う俺。足を千切り取り、生のまま血と共にそれを味わう俺。これほどまでに残酷な殺し方があるだろうか。嫌だ。俺は人間だったんだ。

こんな獣なんかじゃない。
そういえば、このときにはもう、飛び方を知っていた。人間のころには無かった筋肉や感覚を使うが、これは言葉では表せない。しいて言えば、空気が自分のものになったようなものか。こうやってひとつひとつ、俺は人間でないものになっていくことを実感してゆく。そして今日も、これ以上この身を留めておく事ができそうに無い。

洞窟のずいぶん奥から書き始めたつもりだったが、もう出入り口付近にまで来てしまった。この後は反対の面に続きを刻むことにしよう。

慣れは恐ろしい。特に大きな変化では、人間は麻痺してしまう。例えば、あの白い建物の中にいたときのように。だけど、誰にも会えないという孤独、人間からも切り離された孤独というのは、慣れることはできない。
狩りは昨日のうちにすませてしまった。だから今日、俺の体は俺に何も要求してこなかった。それを空しいなどと思ってはいけないんだ。俺は人間だ。
今日も夜明け前に起き、まず自分の姿に怯えた。寝ているというよりも浅い夢をみるような、ただまどろんでいるだけで、つまり体を癒すために休んでいると言っていい。いつも体のどこかで警戒をしているからだ。
そのまどろみの中で、たまに変な夢を見る。いや、いつも見ているかもしれないが覚えていないのだろう。それは不思議な夢ばかりだ。昨日は久々に覚えていたが、鳥の形をしたとても大きな鉄の塊が、竜と同じように空を悠々と飛んでいた！一体何なのだろうか。
いつものように洞窟を出て、空を回りながら昇り、この崖の天辺に立って朝日を見た。人間のころは毎日見ても美しく、広大で晴々する気持ちを抑える事はできなかったが、この思いは日に日になくなっている。これは人の慣れか、それとも獣の無関心なのか、それは

分からない。
その後は川に入って体を洗う。血の匂いを消すためだ。腰、といえるかどうか分からないが人間の感覚で言う腰辺りまで水に浸かれるように、川底を掘っておいた。そこに入ると、まず羽の裏で水をかき上げて体中に水を振り掛ける。手も足も、体のどこにも届かない。だからその後に川底に体をこすり合わせてよく洗う。自分の古い鱗が下に沈んでいて、それとこすれて気持ちがいいのだ。
羽と角を乾かしたその後は、ただずっと空を飛ぶ。そこで自分のいる深い森をずっと眺めて、遠くに見えるグリーンヘッド山脈に向かって咆える。そして、この世界での自分の小ささと、結局は何もできない無力さを今日も思い知らされる。
両親にもやっぱり頼りたかったけれど、そんな勇気がない。自分の村には近づいていないようにしているのは、すでに行ったことがあったからだ。あの時は村を大騒ぎにしてしまって、誰も俺が人間だったなんて気づくものはいなかったし、知り合いに怖がられるのは何よりも胸が痛んだ。あのいつもは優しい民兵の人たちが、恐ろしい顔をしながら槍を向けて走ってきたので、もう帰るしかなかった。そのときには両親や弟には会えなかったけど、俺が、今の俺に食べられてしまったとでも思っているのだろうか。まあ、あながち間違ってはいないが。あれ以降、人間を見るとどうも怒りが湧き上がってくる。自分は人間だというのに。この体は人間が嫌いなのだろうか。そうかもしれない。
今日は空で、大体そんな事を考えていた。
太陽が最も高い所を過ぎるころに、もう一度崖の頂上に戻る。そこは動物の気配がしないから、洞窟の次に安心できる場所だ。もしいると、またあの欲望に駆られる。
この時間になると、遠いところで数頭の竜が心を通じ合わせているのが聞こえてくる。獲物の分布や求愛など、ありとあらゆる事が行われているのだ。一本で繋がっているというよりは、輪になって話しているような感じで、誰に向かっているのでもない。言葉ではな

く、感情や思いしかないけれど、縄張りの取り決めなどは恒常的にこの方法で行われていて、おかげで互いに会うことはほとんどない。このときだけは、俺は一人ではない。そちらの面でということだが。驚いたのは、こんな俺が言うのも難だが、竜が実在したということだ！竜は魔法に同じく縁遠いものだったから、普通に暮らしているとは思わなかったし、竜同士がこんな方法で意思の伝達をしているのにはじめて気がついたときにも驚いた。

そして一日の終わりを示す夕日を、朝日と同じ気持ちで眺める。空が紫色に染まると、俺は月が昇るまで、地面に向かって歌を歌う。どんな歌かはいつも覚えていない。俺の心の中で、人間の俺が怯えているぼんやりとした情景しか思い出せない。

角を地面につけていると、青の図が全く何も映らなくなって、なんだか人に戻った気がする。でも逆に普段、周りがよく分かっているから、それはまるで闇の中に放り出されたかのように、不安になってくる。

明日はこの日課に、狩りが追加されるだろう。体は喜び、そしてまた俺はそれに恐怖する。いつになったら元に戻れるのだろうか。戻る方法などあるのだろうか。

今日は森に獲物が少なかったから、家畜のいる場所まで行って牛を二頭失敬してきた。彼らには少し多すぎるから別にかまわないだろう。村のヤギ使いの――――名前は思い出せないが、友人だった奴が愚痴をこぼしていたのを覚えている。さすがに食肉用に育てられただけあって、よく肥えていた。彼らには少々もったいない気もする。生きるのに最低限度以上のものを欲するというのはどうだろうか。確かにこの身さえも最低限度以上のものは要求していない。俺は、昔は強欲だった。自分の事しか考えない。無力な様相を纏った獣だ。俺は自らの心に合った姿になり、騙す事はしなくなった。今の姿になってよかったと、そういう点では思えなくもない。

こんなところでずっと怯えているわけにはいかない。確かに今はこ

んな姿だが、だからといって何もしなれば何も始まらないなど、当たり前ではないか。尾の一振りで木々をなぎ倒し、空を飛ぶ、敵のない存在。唯一恐れなければならないのは、人間だろう。

今日は何があっても外に出たくない。衝動もありとあらゆる方法で抑えよう。このまま文字を書き続ければ、気が散っていいかもしれない。

いや、やはり俺は人間に戻りたい。

俺は何を思ってあんな事を考えたのだろうか。家畜を食べるなんて、泥棒だとなぜ思いつかなかったのか。俺は、内側も竜になり始めている？何かが、俺の存在を蝕み始めているのか？前は森の動物を食い殺すなんて考えるだけでも悪寒が走ったが、今では何の苦もなく毎日のように食い殺しているではないか。俺は生き物を殺す事に苦渋を感じながら、それでも生きるためだと割り切ってはいる。いやいや、時には楽しさまで芽生えて、肉を引きちぎる事に快感を覚える。それが、この身から発せられているのか、それとも自らが愉しんでいるのか、最近分からなくなってきている。

書くことがない。思いつかない。考えるのがだるくなってきた――――だめだ、何か書かなければ、俺は押しつぶされてしまう。

たしか、字の書き方と読み方を教えてくれた商隊の人が、いろいろな神話を聞かせてくれた。ぼんやりとしていてはっきりと思い出せないけれど、たしかこんな話があったはずだ。

闇も光も存在せず、時間さえも流れない場所に、グランという舵使いは取り残された。

彼が罪を犯したのか、それとも不運にもそこへ飛んだのか、それは分からない。

彼の体は完全の庭にあったものだから、無は彼を憎み、彼を飲み込んでしまおうとした。

だが、彼は慌てず諦めず、喰われる体も気にせずに考え続けた。彼は眠るべき地を探したのだ。
そしてその末、彼は自分の心臓を光の槍に変え、庭にあった知恵で竜を作り
竜と槍で無を切り裂いて、それを光と闇に分けた。
彼は世界を描いた。神の庭を真似て、彼は言葉で天地を作り、草を作り、生き物を作り、すべてに名前をつけて、そして彼は力尽きた。
彼は槍をその地に打ちつけ、世界が揺るがないようにして、その身を地に倒した。

「彼の髪の毛は緑色だったはずだ」
ギルドの長は言っていた。
「そうしないと、巨人の墓標であるグリーンヘッドに、そんな名前はつかないだろう？」
そう言って、それから笑っていた隊長の顔は、ぼやけているというよりも歪んで思い出すばかりで、神話以上にはっきりとしない。
竜と槍。その言葉で思い出すのは、もちろんあの夢だ。ああ、だめだ。あれを思い出すと、また俺の何かがかじり取られたような感じがする。それに多分この神話とこれとは関係ないだろう。あったとしても今の俺には分からない。
今の俺。獣と人間は何が違うのだろうか。竜になって何が変わったのか、変わっていないのか。今こそ考えるが、人間のころも含めて、俺はどうして生きているのだろうか。
俺の日常と常識は崩れて、俺は竜になった。何からも自由になって、誰からも恐れられる、どれにも束縛できないものになった。そう、見方が変わったのだ。今までの俺と言う目線はたしかにそういったものだったが、この長い首の先から見る目線は、また違う世界を見せる。考え方も変わった。
俺は獣の心を俺と同じように持ちながら、まるで偽善者だと言うように偽り、振る舞い、上辺だけの接し方をしている人間というもの

に驚き、憤りを感じている。見たくないものは見ず、欲しいものは手に入れ、自分の死だけを恐れる。
では自分は人間でなくて幸せだとでも言うのだろうか。一体どこから見れば、正しく認識できるのだろうか。竜の目を持ち、人間の命を持つ俺は？
ああ、体が熱い。俺は人の心を持つ竜。人の生活から抜け出した人間。だからもう、人間というものに束縛される必要はないのかもしれない。いつだって俺は自由を求めていた。枷（かせ）がはずれたのだ。

赤い光を終点に、私たちは無色の道を進もう
下がり続ける温度を感じ、汚れたハチマキを手に取る
聞こえない嵐の音と、聞こえる自分の鼓動
偽れた操れる香りも、正しさを知らなければそれも真
さびた剣を舐めれば、必要な力を得ると言うのか

振り往く天の涙
無に返す炎
何も知らない子供
秩序を乱す者の首
光と闇
灯篭と金属
翔る命は何を求める
導くは　誰も知らぬ　真の名前

手のひらの　ひとすくいの水
乾くまで待つ子供も　見ているのは真実
草木に与える青年も　見ているのは真実
自身の喉を潤す大人も　見ているのは真実
子供の口に運ぶ老人も　見ているのは真実

だが真実はそこにあって　どこにもない。
その水は　そこには在り続けない
真実など　想像の内にも在り得ない

往く疾風を風切りに　すべては虚空でしかない
真実など　誰も知らない
真実を探す事も真実だから
その内側にいる限り　全体を見回すことなどできない

俺はもう二度と、人間には戻れないだろう。
人を殺してしまった。俺は止めることができなかった！
あれから、どれだけの時間が経ったのか。今の今まで、俺は考えると言う事を忘れていたから、俺の体が今まで何をしていたは知らない。どれくらいの獲物を狩ったのか。もしかしたらまた人を殺していたのかもしれないし、他の竜の求愛に応じていたのかもしれない。元の人間であった自分を、何だったのかということも、もう俺は覚えていないのかもしれない。俺自身に与えられたものは、獣への堕落。
人間だって、許されない事はしてきたはずだ。いや、何を考えているんだ。人でなくとも許されない事をしてしまったのだ。だが、誰から見たときに？今までの俺の生活と、何が違うのかと問うと、答えが出てこない。人も動物も同じにしか見えない。だから、思い出そうとしなければ、きっとまた忘れて人を殺すだろう。
もしかしたら以前にも人を殺してしまっていて、ただそれを忘れているだけなのか。

俺は、空を飛んでいた。いつもの一日だった。いつも？違う。俺は人間に戻る方法を考えるのはやめていた。人間だった自分について考えていた。

葉も落ちた味気ない木々を眺めながら、そろそろ頂上への旋回を始めようと思ったころ、見慣れない生き物の影が俺の意識に入り込んできた。森の中には奇妙な生き物はたくさんいたが、それはさらに奇妙だった。二本足で歩行している！人間だ。
なぜこんな森の奥深くまで人間が入り込んできたのか。それもまだ幼い子供ではないか。手には弦が切れた弓を握っている。心臓の音に耳を傾けてみると、かなり緊張をしている様子だ。狩りの途中で、親か狩人からはぐれたのだろう。どちらにしても、実に不幸だった。
そこで恐ろしかったのは、俺はその子供にも、いつもの獲物と全く同じ衝動が芽生えたと言う事だ。だが俺はそれを何とか押さえ込み、とりあえずは空を飛びながら様子を見ることにした。
自分の以前の姿。そう、人はあんな歩き方や仕草をした。どんな細かい事も器用にこなせる手に、握る汗。警戒する目線。どんなところから何が来るのか分からない。無知は常に恐怖を作り出す。そして、自分が無力でないかという不安。俺にはそれを抱いている事が分かる。
少年は長い間右往左往しながら森の中を徘徊し続け、やがて疲れたのか、森の中の木の根元に座り込んだ。はるか遠くにいるというのに、疲労と恐怖による荒い息と、それから何か聞こえた。
「・・・・」
何か言った。だがとっさに言葉を思い出せない。そう、どういう意味だったか。しばらく考えた後、俺は気がついた。俺は、文字こそ忘れてはいなかったが、声というものは忘れてしまっていたと。
「恐ろしい事だ。」
恐々と、試しに喋ってみた。なぜかは分からないが、竜になって初めて声を出した。人間のころとは全く違う低い声で、長い首に響いて出てくる声だ。ともあれ、言葉をしゃべれないわけではなくて安堵した。
俺は旋回して高度を下げ、いつもの狩りの様に気配を消して、少年の座る木の裏に無音で着地した。見てみたかった。人間を実際にこ

の目で。
この重量で押されても音を出さない木の根は、着地する前に確認していたから、羽が作り出す風が木々の葉をささやかせただけだ。
「父ちゃん・・・」
泣いているのか。俺も何度泣こうとしたことか。だが嘆くことさえできなかった。すぐに、寂しさが俺の体を押しつぶした。
人間。知らない間に、俺が思っている以上に、俺は人間から俺自身が離れてしまっていた事を知った。すべすべした肌、髪の毛、ありとあらゆる人であるものが懐かしかった。俺はこの目で見てみたくてたまらなかった。この木の裏側にその存在がいるのだ！
俺はゆっくりと四足歩行で、少年いる木を中心に回っていった。そしてすぐに、少年と目が合った。
少年は木の根の間に体をうまくはめ込み、足を腕で囲って、見開かれた黒い瞳で俺を見上げていた。自分が竜になった時と、逆転した立場にあった。
俺はゆっくりと顔を近づけ、匂いを吸った。子供の人間の匂い。あんな匂いだったのか。
本当に、羨ましかった。俺を見て恐怖に体をこわばらせれる姿。叫び声をあげようにも恐怖で何も出てこない声。驚愕と絶望の入り混じった、涙に濡れる顔。俺にはもうない。そういった感情も表情も仕草も何もかも。
そして一瞬後、俺はその少年を恨んだ。憎しみと怒りで、俺はうめき声を少年に放っていた。自分と人間という境界線が、はっきりと見えていた。
「お前は・・・」
何を言おうとしたのか、忘れてしまった。言葉も、そのときには思い出せなかった。そのまま俺の人間の部分は、あっと言う間に小さくなり、蝋燭の炎のように、消えた。少年の瞳に映る俺の目は、真っ赤に燃えていた。
あとは、獣と獲物の関係だったから、書くまでもない。少年はひた

すら俺に懇願してきて、声にならない声で泣き叫んで、しばらくして静かになった。
ただ、俺はがむしゃらに喰らいついて、何のこともなく、いつものように美味かったのが悲惨だ。
そして今、あの少年の血と肉で、俺は生きている。

何も変わらなかった。何も特別な事は起こらず、いつもの日常が続いた。あんなことも、まるでいつもの事だったかのように、普通であるかのように過ぎ、続いている。
あれから数日はさすがに食欲はやってこなかったが、それも今ではいつもどおりに戻っている。欲にとらわれているときには家畜を食い荒らすことも少なくはない。
本当にこれは現実なのか。なぜ今生きているこの世界は俺が生きるのを許しているのか。それとも、人を喰う事も、今の俺にとっては狩りをするのと同じくらいのものなのか。そう、感覚では何も違いはない。
もはや俺自身で自分を判断できなくなった。きっと今の俺の考え方は、人間だったころよりもずいぶんと獣化している。字を書くことの重要性も、最近疑うようになってきた。言葉も何のために必要なのか。気づけばそう考えてしまっている自分がいる。

まだ、俺は文字が書けるんだな。不思議だ。獣と同じ行動をして、物を考えられるなんて。人の技が使えるなんて。
洞窟の奥で、しかもこの巨大な自分の影で、普通なら何も見えないはずのこの床にさえ、字が書ける。人でない力で、人の文字を書く。
だが何もかも慣れてしまった。今の俺の心の形は竜の形をしていて、どんなに残酷なことでも、まるで動じることがない。体を引き裂くことに快感を覚え、生き物を食らうことに喜び、まるで狂っている。

だが、それは普通ではないか。人間のころだって食べることは喜びだったし、料理することは楽しかった。ただ規模が変わっただけで、ただそれだけ。俺が恐れることなど、何もなかったはずだ。ただ、慣れてなかっただけ。そう思うと気が楽になる。

字を書くことに疲れた。

森は、真っ白な雪に覆われている。白い雪の荒野。ふんわりとやわらかな衣で全てを覆い、生き物に戒めを与える。

俺は今日そんな雪の中で一匹の小さな、青い小鳥を見つけた。乏しい餌を探している最中だった。

鳥は、羽を傷つけて、雪の上に落ちていた。まるで何気なく捨てたゴミのように、簡単に。飛んでいる最中に強風にでもあおられたのだろうか。

とても小さな心音に、雪の冷たさがじんわりと近づいていく。とてもとても小さな荒い息。白い雪に滲む赤い点。

今まで、何も感じていなかった俺の心に、再び人間の感情が戻ってきた瞬間だった。実にかわいそうだった。もう空を飛べないということがどれだけ苦しいことなのか、もう同じ仲間と共にさえずることができないことが、どれだけ悲しいか。

俺は前脚で雪ごとその鳥を掬い上げると、急いで飛び立った。字を書いていて正解だった。この腕はかなり器用になっている。

洞窟に戻ると、とりあえず必死に息を吹きかけて小鳥を暖めた。俺の体は冷たいが、息は違う。あっという間に雪は水となった。

その間もこれからどうしたらいいかいろいろ考え、とりあえずこの小鳥が食べる餌と何かしらの薬が必要だと思った。このときは必死で気にしていなかったが、ひさびさに人間の知識を使ったように思う。

一刻も早く見つける必要があった。とはいってもこんな時期に木の実などを探し出すのは至難の業だった。雪は“竜の視野”からさえも地表を隠し、全く見ることはできなかったし、薬草だって人間

のころのあいまいな知識しか持ち合わせていなかったから、冬でも生えることができる場所を見つけるのにもとても苦労した。ちょうど一日、ずっと探し回った。

目的のものを見つけ、俺は急いで洞窟に戻った。正確に言えば何度も様子を見に戻っていたけれど、いつ死んでももちろん不思議ではなかったのだ。竜の体で薬を煎じるのは非常に難しかったけれど、俺はひたすら岩と爪で薬草を、ゆっくりとすりつぶしていった。絶対にあきらめたくはなかった。

木の実の粉は結局食べることができないようだったけれど、薬は傷にしっかりと塗ることができた。異物も入らないように、細かい作業をするのは、本当に久しぶりで、人間の思いと知識が残っていたことに、本当に涙が出るのではないかと思えるほど感動した。小鳥を助けるなんて、とても人間らしいではないか！

今、小鳥はやはり前と変わらない様子でいる。時々体を温めてやってはいるが、これからどうなるかは全く分からない。

小鳥が死んだら、俺は今度こそ本当に竜になってしまうのだろうと、なぜかそう確信した。

あれから一週間がたった。なんと俺はその一週間、何も食べず、ずっと小鳥を見続けていた。なぜならば、小鳥は日に日に元気を取り戻していったからである。一瞬たりとも目を離したくなかった。それは不安で心配という理由から、回復を見逃したくないという思いまでであったからだ。

俺は昨日、鳥を前脚で掴んで空を飛び、木の実がたくさん落ちている場所に連れて行った。その間も小鳥は全く俺におびえる様子はなかったし、それどころかチイチイ俺に向かって鳴いてくるのだ。俺の周りには、この小鳥の仲間だろうか、他の小鳥が俺を追ったり回ったり追い抜いたりして、たくさんの鳥達が、まるで季節外れのように飛びまわっていた。少し目障りに感じて何度も咆えて警告したが、鳥達はそれに答えて鳴くばかりだった。まさにため息をつい

てあきらめた。

小鳥はすっかり元気になったようで、始めは軽く飛び上がる程度だったが、いつか木から木に飛びつれるほどに回復した。俺はずっとその様子を眺めていた。本当によかった。

だが俺には重大な問題が残されていることに、いまさらながら気づいた。俺には、冬を越えるための食料がない。

だめだ、何日も飛び回ったが、獲物一匹見つからない。うさぎはこの時期別の山に移動するという事を知っていたが、実際に自分に影響が出ると思った事はなかった。だんだんと頭がぼーっとしてくる。今日は川沿いを探してみようと思う。

小鳥は元気に飛び立っていった。これからも空を飛び、仲間と共に暮らしていくのだろう。

雪に閉ざされた森にある、岩でできた洞窟。青い竜は、冷たい床の上で静かに横になっていた。体は衰弱し、息は深くゆっくりだ。ずっと、外の雪を見続けている。

小鳥を助け、その代償に死ぬ。自分の命を代償にほかの命を救うことのできる人間の心とは、一体何なのだろうか。だが、決して後悔していない。それがきっと、人間の心の価値なのだと、竜はゆっくりと考えていた。

それから数日後のこと。その日は猛吹雪だった。洞窟の入り口を過ぎる風が渦を巻き、轟々と音を立て、また外は真っ白で何も見えなかった。

寒い。竜の体になって、初めて感じた寒さだった。地面からでも、空気からでもない、自身の体の芯が、心から、あの吹雪に晒されているように凍えた。そして、眠くなった。

次の日の朝。竜が目を開けたとき、何かが入り口に落ちているのが

見えた。まるで何気なく捨てたゴミのように、普通にそこにあった。
竜は目を見張り、一瞬で体中が沸騰するのを感じた。まさにどうしたらいいのか、何を思ったらいいのか、分からなかった。
助けた、あの小鳥が洞窟の前で倒れていた。直ったばかりの傷が再び開き、見つけたあのときのように、白い雪を赤く染めていた。なぜここに来たのか。竜にはわからなかった。だがその傷は前以上にひどく、もう助かる見込みはなさそうだった。
嘘だ。こんなことが、こんなことがおこるはずがない。
鳥は竜に小さく一つ鳴いた。まるで、今までありがとう。恩返しにじぶんを食べてください、とでも言うように。いや、そんなこと言うはずがない。ただ俺が飢えているからそう思えるだけだと、頭振ってその考えを追い払った。
竜は両手で前と同じように、ゆっくりと、前よりもやさしく小鳥を掬い上げた。赤く染まる雪、その上で横たわる青い羽、そして、竜を見る黒い目。その目に映る、竜の姿。
このまま痛みと寒さを感じ続けるよりは、自分に食べられたほうがいいかもしれない。そう、命の循環、自分の一部となって、新たな命として生き続ける。そのために今、小鳥はここに来たのではないか。
竜はずっとずっとそのまま時が止まってほしいと願った。このまま永遠に迷い続けてもよかった。だが小鳥に苦痛を、寒さを、死えの恐怖を、永遠に感じさせることはしたくなかった。

竜は、小さく小さく、小鳥に嘆き、そして鳥を食べた。彼は何かを堪え、耐え切れず咆えた。死を告げる教会の鐘のように。今、一つの命が死んだことを伝えるかのように。そこに、死を悲しむものがいるということを、伝えるかのように。
その思いは何なのだろうか。鳥一匹食べたところで何も変わらない。相変わらず自分は衰弱しているし、相変わらず餌も存在しない。でも竜の心は一杯だった。自分の血となり肉となった一匹の鳥。彼の

ために自分は生きなければならないと思うだけで、彼の心は温まった。生きなければならない。竜としてでなく、“自分”として。

前に食べた少年と、あの鳥とは、何が違って何が同じなのか。少年を食べても何も変わる事はなかったが、たった一匹の鳥が、竜を満たしている。

そもそも小鳥を助けることは正しかったのだろうか。自分の優しさが、結果的に鳥を苦しめた。自分の持つ優しさとは一体何なのだろうか。結局は不要のものなのだろうか。雪が解けるまでの間、竜が考え続けたが、結局答えが出せなかった。

それから、いろいろな鳥たちが竜の元に集まるようになった。竜の角や体に止まって羽を休めても、竜は彼らを傷つける事もなく、彼らのさえずりをいつまでも聞いていた。それが、自分の中にいるあの鳥に届くようにと。

人とあの鳥と、何が違うのだろうか。しかし鳥は俺のために死んでくれた。俺の哀れみも、この姿では凶器にしかならないのかもしれない。

人とは、何なのだろうか。人の持つもの、人の強さとは何だ。心とは？知識とは、結局何のためにある？

俺は元の人間というものを信じることができなくなった。この獣の中で必死にあがく人間としての俺。もう嫌だ。今獣であることも、自分が人間であったことも、俺は嫌だ。

人のころの記憶、覚えているものはいくつあるのだろうか。広い平原、牛舎の牛たち、遊びまわった友達、両親・・・存在は思い出せても、一体今まで一緒に何をしてきたのか、何をしてくれていたのか、まるで遠くにある陽炎の向こうにあるもののように、思い出す

ことができない。人間の頃の事。そう、餌だった頃のことだ。そうだ俺はもう、思い出したくはないのだ。人間ではないから。人間ではない？
恐ろしい。だがこの恐ろしさにも苛立ちを覚える。なぜ俺が恐れなければならないのだ。弱く、ずるく、そして何もよいものを持たない者などに恐れるということが、たまらなく嫌だ。
これは、正しい思いなのか。ただこの姿になったせいで、俺の考えが変わっただけなのか、それとも蝕まれているのか。俺は一人だ。もはやこれを自分自身で判断することはできない。やはり、誰かに相談しようと思う。親父だったら何か言ってくれるかもしれない。人間でも、怒りを感じない。昔はあんなに嫌な人だったのに、今では一番のよりどころだ。明日の夜、こっそりと村に下りてみよう。
そして、最後の行は赤の血でべったりと、こう書かれていた。
――――俺は人ではなくなった　だから　今日から俺は竜になる

青き竜

春も終わり、青い葉が繁々と風になびいている。森と森の間にあるこの街道は、物資を山奥の集落に運ぶための唯一の生命線で、多くの商人が行き交う道であった。そう、平年ならば。
「妙ですね。この街道、こんなに湿気た場所だったかぁ？」
　その道に、一台の獣車が通りぬけていた。二つの車輪のついた荷車を、白いもじゃもじゃした四速歩行の生き物がゆっくりと引っ張っている。その生き物の上に、大柄な男がまたがっていた。
「最近はこの街道を通ったものが行方不明になるっていう噂で、荷物を運ぶ商人がめっきりいないそうだ」
「そりゃこっちとしゃ商売繁盛だねぇ」

低くゆっくりとした声とは対称的に、荷車で寝転んでいる小柄な男は空返事をした。
本当に静かだ。この時期ならば、春の始めのころの食料などが尽き始めて、次の物資を運ぶ荷車をよく見かけるはずだが、全く人気がない。木々の葉がささやく音が何かを告げていると思えるほどに、昼下がりの不気味さだった。
「本当に気をつけたほうがいい。何か悪い予感がする」
「なーに、何か起こる事なんかありゃしないさ。きっとこの道の途中で迷子になる馬鹿どものことを大きく騒ぎ立てているだけさ」
たしかに、始めのころはそう思った。しかし今思えばこの輸送の報酬は妙に高かったし、依頼者も妙な顔つきをしていた。そしてこの雰囲気。手綱に力がこもった。
「だと、いいのだがな」
街から街への旅というものは非常に厳しく、ありとあらゆる知識と技能がなければ簡単に命を落としてしまう。ほんの少しの前兆でも見逃してしまえば、危険に遭遇してしまう。そう、もしかしたらあまり気にはしていなかった妙な噂が、その前兆であったのではないか。その不安が伝わったのか、白い獣は小さく呻いた。
「ほら、兄貴が弱気だからのろまのシープも嘆いているじゃないか」
いや、それは違った。今までやさしく吹いていた風が突然突風となって二人を襲ったのである。土埃があたりを舞い、荷車は一瞬浮き上がって、そして斜めに地面に叩きつけられた。
「大丈夫か！」
暴れて逃げようとするシープの手綱を必死に引っ張ってなだめようとするが、ものすごい力に、乗っていた男は振り落とされてしまった。逃げてゆくシープを目で追った時、男の目に空よりも青く、太陽よりも輝いた光沢の鱗をもつ巨大な物体が、空から舞い降りてくるのが写った。そいつは太い足で荷車を小石のように一蹴し、地面に倒れた小柄な男に顔を向けた。
二人とも息を呑んだ。こんなところに、竜が！

逃げろ、早く。喉がはちきれるほどに大柄な男は叫んだが、その言葉が届く前に、地面は赤い血でいっぱいになった。聞きたくもない不可思議な異世界の音を発しながら、あっという間に一人を喰い終わった。わけも分からずその様子を見続けた男は、吐き気と眩暈を同時に味わった。

に、逃げなければ。心の中で何度も叫んだが、体はまさに石のよう。体中から脂汗が滲み、息は上がっている。

青い体に赤い血が飛び散り、その色を際立たせていた。そんな竜はこちらに目を向けると、ゆっくりとこちらに向かって歩いてきた。そして目が合ってしまう。まるで息も心臓も、その瞬間に止められてしまった。太陽が竜の体に飲み込まれ、その巨体は漆黒の色に染まって見えた。

その竜は軽く呻いた。そして近づいてくる、血糊でべっとりとなった真っ赤な口先、ねっとりとした涎が伸びる白い牙、奥底まで飢えた真紅の眼、そして――――

竜は、前脚についた血をきれいに舐めとった。そして、羽を大きく広げ、再び空に舞い上がった。この竜がこうやって飛び上がるごとに感じる妙な嫌な感覚が罪悪感だとは、もはや理解できていない様子だった。

色とりどりの鎧がこすれる音が、いつもの森の静寂を破った。木々の合間から際込む光が、彼ら森の侵入者の体を点々と照らし、遠くから見たらいろいろな色の粒となって鮮やかに見えただろう。

彼らは誰一人として語る事もなく、ただ黙々と森を進んでいた。先頭を歩む赤い鎧を着た背の高い大柄な騎士が、歩みを止める。後続に続いていた数人の騎士もまた、歩みを止めた。

「どうしました、フレス隊長」

すぐ後ろについていた騎士がそう尋ねるが、フレスと呼ばれた体

つきのいい大柄な騎士は、ただ静かに、何かを待っているかのように一切の動きを止めた。
眼を閉じ、意識を広く広げていく。木々織り成す水の流れから、自分の鎧が巻き起こす小さな風の流れまで、まるで全てと始めから一心同体だったかのように、まるで初めから自分というものはここにいて、ずっと今踏みしめている地面と一体であったかのように。
「ここが、私たちが目指していた場所だ」
後続の騎士たちは突然、緊張感を増し、腰にある剣の柄に触れる。すぐ後ろにいた騎士とフレスだけは、普通のままであった。
「ここに、竜が来るのですね」
「ああ、間違いない。お前たちも感じるであろう。この鎧はみな竜の鱗でこしらえたもの。互いの存在が近づいてきているということを」
実際は、それが分かるのはフレスだけのようだったが、その言葉に間違いはなかった。突如嵐のような陣風が地面の枯葉を巻き上げ、草木を大きく揺らめかせた。騎士たちは少しの予兆も見逃すまいと身を構えた。
フレスのちょうど手前の空から、青い何かが舞い降りてきた。羽を一振りするごとに、立っているのが辛くなるほどの風が吹き荒れる。
地面に脚を下ろし、風がやむまでの間、空から舞い降りる存在をただ見ている事しかできなかった。降りてきた場所だけ木々が折れ、ぽっかりと空を覗かせる天穴となる。空からの光に、影となっていた森の中で、その青が際立って美しく見えた。鱗一枚一枚が竜月色にきらきらと輝いている。
竜はため息をついたように、飛んできた事に疲れたかのように、大きく息を吐いた。
そして、フレスと目が合った。その威圧感に、後続の騎士たちがたじろいで、鎧の音が鳴る。だがそれだけで、竜もフレスも、ただそれだけで会話してるのではないかと思えるほどに、互いに何も動

かなかった。竜と人間がただそこにいるだけの話で、世界は何も変わっていないと、互いに主張するかのように。
やがて、竜が口をゆっくりと開いた。
「竜の鎧を纏いし者達よ。私に何の用があって来た？」
竜がしゃべるということに、フレス以外の誰もが驚いた。フレスもまた、竜のようにゆっくりと口を開く。
「人語を操ることのできる、知識を持つ竜が、何ゆえこのような人殺しを犯すのだ。そのような竜は、決して人を殺めることはしないはずだ」
全く竜に圧されていない。いや、まるで人と話しているかのように、平然と話しかけた。
「それは私の自由ではないのか。お前は私に食べるものを制限する権限があるというのか」
「そうではない。だが、もしこの先も人を喰らい続けるというのならば、我々はお前を殺さなければならないのだ。青き竜よ、私はそのようなことはしたくはない」
竜の瞳が少しずつ赤に染まってゆくのを見た。
「なぜ私はお前達に殺されなければならない理由を持っているのだ。殺された人間に関わりのある者が自分に恨みを持って挑むならば、大いに受けよう。だが、何も関係のないお前らがなぜ私を殺しに来るのだ」
「それは、お前が将来さらに人を殺すからだ」
フレスは淡々と告げた。
この竜は何か欠けている。フレスはそう思った。いや、欠けているのではない。この竜はただの獣と同じではなく、人を殺すことにさえも、しっかりとした理由を持っているのだ。
竜は何かを考えるかのように、静かにしていた。だがそれほど長いという間もなく、再び竜はフレスに目を合わせず語りだした。そう、そこに立つ人に対してではなく、まるで自分自身に対して言い聞かせるかのように。

「そうだ。それはもちろん分かることだ。だが、今の自分には分からない」
竜の口が開いた。口の周りに輪を描くように、一瞬だけ赤い不可思議な文が描かれた。次の瞬間、輪の中心から炎が噴き出し、何をする間もなく騎士たちに降り注いだ。竜の鎧が熱を打ち消そうとするが、それ以上の炎に、全員は一瞬で黒い塊と化してしまった。
轟々と燃え上がる草木を見ながら、ただ竜は一言、つぶやいた。
もう、今の俺には分からないのだ。

光が、川の流れのように流れている。緩やかな湾曲を描きながら、目的の場所を探し迷走し、繋がってゆく。星の数よりも多い静かな瞬きと、揺れて往く小波の感情が銀河よりも美しいものとなって存在していた。
その光の流れの中をゆっくりと漂いながら、その光の流れの一部となっていた。光は時に怒り、時に笑い、時に願っていた。そう、自分だけでなくたくさんの意識や思いが流れている。
竜の光道。どれだけ離れていようとも、この道に身を預ければ、互いの声を聞くことのできる跳躍の筋。体に触れては流れてゆくたくさんの光の粒を、彼は静かに感じ続けていた。
しかし、彼は他の光の粒とは、少しだけ浮き出た存在となっていた。縄張りに関することや求愛など、大抵の者達が読み取っているものを掬い取ろうとはせず、ただ今の自分は竜として満足である、と感じていた。そうすると言い返されるのだ。お前はなぜそんな事を考えるのだ、と。なぜ考えるのか、なぜ自分がほかの存在と違うのか、それがよいことなのか、彼にはわからなかった。
ただ、そのことに関心を持つ、ある一つの存在がいた。
(俺は、今の自分に満足ではない)
それは、いつも彼に言い返す存在だった。静かだが、その内側に強い意志を秘めた意識は、ある日彼に語りかけてきた。言葉ではない、意思を通じ合わせてだ。

（竜という存在は、常に不満しかないとは思わないか？）
不満。たしかにそうだ。常に食べ物には飢えているし、少しでも気にいらないことがあればすぐに怒りだす。だがそれが何だというのだ。今も昔もあまり変わったことではない。昔？昔とはどこのことだ？
（私は、なぜいつもあんなことを考えているかは分からないが、そもそも自分が誰で、どうして今ここにいるのか、私にはわからないのだ）
彼は自分が思っているままに、素直に意思を返した。だが、返ってこない山彦のように、それから何かを伝えてくることはなかった。
だが、自分が思っていたよりも遅れて返ってきた山彦のように、ある日突然返答が来た。
（その答えこそが、俺が今不満である理由なのかもしれない）

星の光が瞬き、その光のみで森を照らす夜のこと。青い竜がいるくらい洞窟に、一頭の来客が訪れた。
青い竜が地面に伏していた首を上げるとを入り口にまるで自分の姿を映したかのような、緑の竜が立ちはだかっていた。紫の瞳が、青い竜を捉えている。
（お前というものを是非見たくなったからな。俺とお前はあまり遠くにいるわけではない）
彼にとって、自分以外の竜を見るのは初めてであった。ただその様子を見るばかりで、しばらくの間暗い沈黙が続いた。
（お前の名は？）
「名前？」
緑の竜から強い驚きの感情が伝わってくる。
（お前、人語を話せるのか。まるで知竜のように）
「言葉は、忘れてはならないものだったから、私は忘れていない」
緑の竜は静かに奥で羽を休めている竜に近づくと、まじまじとその様子を観察した。

（・・・やはりお前は不思議な奴だ。私の名前はラグース。緑の羽だ）
そう伝えて、少しだけ羽を広げた。
「名前。名前など不要なものではないのか。お前は名前を何に使う？」
（人が俺のことをそう呼ぶのだ、青の羽よ。言霊を操りながら名を知らないとは、ますます不思議な奴だ。人語こそ不要のものに思えるが？）
それでも、彼は言葉が不要なものだとは感じなかった。青の竜はゆっくりと体を起こし、ラグースと名乗る竜と向かい合った。
「伝える手段、記録する方法。私は忘れてはならないものだと思っている」
そのとき、二羽の黄色い鳥が洞窟を訪れ、青い竜の周りを旋回してから、真っ白な角に止まり小さく鳴くと、羽の繕いを始めた。ラグースは獰猛な食欲に駆られたが、青の竜はまったくそんな様子は見せなかった。
「おかえり。今日はここで休むのかい？」
ラグースはまさにその光景に圧倒されていた。そう、竜と小鳥が対等の立場にいる。互いに敵意のないという雰囲気。
（その鳥はお前を恐れないのか。人さえも恐れる存在が）
「この小鳥たちの仲間が、私の中で生きているからな」
（生きている？それはどういうことだ）
（さぁ、それは分からない）
従来の意思を伝える方法で、返答が返ってきた。よく見るともう二羽の小鳥は静かにしている。言葉を話せなくなったのだ。だがラグースは、そのことに妙な感じを覚えた。そう、例えるならば、まるでもったいない獲物を捨てるような気分。
（――――お前が言葉を持っている理由が、なんとなく分かった気がする）
ラグースは音を立てないように洞窟から出ると、ゆっくりと飛び

立った。
（また会おう、青の羽よ。俺はお前が気に入った）
その言葉に肯定の感情が返ってきた。

（俺は今まで、自分が誰であるかなど、考えたことがなかった）
そう突然伝わってきて、青い竜は顔を上げた。
暗い空からはずっと雨が振り落ちている。いつものように崖の上で休み、いつかの夢を見ているときのことだった。
（お前がもしその答えを見つけたならば、俺にも教えてもらいたい）
（ああ、もちろん。だが私には、これは永遠に考え続けるということこそが答えだという気がしてならない。私は今までずっと知らなかった。そして今も知らない）
（それもまた答えだとすると、この問いに意味はあるのか）
青い竜は立ち上がった。いつもなら周囲をすぐに感じることができるが、今は角が濡れてできなかった。だから、その相手がすぐ後ろにいるということにも、今まで気づかなかった。
「実際にそこに存在するという証明は、なかなか難しいものだな」
（雨の日に外に出ることを恐れない竜など、竜ではない）
「それは私からも言えることだ」
彼が後ろを振り向くと、緑の竜の手の上には、一匹の生きた兎が乗っていた。降る雨を体で防いでいるようで、兎はやはりおびえている様子はない。
（俺はもしかして、何者にも大きなものではなく、この兎と同じ存在ではないか？俺は何者にも自由ではなく、食い物がなくなれば死ぬしかない。そう考えれば、喰らう相手さえも、俺は同等なのかもしれない）
「そんなことは当たり前だ。なぜそんなことを聞く？」
緑の竜は小さな兎に目を向けた。何も知らないかのように、後足で首を掻いている。なんとも普通の光景。ただそれが、自分達が普段空を飛ぶことと、違いはないという。緑の竜は関心の思いを伝え

た。
（なるほど、青の羽よ。お前は真実を知っている）
緑の竜は兎を壊れそうな小さな存在のように大事に持ち上げると、ゆっくりと空に飛び上がって行った。
（ラグースよ。私は真実など知らない）
真実など分からなかった。だから、なぜ自分たちは兎より強く、こいつらの痛みを知らず、こやつらを食わなくては生きていけないのかという自問に、答える事はできなかった。だが、真実は学べないがそれの虚像だけで暮らさなければならない。その狭さに、彼は憤りを感じた。

それから彼らは、毎日のように会うようになった。彼はラグースに言葉を教え始めた。習いたいというのだ。思うだけで心を通じ合わせる事ができるため、言葉を教えるのは簡単だったが、発音というものは非常に難しいものだと、互いに知ることとなった。教える側も教わる側も、まさに狩りよりも必死に行っていた。
「に――んげん、わ・・・なぜ・・・」
（――――人間はなぜ、言葉を話せるのだ）
発音できないことに耐えかね、やはりと心で語りかけてくる。
「分からない。だが、人間に言葉を与えたのもまた真実」
と、そう仮定するしかない。ラグースにも分かっているようだった。
青の竜には暇があれば鳥達が集まり、またその本人も鳥を食べようともせず、鳥達と共に詠っている。そしてラグースもまた、その鳥を食べようとも不思議に思わなかった。そう、楽しそうだったからだ。
彼らは二人で狩りをすることによる効率性を考えるようになり、互いに縄張りに入り込んでも許し合う仲になった。

だが彼は次第に、他の竜と同じく、物事をあまり考えなくなった。
他の竜たちがなぜ効率的に狩りをしないのだろうかという事も気にしなくなった。ラグースがなかなか上達してきた言葉でどんなに話しかけても、一言か二言のみの返事になっていった。
ラグースは竜にはないはずの孤独感を得た。
「青の羽よ、言葉だけは忘れないようにしたほうがいい。忘れてはいけないものなのだろう。お前は忍ばせる者であるのだろう」
「そうだ、ラグース。言葉は忘れない」
そうだ、青の羽よ、お前は竜でなき竜であるべきだ。

第一部：一人の心一日記（後書き）

お疲れ様でした。

2．青い竜と黒髪の少年－上（前書き）

かなり荒いのでいつか書き直しますｗ

１１０４０４微修正

2．青い竜と黒髪の少年 ―上

真っ白な荒野、草木一本も生える気力もないに荒れた土の上、小さな木製の獣車の中に、数人の人が詰め込まれて運ばれていた。

人は年寄りもいれば、まだ幼い子供もいる。みな足枷や手錠をかけられ、ぼろぼろの服を着ていた。みな寝ているわけではないが無言で、目は意思を持っていなかった。ただひたすら、揺れる床に合わせて揺れていた。覆いの布を、風がはためかせるだけだった。

獣車が止まるごとに、集落を越えるごとに、中にいる人は減っていった。そのたびに、外では鞭が鳴る音か、名前を呼ぶ声がしていた。

その少年もまた、少年の存在そのものを支配され、奪取されていた。それは真の名と呼ばれる、その者自身を示す代名詞を、他人に知られてしまったからだ。

少年は何も考える事ができなかった。何も考えるな、と命令されていたからだ。

だから、その間の記憶は途切れ途切れだった。車が揺れるたびに砂の粒が床を流れていく光景と、たまに聞こえる外で何か売買している声と、それから犬のように何かを食べさせられた記憶しかない。あと、何かいやな事をされた、するように命令された気がするけれど、忘れろと言われたから忘れてしまった。あとはただ揺れるだけだった。

いつか、少年のほかに、その獣車のなかには誰もいなくなった。

それからまたどれだけの時間がたったのかは分からない。時間の長さは分からず、それがそこにあったという事だけしか分からなかった。あっという間だったのかもしれないし、もしかしたら数年もの間乗せられていたのかもしれない。

だが、獣車が揺れるのが止まった。外ではまた誰かが話している

声が聞こえる。そしてしばらくすると、少年は革で作られた獣車のテントから出され、地面に下ろされた。
そこは、森の中だった。空は明るいというのに、遠くは暗くて何も見えない。闇が引き伸ばされて、押し付けてくるようで、息苦しく感じた。
目の前に、大柄の男がやってきた。銀に輝く鉄の魔法防御鎧。腰に下げた鞘に刻まれた斬幻剣の紋章。誰でも知っている象徴的な姿。騎士だ。だが目線を動かす事はできないから、顔を見ることはできなかった。
「おい、ケン。お前はここに何をしに来たか分かるか？なぜお前だけは、最後まで売られなかったか分かるか？」
「わかりません」
僕は答えた。心の底から答えなければならないという命令が、体中を駆け巡る。真の名を呼ぶものは、全て主人だ。
「そうだよな、奴隷。だがお前はもう、ありとあらゆる苦しみから逃れることができるんだぞ」
笑い声が深い森に響く。周りには、同じ姿をした男たちが集まっていた。
「いやぁ、こいつだったら竜のいい餌になりますよ。飛び掛ってきたところが、罠だとも気づかずにね」
「竜の瞳は高価で売れますし、周囲の町の被害もなくなって、一矢二獣ですね」
「まあ、お前が食われて、気が抜けているときに、俺らがお前の敵を取ってやるよ」
「はい、ありがとうございます」
僕はただ答えた。主人をありとあらゆる方法で喜ばせるように命令されていたからだ。だが、何も思ってはいなかった。思えなかった。
「さっそくやってもらおうか。森を少し進んで、這いつくばれ」
「はい」

足の枷は、意識がなかったときに外したのか、いつの間にか外されていた。僕は進み始めた。そして命令どおり、しばらくしたら、地面に這いつくばった。

そこで、僕の背中に激痛が走った。後ろから背中を斬りつけられた。だが叫びもうめき声も、真の名が許してくれない。血が背中から滴り、地面に垂れる。あまり深くは切られていないようだが、痛みでおかしくなりそう。

「殺しちまったら、喰いになんか来ないからな。血の匂いでおびき寄せるのさ。痛くなんかないだろ？」

「はい、痛くグッ・・・・ありません」

僕の背中を、服の上から容赦なく切りつけてゆく。その度に気が遠くなりそうになるが、そのたびに何かが意識を呼び戻させた。胃の中のものが出てくるのを必死に抑える。赤い血が滴る地面が滲んで見えた。

永遠に続くかと思えた。だがいつかこの仕打ちは止み、あとは背中を暴れまわる痛みだけが残った。辺りはいつの間にか誰もいなくなっていたようで、鎧の音もしなければ、声も聞こえない。

それから這いつくばったまま、さきほどとはまた違った地獄が、僕をいつまでも苦しめた。瞬間的な痛みではなく、永続的に、それも広い範囲で疼く鈍痛。辺りは暗くなっていたが、目は地面しか映していない。これだったらどこかで意識を奪われ、奴隷として身を砕いたほうがましだ。僕はひたすらその感覚に耐えた。

不意に、どこからか音が聞こえた。圧倒的に巨大な物体が地面を歩く音、もしくは這う音。

本能的に、冷や汗が体中から噴き出した。

緑色の竜は、そこに人間が血を流して這いつくばっているのを見つけた。

何をしているのか。まあいい。食い殺してしまえばそれまでだろう、とでも思っただろう。あまり警戒もせず、意識で感知する範囲

から目で見える範囲まで歩いて近づいた。そしてそれを視認した。
竜はその少年に近づき、さっそく口をあけて、牙を突き刺そうとした。
刹那、地面から何かたくさんの物体が突然現れ、竜に剣を突きたてた。騎士たちは地面に穴を掘り、そこに隠れていたのだ。竜が雄叫びをあげ、刺さった剣を振り払おうと暴れまわった。二人ほど、剣を離し吹き飛ばされるが、残りはすぐに体制を立て直して剣を引き抜き、今度は急所である首の下に入り込もうとする。
竜はそれを阻止するために首を横に動かしたがそれはまずかった。横にいた騎士が今まさに、その方向から剣を首に突き刺そうとしてしたのだ。竜にとっては不覚にも、剣が首に突き刺さる。
その痛みと刺さった剣に意識が向いている間に、隊長と取れる姿をした騎士がすばやく首の下に潜り込み、剣を首に対して構えた。
だが、そこまでだった。次の瞬間、なんと空から紅蓮の爆炎が降り注いできたのだ。首を刺そうとした騎士は瞬時に炎に焼かれ、苦渋の叫びをあげるまでもなく黒くなり、鉄の剣が転がった。
他の騎士が驚愕の声を上げながら空を見上げると、そこには青い、もう一頭の竜がいた。体格は緑の竜よりも逞しく、大きく思えた。口には今放った炎の名残がのぞいている。
青の竜は、大きく広げられた羽と尻尾の反動で半回転して、他の騎士のいるほうに向き直った。
逃げる間も、怯える顔を示す時間さえも、駆けつけた竜は与えなかった。真っ赤な目は、怒りに染まっていた。
竜の口が開いた。炎の文字は一瞬で完成し、他の騎士たちは業火の中に放り込まれた。
辺りの木々に火が燃え移るころ、ちょうどよい具合に雨が降り始め、森の侵食を防ぎ始めた。
二頭の竜は地面に降り立ち、互いの角をぶつけ合った。そして、緑の竜は何もなかったかのように、焼けただれた騎士の一人を口に咥えてすぐに飛び立った。

僕は、動けるようになっていた。意志も元に戻り、見る物も自由に決める事ができる。僕の主人が、いや、あの奴隷使いの最悪騎士が竜にやられて死んだんだろう。しかし、自由になって襲ってきたのは喪失感だけだった。僕は生まれながらに不幸な運命なのだ。これでは何も考えられなかった頃のほうがよかった。

恐々と上を見て、僕の体は身を強ばらせた。そう、ちょうど真上で、緑色の幾千もの鱗が蠢いていて、もう少しで頭をぶつけてしまいそうだったからだ。そう、僕は今、竜の真下にいた。よく見ると、体中傷だらけで、赤の筋がいくつも鱗を這っていた。

竜の下から、別の青い竜がいるのが分かる。何かしているようだが、ここからは見えなかった。

何か硬いものがぶつかる音がした。何がぶつかったのかも分からなかった。しばらくどちらの竜も動かなかったが、しばらくすると真上の竜が少しだけ動いて、近くに転がっている焦げ臭くさい黒いものを咥えるのが見えた。確実に見つかる気がしたが、まるで気づいてる様子はなく、黒い物体に牙を食い込ませて、それから視界から見えなくなった。その一瞬の光景は、今まで僕がいた世界とはまったく違う世界だと、僕に教え込んだ。

予兆なく、突風が体を切り裂いた。全ての空気が僕の周りを縦横無尽に駆け巡って、枯葉や土を巻き上げる。目も開けられないくらいだったが、閉じたくはなかった。その努力の甲斐もあって、夜でも上の巨体が作り出していた陰が薄まっていくのが分かった。陣風も掻き消えてゆく。

そう、そして。あえて、ずっと地面を見るようにしていたけれど、いつの間にか僕の目はもう一頭の青い竜に向いていた。その竜は、僕が目を合わせるまで待っていたかのように、僕を凝視していたようだ。竜の赤い目が、闇の中でうっすらと光り浮かんでいる。驚いているのだろうか。たしかに竜の下にいて、気づかれないなど奇跡だ。僕も驚けるならば驚きたいと、他人事のような感覚で考えてい

た。
　その青の流線は、だからと言ってしなやかに動きだすわけでもなかった。僕が見ている間も、彫刻か何かのように全く動かなかった。そう、不思議だった。凶悪で貪欲と言われる竜が、ただひたすらに何もしないなど。
　だが僕は、自分の運命というものを知っている。僕は今までずっと、いるだけでも他の人を殺してしまう疫病神だった。だから、竜の一部となる僕の血肉こそ、僕の最後の運命なのかもしれない。
　僕は何も考えず、ゆっくりと上半身の服を脱ぎ始めた。薄い麻のぼろぼろの服一枚だけだったが、背中の傷の血が服にくっついて、一つの裂け目を剥がしていくごとに、鞭に打たれたかのような激痛が体中を走りぬける。体中が小刻みに震え、目に映るものが霞み、何をやっているのかさえも分からなくなりそうになる。だが、それでも手を止めはしなかった。これから竜に喰われて、この体を裂かれる痛みに比べれば、きっと蚊も刺すような痛みだろう。
　竜はずっと僕を見続けていた。前見たときと何も変わっていない。いや、目の色が少しだけ青になっている？そんな竜を僕は凝視した。荒い息を押し留めながら、半分切り裂かれた服を地面に置く。そして、竜のほうに体を向けて正座をした。
「さあ、僕を喰ってください」
　僕は訴えた。
「僕が生きる意味などないのです。さぁ」
　両腕を広げて、血だらけの体を見せ付けた。疲れ果てて、声はかすれてしまっているし、弱々しかったけれど、きっと竜から見た僕の体は多分、ローストにした豚のあぶり肉のように美味しそうに見えるんだろうな。
　僕は目を閉じた。自分の荒い息、深く静かに鳴り響く鼓動、この身を取り巻くこべりついたような闇と痛み。この世で見るべきものは見終わったんだ。聞くべきものも、感じるべきものも、もうすぐ終わる。

「我人(わひと)は、自らの死を自ら懇願するのか？」
低く、ゆっくりと深い声が、在るもの全てを轟かせ、僕の体を貫いた。僕はゆっくりと目を開いて、竜を見た。相変わらず竜は影に解けてしまっているが、星の光がかすかに竜の輪郭を示していた。
「我人は、自らの死を自ら懇願するのか？」
もう一度、その声は世界を揺らした。竜がしゃべっている。僕に向かって。獣が言葉を発する事ができるなんて知らなかったけれど、特別な存在である竜だから、きっと可能なんだ。
「はい、僕を喰い殺してください」
呼吸が整ってきてきたから、さっきよりもはっきりと言うことができた。
竜はとてもゆっくりと、僕に向かって近づいてきた。それと共に、竜に当たる星の光度が増して、鮮やかな青の鱗や、長い角、鋭い牙などがはっきりと現れた。僕もこれからあの逞しい肉体の一部になるんだ、と思うと、不思議と光栄に感じて、唾を飲み込んだ。
こんなに大きいと、なんだか僕が小さな虫になったようだ。そんな竜が、まるでため息のような音を発すると、大きな口を開いた。
「なぜ、我人は怖くないのか？」
「怖くありません。あなたが僕を殺すのですから」
竜は少しの間押し黙った。本当に怖くなかった。僕はどうしてしまったんだろうか。
「恐れを抑えてはいない。では我人は本気で死を願っているというのか。自ら死を考えているのか」
「はい、そうです」
そして僕はもう一度目を閉じた。竜のまねをしたわけではないがゆっくりと息を吐いて、続ける。
「僕自身のために生きる意味などありません。人のために生きようにも、みんな死んでしまいました。僕は存在する理由がないのです」
「お前が死を理解したとは思えない。絶望が我人を動かしている」
竜は何を聞きたいのだろうか。あの騎士たちと同じように、一思

いに殺してしまえばいいのに。背中の痛みも何もかも、苦しみも終わってほしいというのに。
「さあ、僕を喰らってください」
はっきりとそう言っても、しばらくの間何もかもが沈黙していた。風さえも流れていない。そう、もしかしたら時間が進んでいないのかもしれないと思い始めた頃、竜が動く気配がした。なんとなく分かる。竜が前脚を上げ、僕に向かって爪を向けているのを。
そして、僕の腹を何本もの何かが突き抜けていくの感じた。それと共に、焼けて燃えていくのではないかと思えるほどの痛みが体中を駆け巡った。僕の口からは叫び声が絞り出てきて、それに合わせて熱い何かが口から吹き出ていった。体の中を掻き回されている。僕が目を開けると、腹には白くて鋭い三本の爪が、自身を真っ赤に染めながら、僕の腹を貫いていた。僕の体はすでに串刺しにされたまま宙に浮いていて、目の前には竜の顔が見えた。目の色は透き通るような青色をしていた。
僕は、少しだけ笑った。少し、怖かったけれど、いまさら何もできない。無力感ではないが、なぜか、空しかった。僕はこの竜に感謝しなければ。僕は・・・・。
僕は両手で、僕自身に刺さる爪に触れた。そして、僕の意識は途切れた。

竜は、ただずっと、その少年の心音が弱くなっていくのを感じていた。腕を伝っていく生温かい血。これまで何度もすすってきた血、引き裂いた肉、聞いてきた叫び声。だがこの少年は死ぬ前に、なんと自分に笑いかけた。ただの食い物が、自分に向かって。
竜は少年を爪に突き刺したまま、その場から飛び立った。高々と空に舞い上がり、木々の頭上を滑る。空は大小さまざまな星が瞬いていて、その中を迷い星がお構いなしに横切っていた。
血が、少年の血が空から地へと流れていく。竜はその赤い一滴一滴を見続けていた。何か考えるというよりも、何かを感じていた。

やがて見えてきた、断崖絶壁の中腹にある、大きな裂目の入り口。そこへと静かに降り立つと、その中に入っていった。

普段、竜は獲物をねぐらの中に持ち帰ったりはしなかった。血で汚れると鱗が痒くなったり、ぼろぼろになったりするからだ。そして何より、ねぐらで血の匂いを嗅ぐのが嫌いだった。

竜は迷いもせずに、少年ごとねぐらの中に入った。奥まで行くと、前脚を地面に滑らせて少年を寝かせ、ゆっくりとその体から爪を引き抜いた。特有の鈍痛な音を発しながら、爪がゆっくりと抜けていく。少年を中心に濃い血の環がますます広がっていった。

完全に抜けると、竜はその爪をなめ始めた。目はずっと、死に逝く少年を凝視している。

心音は聞こえない。息をしているはずもない。体の血はもうほとんど抜けていて、完全な肉の塊と化している。それなのに、竜はその少年に近づいて、なぜか前脚で、少しだけ少年をゆすってみた。反応はない。

竜は、小さい声で少年に鳴いた。この感覚が、この思いが、この情が、何か分からなかった。

少年の下に滴っている血を舐めて飲み込む。いつもと同じ血だ。いつもの同じ人間の血。それが長い喉を流れていく間、竜は何かを思い出そうとし始めた。

少年の右腕に、ゆっくりと噛み付いた。だが引きちぎるほどではなく、すぐにあごを離す。少年の腕に、竜の牙が、そのならび通りに少年の皮膚を突き破るが、そこからはもはや血が出てくる事はなかった。

もう一度、その少年を上から見下ろす。何も光のない完全な闇の中。目で見るのは不適切だ。

しばらくの間、何もせずに眺め続けた。死ぬ事を希望し、希望通りに生きる事をやめた存在。竜は考え続けていた。これが人間の考える事なのか、と。

「我人はなぜ生きていたのだ。私はなぜ生きているのか・・・」
問いかけた。
自分の死さえも超越している存在。竜の意思で殺したのでなく、自身の意思で死んだ。竜は感じたことのない、何か冷たい感情に、感じたことがない恐怖を感じた。
竜は自分の右脚を出すと、少年と同じ場所にゆっくりと噛み付いた。自分を守っていた鱗が鈍い音を立てながら割れ、その中から血があふれ出してくる。その脚を少年の上に掲げて、滴る血を少年の噛み傷に垂らしていった。少年の腕に、一滴一滴血が滴るたびに焼けるような音が洞窟に響く。竜の血は不思議と少年の傷口から染込んでいった。
その様子を岩のように、彼はずっと眺め続けた。

無。
苦しみも、怒りも、憎しみもない。何もかもが胸から流れていって、何も残っていなかった。流れも、動きも、力も、冷たさも暖かさもない。均等な世界。どこからが自分の境界か分からない。全てが自分で、自分は全て。
その中で、何かが自分の体を焼いた。何もない世界でのその熱さは、何の障害のない直接な痛みとなって襲った。そしてそれは自分の中に入り込んできた。また痛み。どこにも逃がすことができない、足掻いたり、叫んだりする事もできない灼熱が右腕から自分の中に入り込んできて、それが体の中をめぐり始める。あれ、右腕？右腕というものが存在する。
いつか僕は、そののっぺりとしたものから逸脱していた。体中を駆け巡る何かが、僕をその存在から区別したのだ。一つ一つが体の中に入り込んできて、それが僕の、今まで巡っていた線に沿って流れ始めるのを感じた。どんどん僕の体が熱くなっていく。
だが突然、僕の腹の辺りに三つの大きな穴が開いて、その熱が抜け始めた。膨らんだものがしぼむように、僕の体は再び無の線に戻

り始めた。駆け巡る何かも、どんどん少なくなっていき、揺らめき、滲んでゆく。
体の中でその熱は、今までとは違う事をし始めた。今度はゆらゆらと蠢き始める。それは輪を描きながら僕の開いた穴に内側から近づき、その穴をゆっくりと塞いでいった。僕はそれをただ感じていた。
やがて、穴は完全に閉じた。僕の体の中は、再び前と同じようにゆっくりと熱に満たされていった。体の中心から足を通り腕を通り首を通り、巡っていくのがはっきりと分かるようになる。それは再び体の中心へと還っていき、いつの間にか心臓の鼓動が聞こえていた。その脈動は、今まで聞いたことのないものだった。
僕は、その音を生まれたときと同じように、安らかに聞いていた。

体が燃えるように熱い、苦しい。僕が炎そのものになってしまったかのようだ。だが、その炎の渦で、僕の体が形作られているのが分かる。空気を吸い込んで、その空気に熱を与えて、そしてそれは外へ逃げていく。僕の背中が当たる地面から、少しずつ熱が流れていく。それでも、僕を巡る炎は太陽のように尽きる事はなかった。
僕は、恐る恐る目を開けた。暗い洞窟。僕の横から始まった左右の黒い壁がずっと上で一線に交わり、その線に沿って細くが差し込んでいる。不思議な光だ。太陽のように陽気な光ではなく、冷たく射すような色だった。
ここは、もしかしたら死後の世界かもしれない。じゃあ、あの世界は一体なんだったのだろう。あの場所こそが、すべての終わりのような感じがしたのに。ここは、すべての感覚が生きていた頃のように感じられる。
僕は右腕を動かそうとして、そこで痛いような、痒いような妙な感覚に襲われた。目の前に持ち上げ、見上げてみると、そこには何か大きな獣にかまれたような歯型が残っていた。だがその場所は真っ黒に焼けていて、すでに直り始めていた。なんだろうか。ここか

ら、今体中で疼いているこの熱が入ってきたのだろうか。これがその痕なのか。
今度はその右腕を、自分の腹の上に乗せた。服はあの時と同じように着ていないと今気づいた。そして、意を決してゆっくりとさすってみた。腹筋がある感覚以外に、表面がごつごつしている感触はあるが、貫かれた怪我はない。首を上げてみてみても、そこには三本の爪が貫いた傷跡だけが残っていた。
試しに、ゆっくりと体を起こしてみた。背中と地面をくっつけていた血がぱりぱりといって剥がれていくが、背中の痛みもなかった。だがその代わりに狂ったような目眩が襲い、そこまでだった。どこか遠くで、鳥が鳴くのが聞こえた。
手を胸の上に乗せてみる。しっかりと息をしている。だが、なんと心音は人間の脈拍ではなかった。不思議な三拍の、あのときのリズムだった。僕はあれだけの怪我をして、今生きているということなのか。
どこか遠くで、風を切る音が聞こえた。それと共に、風が三角の洞窟の中で渦巻く。もう一度首を上げて出口のほうへ向いてみると、真っ白な外の光の中で、あの青い竜が幅の広い羽を軽やかに折りたたんでいた。そこで僕はやっと、まだ自分が死んでいないということをしっかりと知った。あれだけの怪我をして、なぜ生きているのかは不思議だったけれど、竜という存在から離れたわけではない。僕は良いような悪いような、どっちともつかない妙な感じだった。
竜は頭をこちらに向けると、四足歩行でゆっくりと洞窟に入ってきた。口に何か咥えている。もしかしたらこの竜は獲物を自分の洞窟に溜め込んで、後で一気に獲物を堪能する習性があるのかもしれない。
僕が軽くため息を漏らすころ、竜は僕の横にそれを置いた。鹿だ。立派な雄鹿。首元を裂かれて絶命している。血で染まった開いた目が、僕を悲しそうに見つめていた。
竜は鹿を離し、それから僕を見た。青い目が闇の中で光り、外か

らの光が竜を黒く染めていた。僕もその目を見続けた。また時間が止まってしまった。

一羽の鳥が洞窟の中に入ってきた。白い小さな鳥だ。竜の上をちいちい鳴きながら周り、そして竜の角に止まった。止まってからも落ち着きなく鳴いている。不可思議だ。野獣として恐れられる存在。死の象徴とまでされる竜の角に、小鳥が止まっている。竜が命の次に大事にする羽、竜の目や角。竜に殺されながら生きている僕、違う鼓動と熱で生きている僕も、不思議だった。すべてが跳躍している。

牙のついた大きな口が、ゆっくりと開いた。

「喰うがいい」

喰うって、僕を？いや、僕に食べろと言っているんだ。何を？鹿を！？

僕は目線をすばやく鹿に移した。僕も君も喰われる運命のはずなのに、なぜこんなことをするのか？二匹食べるよりも、一度にまとめて食べたいとでもいうのだろうか？よく分からない竜だ。

「いや、いくらなんでもこのままで食べるのは、ちょっと――――」

「なんだ、喰えないのか」

そう言うと、竜は鹿の首を持ってきたとき同じように咥えて、本当に何事もなかったかのように、外に向かって歩き出した。そして羽を広げると、真っ白になって何も見えなくなった。

しばらく待っていたけれど、そのまま何も起こらなかった。それで、僕は疲れていたからいつの間にか眠ってしまっていた。

次に目を開けたとき、僕の横にあったのは数匹の大きな川魚だった。僕は川魚を見たことがなかったけれど、本でなら読んだ事がある。人間も食べるものだったはずだ。

それよりも僕が驚いたのは、青い竜がどこにいたかといえば、僕を囲むようにして眠っていたのだ。外から漏れる光はすでになく、夜である事が分かった。閉じた竜の羽が淡く光っているから、何も

見えないということはない。
突然竜が動いて、僕を真上から見下ろした。青色の光る澄んだ瞳。初めて見たとき以上に、僕の心にはその中に吸い込まれそうだった。僕は何もできず、ずっとその目を見続けた。きっと間抜けな顔をしているなと不意に思った。
「これなら喰えるか」
やっと分かった。いや、やっぱりそうだ。この竜は僕を生かそうとしているのだ。まるでその瞳が語っているのか、まるで体を流れる熱がそれを語っているのかはわからなかったけれど、確信した。でも、なぜ？
「僕は死にたいんだ。生きる意味なんてない。なんで僕を殺さないの？」
竜は何も言わなかった。ただずっと僕を見続けていた。僕は、なんだかとても悲しくなってきて、いつの間にか語りだしていた。
「両親も、兄弟も、友人も殺されてしまったんだ。それに、僕を助けようとしたものは、みんな殺されてしまう。父が何か悪い事をしたという、それだけの理由で。でも、きっと父は間違ってはいなかったと思う。誰も間違ってなんかいない。だけど僕がこの世界に生きている意味はなくなってしまった。だから、僕はもう死ぬべきものなんだ。たとえ君に殺されなかったとしても、どこかで殺されるだろう」
僕の目は、いつの間にか涙を流していた。一体、僕は誰のために泣いているんだろう。
竜はそれでも始めのときと何一つ変わらずに僕を見ていた。ただ、少しだけ瞳の蒼が深まったような気がした。
「人は、死にたがるのか」
竜という存在から表情は分からない。だけど、その声はとても苦しそうな、絞り出したような声だった。
「誰のためでもなく、ただ自分が背負う苦しみから、悲しみから逃れるためだけに。人の持つ感情とは、自身の死を希望させるほどに

強いものなのか」
僕はその言葉に驚いた。この竜はなぜそんな事を考えるのだろうか。僕は竜から見れば、ただ逃げているだけの者だったのか。終わりに安息しようとしていたのか。
「私には我人の考えることが分からない。私も生きる事に意味はない。だが、私は生きている。何者にも迷惑をかけ、何者も私が生きるために殺められる。それが私、竜だからだ」
竜の目が一瞬だけ赤くなったけれど、すぐに深い青色になった。竜は目を僕の横にある魚に向けた。
「喰うがいい」
またため息のような音がした。熱風の息吹が僕の頬を流れる。
「我人は私に怯えず、死にも怯えなかった。だから我人は死ぬ事ができる。だがそれを認めたとき、私はなぜ生きているのだ？」
僕はずっと青の瞳を眺めて、頭の中でよく理解できないその言葉を繰り返していた。

僕はどこに行ったら、自分の今の価値と意味を知る事ができるのか。僕の手、腕、体、足、考え。なぜ苦しいの？なぜ苦しまなければならないの？僕は誰？そして、どれだけ考えても、誰に質問しても、なぜこの問いの答えを知る事ができないの？嫌だ、こんな世界。
「意思と想い」
「え？」
竜が突然語りだした。まるで僕の心を読んだかのように。いや、もしかしたら読んだのかもしれない。青の炎が透明な硝子球の中で渦巻いていた。
「人の持つもの。存在の価値。私は人を探していた」
僕から目を逸らすと、自分の角で羽を休めている鳥が気になったのか、少しだけ首を動かした。僕は何故か、その後に続く沈黙が怖かった。
「人を？あなたは人を襲うのに？」

「人を襲うのに？そうだ。無意味な事だろう。竜でさえ無意味な事をする」
「無意味な事・・・」
「それは目の高さを変えれば、ただ解決する。私の首が長いのは、見る高さを変えられるからだろう」
見る高さ。全世界から見た僕は、無意味で価値なんてない。人の世界でも、きっと無意味。でもこの竜はどうだろうか。
「あなたは僕をどう見ているのですか？」
「私は我人を見上げている」
それはおかしかった。実際は僕が竜を見上げていた。だから、かなり考えてからやっと気づいた。それは現実を表しているのではない。この竜から見た僕の価値を言っているんだ。
「そんなことはない。僕は死んでもいいほどに価値のない存在だよ」
「死を恐れぬということがどれだけ強く、同時に恐ろしい事か分かるか？生きるために、恐怖は必要なもの。それは命を守り、心を生み出すもの。持たないということが、どれだけの価値を持つか分かるか？価値を持たないのか分かるか？我人はその価値を知らず、無意味に投げ捨てようとしている」
「僕に生きろというのか？人を殺める竜が？」
「例えば、お前が死への恐怖を知るときまでは」
僕は自分の上に乗っている魚を見た。ずっしりと重い。
この魚は、僕に食べられるという価値、もしかしたらそれさえもない無価値かもしれない。でも今、僕の上に乗って僕の胸を押し付けるという小さな価値が、この魚にはある。これは見方だ。こうやっていけば僕にも、小さな価値が、あるのかな。
僕が竜に目を向けると、竜は再び僕を見ていた。返事を待っているのか、ただ見ているのか、どちらとも取れた。
僕は無理に笑って、そして言った。
「ありがとう。でも、このままじゃ食べられないよ」

竜は僕が言ったとおりに魚を持って外に出て行くと、魚を岩の上に置き、魚とその岩に向かって炎の息を吹きかけた。岩はあっという間に真っ黒になり、上にある魚を芯まで焼き始める。

僕は、洞窟の中からその様子を眺めていた。闇の中に浮かぶ炎。無から炎を作り出す力。なんという存在なんだろうか。竜をこうやって見ることができるのは、きっと世界を探しても僕だけだろう。

竜が再び入ってきたときには、三本の爪に挟まった魚は焼けていた。先ほどまで生臭かったそれは、今度は香ばしい匂いを発している。

「これならば、大丈夫だろう」

竜はそれを例に同じく僕の横に置き、魚の身を爪の先で抓みあげた。この巨体、鋭利な爪とは裏腹になんて器用なのだろう。その白い凶器が獲物を引き裂くためだけにあるのではない事を知った。

僕の口の前に運んでくれたのは、僕があまり動けないのを知っているからだろうか。僕が口をあけると、白身を中に入れてくれた。

焦げている。だけど、ほんのり脂ののった味が、口いっぱいに広がる。最後にものを食べたのはいつだったか。また食べ物を食べれるなど、全く思いもしなかった。しかも竜の手によって。

僕はとてもゆっくりとしか噛めなかったけれど、それは疲れていることもあったし、何より味をしっかりかみ締めたかったからだ。竜はずっと僕の食べるペースに合わせてくれていた。寿命が長い竜にとって、待つことはあまり苦にならないのかもしれない。

食べている間も、竜はずっと僕を見ていた。食べている間、ずっと誰かに見られたことなどなかったから、ちょっと妙な感じだったけれど、しっかりと食べているか見ているのだろう。僕は黙って食べさせられ続けた。

炎。赤の灯火。明かりとなる光。そしてものを焼き、苦しめ、時に暖め、命を支える。

そういった赤の揺らめきが、僕の周りを巡りまわっていた。周り

を巡る火は、たまに僕の体を突き抜けたり、重なったり、広がったりしている。でも僕は熱くない。
僕の中で巡っている熱さ、炎だ。僕も炎のように熱かったから、熱いとは感じなかった。いいや、それは正しくない。
僕は炎で生きているんだ。僕というものが炎で、燃え上がる全てが僕の一部。竜の炎。赤の灯火。明かりとなる光。そしてものを焼き、苦しめ、時に暖め、命を支える。そういったものの一部。炎は時にわかれ、時に融合し、時に広がる。緩やかに揺らめき、轟々しく荒れ狂う。僕の体の中で、それが流れているのが分かった。
僕が目を覚ますと、目の前には僕を見続ける青い竜がいた。もう昼間なのか、その頭部をはっきりと見ることができた。もしかしたら寝てしまってからも、ずっと僕の事を見ていたのかもしれない。
「君は、僕を食べないのかい？」
それを言った瞬間、竜の目がふっと赤くなった。燃え盛る炎が、何もかもを飲み込むかのような、そんな深く暗い赤だった。
「我人は、私に喰われる事はない。我人も、自ら死のうとは思わない」
その声は荒々しかった。言っている事も少しおかしくなっている。もう一息でも息を吐けば、そこから炎が出てくるのではないかとさえ思った。焦ったわけではない。なんか可笑しかった。
「うん、わかった。ありがとう」
僕はいつのまにか、右腕を伸ばして竜の口に触れていた。表面は硬くて冷たい鱗だったけれど、僕にはその内側で流れる熱い炎が、なんとなく感じられた。腕の歯の跡が、少しだけ疼いて燃え上がった。
竜の目の色が、再び澄んだ青色に還った。僕を流れる炎を、この竜も同じように感じられるのだろうか。きっと感じているのだろう。
手を腹の辺りに持っていき、もう一度傷跡を触る。折れたはずの骨さえも直っている。これも竜の力なのか。
「でも、あれだけの怪我をして、どうして助かったんだろう」

「それは――――私にも分からない」
「分からない？」
「分からない。我人の血は、全て流れてしまった。だが、私の血を我人の中に流し込めば、我人は生きると知っていた」
「じゃあ――――僕は今、竜の血で生きているのか」
体中を駆け巡る、燃え盛る炎。竜の炎であり、今は僕の炎。初めは苦しかったが、慣れてしまえばこの上ない心地よさだ。
「じゃあ、僕は竜だね」
「違う。我人は人間だ」
また少しだけ青が失われる。怒ると色が変わるのだろうか。
「――――うん。僕は人間だ」
僕は竜の巨体を眺めた。外の光が鱗に少しだけ反射して、美しい竜月色で輝いていた。
「そう、お前は人間だ。私は竜だ」
ささやきに近い、小さな声だった。それを聞いたときに、僕は竜の右腕の噛み傷に気づいた。
「僕と同じ・・・」
「我人のためだ。気にする必要はない。鱗は元には戻らないだろうが、もうほとんど治っている」
我人――ってやはり僕の事だろうけど、僕のためになぜ怪我をしなければならなかったのだろうか。僕のためにそこまでしてくれるなんて、少しうれしかった。でも竜は本当に気にしていない様子で、自分の傷さえも見ずに、代わりに僕の手の下にある、腹に刻まれた傷を見ていた。
「もう、痛くないよ」
それでも竜は何も言わなかった。またこのまま時間が止まってしまいそうで怖かったから、何か話はないかと考えた。
「君、名前は？」
竜は再び僕を見たが、答えられないようだった。もちろんその硬い顔には何の表情も示されていなかったけれど、目の奥から伝わっ

てくる。
「僕の名前はフィード」
でも、何か物足りない気がした。そう、なぜかこの竜にだったら、打ち明けてもいい気がした。
「・・・真の名前は、ケンって言うんだ」
「我人は私に、存在の証を明かすというのか」
初めて、竜は明らかに驚いているようだった。僕自身も言ってから驚いたけれど、不安はなかった。
「うん、いいんだ。君は僕を操って何かするなんてこと、ないだろうから。僕は生まれたときから真の名を持っていたんだ。だから父さんは意思のある子だって喜んでいたけれど、僕は、真の名を知るものには、誰にでも従う者だった」
「存在の証。真の名。クロノスの鍵図。スカラーの代名・・・」
竜は僕の話は聞いていない様子だった。何かずっと考え続けているようだったが、今までの沈黙に比べたら、すぐに終わった。
「私には名前はない。だが、私は忍ばせる者だと、我が友人は言っていた」
「忍ばせる者・・・ということは、“カンザー”じゃないか」
「カンザーとは誰だ」
僕はいろいろ思い出そうとしたけれど、よくない事も一緒に思い出してしまうから、少し辛かった。
「――――僕も詳しくは知らない。遠い昔、ここではないどこか遠くの青か緑の星で、たくさんの秩序を作って、民を混乱から救った人らしいけれど、忍ばせる人と呼ばれていたって、聞いたことがある」
「では、私はカンザーなのか？」
「そうかもしれない。その友人って、一体誰なんだい？」
また真っ赤になった。何か悪い事でも聞いたのだろうかと不安になったけれど、次の言葉で分かった。
「我人を始めに、喰おうとした奴だ」

僕の真上にいた、あの緑の竜のことだ。あの時は、よく見つからなかったものだ。きっと緑の竜は僕の事を忘れてしまっていたのだろう。

「でも、僕は今ここで生きているよ」

「そうだ、お前は今、人間として生きている」

竜はゆっくりと起き上がった。ちょっとだけ踏まれるのではないかとおもったが、そんなことはなかった。竜は前脚でしっかりと起き上がると、僕のほうに向いた。

「起き上がれるか？」

ゆっくりと上半身を起こしてみる。目眩や頭痛はなかった。少しだけ安堵したが、すぐに息を呑んだ。そこで初めて、僕の周りの床の状態を知ったのだ。乾いた血が、僕のいる場所を中心に大きく環を描いていた。

さらに立ち上がろうとして、やはり目眩が襲ってきた。あっという間に平衡感覚を失って、体が宙に浮いた。どこが下なのか分からなくなり、とうとう立っていられず倒れそうになったときに、僕のわき腹に何か支えが入ってきた。たまらず僕はそれにしがみついた。

少しずつ、立つということに慣れてくる。こんなに体が動かなくなるなんて、まるで僕の体が僕の体ではないかのようだった。

そう思いながらしがみついているものを見て、驚いて手を離した。すぐにバランスを崩すと、今度は竜の前脚が僕の背中を支えた。

今の今まで僕がしがみついていたのは、なんと竜の羽だったのだ。

「そんな！僕、そんなつもりは」

僕は上に向かって言う。竜は僕に顔を近づけた。

「なんのことだ」

「いや、だって竜の羽は竜にとって一番大事なもので、それで・・・」

それに触れた者は、生きてこの世にいられない、という言葉は小さくなって出てこなかった。

「ああ、羽か」

羽を一振りすると、突如ものすごい風が辺りに渦巻いた。まるで洞窟の中に嵐が来たようだ。隙間から風が出るときの音が轟々と響き渡る。それがやっと納まって、僕が目を開けたときには、すでに竜は羽をたたんでいた。

「お前のためであるのならば、私は空を飛べなくても特に構わない」

僕の息は詰まった。まさか僕のためにそこまでしてくれるとは。竜の羽がもし折れれば、獲物を狩る事もできなければ、敵から逃げる事もできない。だから羽は竜の命に等しいって聞いたことがある。この竜はそれより僕のほうが上だというのだ。僕が死んだら、本当にこの竜の生きる価値はなくなるのだろうか。僕の命が非常に重くなったような気がした。よく分からないことも多いけれど、不思議とそんな感じがした。

「我人はまだ歩けない。だから――――」

竜は後脚を前に出して、身を屈めた。

「私の背中に乗るといい。いつまでも日陰にいるのは、体によくない」

どう返事をしたらいいだろう！竜の背中に乗る事ができるなんて夢にも思わなかった。騎士しか乗れない馬さえも、乗ろうとさえ考えた事はない。

僕がこまごまと悩んでいるのを、このときに限って竜は待てなかったようで、突如前脚を僕の腹に当てると、爪が当たらないようにしながら僕を軽々と持ち上げた。僕が次の状況を把握したころには、僕は竜の背中に跨っていた。

竜の鱗を通して、竜の鼓動が伝わってくる。それは、今僕の心臓が響かせている鼓動だった。僕は竜の背中に寝そべった。言い伝えでは、竜の鼓動を聞いた人は呪われるというけれど、僕の鼓動が竜の鼓動なんだからそんなこと言われてもしょうがない。それどころか、僕はこの律動が好きだ。この竜、カンザーの体を巡る炎が、その脈拍にしたがって流れているのだ。

「ありがとう、カンザー」

「我人はよく礼を言う。私は我人に何もしていない」
だが、鱗を通して響いてくる声は静かだったし、しばらくの間そのままでいてくれたから、彼は優しい。
「君はまるで人間みたいだ。言葉を話せるし、人間みたいな事を言うから」
「言葉は、忘れてはいけなかったからだ」
カンザーはそう淡々に言うとゆっくり歩き出した。振動は少ないけれど、歩くたびに背骨がくねくね曲がる感じが伝わってくる。
洞窟の外に出た。意識の中ではあまり時間が経ったとは思えなかったけれど、体や目は敏感だ。外はあまりにも明るすぎて、目を開けるのは辛かった。
「目を閉じたまま、少しずつ顔を背から上げて、そのあと目を開けてみるといい」
息がしづらいほどにその世界は真っ白だった。しばらくして見えてきたのはカンザーの鮮やかな蒼い鱗。本当に、この世にある青すべてを表現しているのではないかと思えるほどだ。太陽の光を美しく反射して、竜月色にきらきらと輝いている。
僕は何色もの色に変化を始めている森を見下ろしていた。僕の村には木などない。まして、このように木々が青々と色づくなど知らなかった。しばらくの間、僕の目は変になったのではないかと疑うほど。どこまでも森は遠くまで続き、たくさんの丘を越え、はるか遠くに見えるグリーンヘッドまで続いているようだった。

３０身くらいの高さはあるだろうか。この洞窟はそんな高さの場所にあった。下は垂直の崖で、上もほぼ同じ。ここは大きな絶壁の割れ目だったのだ。
僕が上を見上げているときに、前触れもなく僕の体の重さがなくなった。そう、落ちるときの感覚。瞬時に鳥肌がたちカンザーにしがみ付く。その通り僕は、下にある深々たる多色の森に向かって落

ちていた。
竜の羽が大きく開いて、一気に空気を掴む。曲線を滑るように落下方向が変わる間、僕はものすごい力で、青い鱗に体を押し付けられていた。
やがて、カンザーと僕は森の上を飛んでいた。風が僕の腕や足の周りで渦まき、轟々と音を立てる。僕は見たこともない速度で木々が過ぎ去っていくのを、片耳を鱗に当てながら見ていた。
羽はほとんど動いてなかった。ぴんと張った薄い膜に、たくさんの黄色の字がきらきらと明滅している。風を魔法か何かで操っているのだろうか。
両足でしっかりとカンザーの体を挟み、僕はゆっくりと体を起こしてみた。鱗の背と体の間でさらに風が渦巻き、僕を吹き飛ばそうとする。
「やめておいたほうがいい。しばらくすれば速度が落ちる」
音としては全く聞こえなかったが、竜の背骨が深い声を伝えてきた。カンザーを見ると、首を少しだけ曲げて片目で僕を見ていた。
「大丈夫だよ。手で押さえているから」
と言ったが、実際は暴風で、声は聞こえなかった。息がしづらい。目が痛くなって涙が出てきた。
だけど、カンザーが言ったように速度はだんだんと遅くなってきて、なんとか耐えられるくらいになった。
僕はまるで、緑の海原の上を滑っていくかのような錯覚を持った。竜が過ぎ去った木々は大きく揺らめき、まさに波のように揺れ広がっていく。
竜の周りを、鳥達が飛び回っていた。小鳥達が追いつけるほどの速度ではないはずなのだが、巻き起こす風に乗っているのか、しゅうしゅう舞い踊っている。
少しだけ竜の体が右に傾き、その方向に進路が変わり始める。下には深々とした森を二つに分断する青い筋が見えた。その筋に沿うように、進路を変えたのだ。

近づいていくうちに、その様子をよく見ることができるようになる。真っ白な川原の間を、青く透き通ったたくさん水が流れているようだ。いろいろなところできらきらと輝いている。こんな、地面にしみ込まずにたくさんの水が流れている様子を見るのは初めてだった。

「あれが、“川”かぁ」

「見たことがないのか？」

この風でも聞こえているというのには驚いたけれど、空を飛ぶという開放感に比べればなんのことはない。

「うん、僕の育った場所は乾いた土地だったから、井戸しかなかったんだ」

「イド？井戸とは何だ？」

「うーん・・・地下深くに流れている水を取りだす為のものだよ。こういった場所にはないの？」

「――――それは分からない」

それは竜なんだから人間の生活なんて分かるわけないか。そう思っているうちに竜はぐんぐん高度を落とし白い川原に近づく。ずいぶん時間をかけて、ゆっくりと着地するまでの間、地面から吹き返す乱れた風にただ我慢するだけだった。

風が収まると、目の前には白い石と砂の上を、すべるように流れる川が、目の前にあった。青く透き通ったたくさん水が流れていて、川魚がゆうゆうと泳いでいるのがここからでも分かる。

カンザーは、僕を乗せたまま川に入っていった。なぜかその場所だけ深いらしく、竜の足で、ほんの数歩進んだだけで僕の足元にまで水に浸かった。今までの僕だったら冷たいくらいだったけれど、炎が駆け巡る僕にはちょうどいい冷たさだった。

「そのまま滑って入るといい。鱗で体が擦れないように」

黙ってうなづいて、僕はゆっくりと水の中に入っていった。立とうと思っても足は着かないだろうから、片手は岸を掴んで、そのまま浮かんでいた。

正直、どこか水でしみる場所があるかもしれないとヒヤヒヤしていたが、水に浮かんでいる間もそんな感覚はなかった。あの傷や怪我は本当に完治してしまったかのようだ。その割に、背中やズボンについていた血が溶けて、僕の周りはすぐに真っ赤になる。それが川の流れに沿って筋を作っていた。

「この川には血を吸う妙な魚がいるが、私がいる限りは我人に近づいてくる事はないだろう」

カンザーは左の羽を広げて、水面を掻き始めた。大量の水しぶきが上がって、僕やカンザーを濡らす。僕はその波に飲み込まれて一瞬息ができなくなった。僕が咳をしていると、カンザーは急いでこちらを向いた。だからそういった動きが僕を沈めるんだって・・・。

カンザーは前脚を岸に前脚を置き、僕はその前脚にしがみついた。

「すまなかった。私は今まで、一人だったからな」

「分かっているよ。おかげでたくさん水も飲めたからいいさ」

僕はカンザーに笑いかけた。カンザーは僕をずっと見ていたけれど、それが僕でなく、僕が首に下げているお守りだということに、しばらくしてからなんとなく気がついた。

「これ、僕の両親の形見なんだ。鍵の石というお守り。お守りといっても、効いたことがないけれど」

本当に効いたことなんて一度も無い。僕は少し恨めしそうに石を眺めた。赤い六角形の水晶。水晶の内側で、不思議と何かがゆっくりと揺らめいているように見えるのだ。不思議な石で、他の人はなぜかこの石に気づかないことが多い。

「鍵の石」

カンザーは、ゆっくりとその名前を反復した。

「うん。偽りや脅威を退けて、本当のことを招く石なんだって。守りのおまじないが刻んであるんだ」

“英気に満ちし風の主よ、その身に無の鎧を”僕はその文字を指でこすった。

「そうか、それでお前には真実が招かれるのだな」

竜が冗談を言うはずがないけれど、僕はなぜかそのときだけは、それは冗談だったのではないかと感じた。
僕は少し体を洗ったあとにすぐに川岸で横になったけれど、カンザーは僕がいなくなったことを確認してから、本格的に体を洗い始めた。僕はずっとそれを見続けていたけれど、その様子は、まるで必死に何かを落としているような、妙な感じだった。
僕は、青空よりも青いその姿を見ているうちに、まるで空を見ているかのように眠ってしまった

轟々と何かが燃える音と吹きつける熱風に、僕はうなされながら目を覚ました。辺りは夕闇に近く、空には明るい星たちが輝き始めている。
その闇を明るく照らすのは、前も見た竜の炎だった。炎の吐かれる大きな口の周りには、何か赤く光った輪のようなものがあり、ゆっくりと回っているのがわかる。そこから出される炎は、何の混じり気もない、純粋な炎だ。
何かに火を当てているようだった。そしてしばらくすると、少し赤みを帯びたそれを川の水につける。ジューという音が森の中を木霊した。
「何をしているの？」
僕が起きたことは知っていたのか、それとも今気づいたのか、カンザーはどっちとも思える動きで僕を見た。
「上着を作っていた。着る物がなければならないが、この森にはこれしかなかった」
そういってカンザーが見せたもの。それは冷やされても真っ赤に燃えているような真紅の鎧だった。
カンザーはしばらくしてそれを口に咥えて持ってくると、僕の目の前に置いた。右腕の篭手はなくなっているし、継ぎ目もところどころ切れている。だがそれもカンザーと同じような竜の鱗でできているようで、その面影がうかがえる。まるで騎士が着るようなもの

だ。いや、実際に着ていたのかもしれない。
「これをどこから？」
僕は鎧を持ち上げて――――重い。元々は屈強な騎士のために作られた鎧、大人が着るものだ。僕が着れるはずはないのだが、よく見ると焼き固めた跡があって、うまく大きさが調整されているようだ。
「森に落ちていたものだ。大きさが合わないから、さきほどまで大きさを調えていた」
「すごい。本当に器用なんだね。まるで職人みたいだ」
だけど、実際この重さでは普段着るのは難しい。両手でしっかりと抱えて持ち上げるのが限界だった。だが試しに、無理やり鎧を頭から着た瞬間に、それは変わった。
重さがなくなったのだ。今までまさに鉄の塊とも思えたそれが嘘のように、まるで紙を着ているかのようだった。
「軽くなった！不思議な鎧なんだね」
「我人の体と共鳴したのだ。その鎧は今、我人の一部と同じ。自身の体が重いと感じたことはあるまい」
体の一部。試しに普通の右手で左の篭手をさすってみた。その感覚が、まるで本当に自分の肌として感じているような気がした。
「腕の長さも、肩幅も、指の一本一本までぴったり。まるで測って作ったみたいだ」
「物を測ることは、私には動作のないことだ」
こんな鎧を自分が着ているということになんだかもったいなさを感じて、あまりうれしいとは実感できなかったけれど、自分が一歩一歩、何かに生まれ変わっていくような、不思議な気持ちだった。
その時ふと、目の端の森の奥で何かが動いたように見えた。すぐに視線を走らせるが、ただ暗い森が深く根付いているだけだ。
「どうした？」
「いや、いまそこに何かいたような・・・」
「この近くには、特に動くものなどはいない。何かがいれば私には

すぐに分かる」
だが、カンザーは僕が見ていた方向を見て、そして少し目を細めた。いつものため息のような音を出して、何処までも見通せそうな目でずっと。
「多分僕の気のせいだよ。暗かったし、ちょっと疲れているからそう見えただけなんだ」
「疲れているのか。ではすぐに戻らなければ」
カンザーは前脚を出して、僕が背中に上りやすいようにした。たしかに鎧は重くなかったけれど、やはり足腰には負担が来ているようで、僕が背中についた時には体中が石のように重かった。
まるでそれが当たり前だというように、竜の体はふわりと浮き上がった。足の下には空の星を写したもう一つの星々の川が見え、森はさまざまな色で緩やかに光り輝いていることに、初めて気がついた。昼間は緑の海の上を飛んでいるようだったが、今は夢の上を飛んでいるようだ。白い星と虹色の世界の間を滑るように進んでゆく竜の船。僕はその上に乗っていた。
「僕、こんな世界始めて見た・・・」
「世界は広い。だが人は知らないことも知らず、それを知る前に死んでしまうのだ。動けば見えるものも、待てば見えるものも、もしくは偶然に見えるものも、命あってこそ知ることのできるものなのだ」
だからこそ死ぬときくるまでは死は恐れるものなのだ、とカンザーは強く念を押した。僕はただ、知らなかっただけなんだ。そしてあの時死んでしまっていたら、僕はこのすばらしい光景を知る機会さえなくなっていた。そう、遠まわしに語りかけてきている。
そして、僕がお礼を言おうとしたそのとき、突然竜の体が揺れた。羽を大きく羽ばたかせて、まるで僕がいることは忘れてしまったのか、乱暴に方向転換をした。振り落とされそうだったけれど、体に必死でしがみつく。右手や足が鱗とすれて痛かった。
カンザーの目は赤く燃え上がっていた。僕を見る時の目ではない。

空いた口からは涎が垂れ、竜の体の筋肉が波のように緊張してゆくのが分かった。深い唸り声が、彼の骨から僕の骨に伝わっていく。
カンザーは一直線に森の中に突っ込んでいく。枝や葉が僕をすくい落とそうとしてくるが、全身全霊を込めて耐えた。森の中に入っても全く速度を落とさないまま突き進んでいった。何度も木々の幹にぶつかると思ってゾクッとしたが、絶妙なタイミングで羽をはためかせたり、体を傾けたりして器用に避けていく。
やがて暗い森の中で、一瞬だけ、一頭の白い獣が目に入った。そして次の瞬間にはカンザーはその獣に飛び込み、僕は今度こそ背中から投げ出された。

背筋から寒気がするような音で、僕は目を覚ました。頭が痛い。くらくらしながらゆっくりと立ち上がると、そこは僕の知る森ではなかった。
赤い水溜りがいたるところにできていて、僕の見える限り赤に染まっている。そう、血だ。森の絵を、赤い絵の具で塗りつぶしたかのように、そこは一色の色で作られていた。
そしてその中心で、青の体を赤に染めた野獣が、あの白い獣の足をかじり取っていた。生物が切り裂かれる音、血が血溜まりに落ちる音が、その歪んだ空間に響き渡る。飛び散った血が、雨のように僕に降りかかる。
僕は、一瞬後には胃から何かがこみ上げてきて目を閉じて必死に耐えた。だけど、そう文字通り目に焼きついたその様子にこらえきれなくなり、あえなく吐いた。
これが竜。そう、僕が思っていたとおりの、聞かされてきたとおりの獣。竜とはそういうものなのだ。
「フィー・・・ど・・・」
あの獣が僕の名前を呼んでいる。僕ははっとして竜を見上げると、今僕がいることに気づいたかのように、獣は僕を見下ろした。そう、その瞬間に、血と同じ赤い二対の目が、ゆっくりと青に染まってい

くのを僕はただ呆然と眺めていた。
前脚に持っていた獣の残骸を落とすと、カンザーは顔を僕の目の前に近づけた。赤く染まった口からは、血と肉の匂いがした。
「なぜお前は泣くのだ」
僕は怖かった。そう、僕は初めて目にするおぞましい光景が怖かったんだ。本当ならばあの獣は僕で、今の目の前の光景と同じような光景になっていたはずだ。
青い瞳に写る僕は、泣いていた。でも、食べ物を食べなければ竜は生きてはいけない。いくらおぞましくても残酷でも、これが普通――――僕の心では理解は、できなかった。
僕はなぜか、いやそれでもカンザーの頭に抱きついた。そして、何も考えられないままにずっと、声を上げて泣いた。真っ赤な血も、この匂いも、そしてまだ残骸の残る口をした青の竜も、僕は見たくなかった。だけど、僕はずっとすがり付いていた。カンザーもずっと、そのままでいてくれた。

僕たちはもう一度川に戻って体を洗った。いくら洗っても、鎧から血の匂いは落ちなかった。まるでこの赤が血で、永遠に落ちるものでないような、そんな気がした。
カンザーはまた狂ったように体を川底にこすり付けている。カンザーもまた、この血の匂いが嫌いなのだと知った。
「不快だったろう」
僕はとっさに返事ができなかった。あの光景を一瞬思い出してしまったからだ。
「うん――――。あれが、いつもの君なんだね」
「そうだ。あれこそ竜が行うべくして行う捕食。そして本来の私だ」
本来の私。それはまるで今の自分と区別しているかのような感じだ。僕は結局匂いを落としきれなかった鎧を着た。
「僕は、人が食べる生き物を殺すところとか、見たことないから。でも、人だって同じように肉をバラバラにして食べているんだから、

僕が慣れなきゃだめなことなんだよ」
「慣れる？他の生き物を殺すことになれるというのか？」
「そうじゃないけれど、かわいそうだから殺さないなんてことしたら、僕が死んでしまう。だから、他の命を奪って生きていくということに責任を持って、そうやって僕のために死んでいくということを、知らなければダメなんだと思う」
僕は川岸に座り込んでずっと川を見ているだけだったけれど、カンザーはずっと僕を見ていた。僕は寒いのか、少しだけ体が震えてきた。
「生きるって、なんて空しいことなんだろう」
「我人は強いな」
カンザーは川からあがると大きく羽を伸ばし、大きく一振りした。だから僕が、そんなことはないよ、と言ったことは聞こえなかったのかもしれない。
「私はこの体から逃げ、恐れている。私はどこから来て、なぜここにいるかは知らない。だが、私はそれでも自分の行うことに恐れていた」
竜は僕のところに来ると、やはり洞窟の時のように僕を中心に輪になった。僕はカンザーの体に背中を預ける。
「だが、我人はそれもまた真実だと言う。変えられないものだと。そしてそれに責任を持てと。そう、まさにそのとおりだ」
カンザーは僕を覗き込んだ。
「私のことが怖いか」
僕は小さく頷いた。だけど、そう僕がしっかりと感じたときに、僕は本当の意味で怖いということは決してないということも分かった。
「そうか、それはよかった」
「だけど僕、カンザーとは離れたくない。だって、そうしたらきっと、本当に怖くなってしまうかもしれないから――――」
体は震え、声は小さくて言葉になってなかった。だけど、カンザ

ーが頬で僕の胸をさすってくれたから、僕はそのまま、静かに目を閉じた。

白い神殿に僕は立っていた。つるつるの床は僕をしっかりと写している。周りは白い柱がたくさん立ち並び、高くて重そうな天井を支えている。天井には大きな星の周りを小さな星が回っている絵が描かれていた。

そして目線を前に移したときに、いままでは何の変哲もなかった壁に、何かが貼り付けられていた。

竜だった。真っ赤な竜が、たくさんの棒で壁に貼りつられている。その下は血の跡で赤黒くなっていて、そこにガラスの破片がたくさん散らばっていた。ステンドグラスが割れたんだ。

「誰かいるのか」

その声にビクッとなって、僕は反射的に近くの柱に隠れた。気づかなかったのが不思議だが、ずっと足音が近づいていたのだ。

「いるはずはないなぁ。そうだろう、竜の王よ」

そこで、その足音が突然早まった。そして、誰かが竜の元に走っていくのが、僕の目に入った。

黒いローブに白の線が入った、見慣れない服装をしたおじいさんだった。片手には不思議な形をした杖が握られている。

魔法使いだ！僕の村にもある程度魔法は存在していたけれど、どんな魔術でも操れる魔法使いは、竜のようにお話でしか聞いたことがなかった。だけど、どう見てもあれは魔法使いの姿ではないか。

「竜化魔法陣が割れている――――竜の王よ。そのような悪足掻きはよしてもらおうか。それとも体だけでなく心までも操られたいのか」

あの赤い竜は生きているのだろうか。でも話しかけているということは死んではいないということなのだろうか。何も反応はないようだった。

「まぁいい。この魔方陣は結局発動できなかったからな。なくなっ

ても惜しくはない」
そこで、その魔法使いは突然僕のほうを振り向いた。反射的に柱の後ろに隠れる。
「誰だ。そこにいるのは――――」
冷たい床に革のブーツがぶつかる音が響く。それとともに僕の心臓はどんどん早くなっていく。
そしてそれとともに、白い神殿がますます白くなって、そして何もかもが真っ白になって・・・。

僕の体は妙に冷静に、そして心は飛び起きたように目を覚ました。昇ったばかりの太陽が僕を照らし、頬を暖めている。
横を見ると、大きな角の生えた青い竜の顔が、静かな寝息をたてながら眠っていた。あのときの赤い竜。この鎧のように赤くて、カンザーのような姿をしていた。そしてあの魔法使い。一体何の夢だったのだろう。怖かったけれど、何かあるような気がしてならない。
起こさないようにゆっくりと体を起こし、砂の川岸をさくさくと歩いていった。流れる水に手をつけると、体中にしびれが走るくらい冷たい。その水で顔を洗った。川上から冷えた涼しい風が僕の体を撫でて通り過ぎていく。
そこで、小さな何か変なものが川から飛び出てきた。わっと驚きながら川岸に逃げると、僕のいた場所には数匹の妙な魚が口惜しそうにピチャピチャしていた。なるほどあれが血を吸う魚か。
そこで、やはり誰かが僕たちを見ているような気がした。そう、どこからかと言われれば分からないけれど、あの時目の端で見た何か。すぐにその胸騒ぎは収まったけれど、なんだかいやな感じだった。
「起きたのか。体のほうは大丈夫か」
僕がカンザーを見たときには、カンザーはすでに音もなく体を起こし、前脚で丁寧に薄い羽の手入れをしていた。
「うん、もう大丈夫」

「そうか、それはよかった」
前脚を一歩出して、前回僕が乗るときと同じようにした。僕はうれしくなって走ってカンザーの上に飛び乗った。
カンザーが連れて行ってくれた所は、見たことがない不思議な実がなっている木がたくさんあるところだった。始めはどれが食べごろかはよく分からなくて、すっぱい実や渋い実を食べてしまって辛かったけれど、だんだんと甘い実の選び方を熟知してきて、結局おなかがいっぱいになるまで食べ続けた。途中でカンザーも少しだけ実を食べていたが、どこがうまいのか分からないと言って、その後はずっと鳥たちと戯れていた。

僕が気づいた時には、周りを見渡しても、竜の姿はなかった。夢中になってはぐれてしまったのだろうか。僕は走り回ってカンザーの姿を探した。どこも同じ景色で、もともとどこにいたのかさえも分からない。
そうして夢中に走り続けていた僕の視界が、突然開けた。僕は驚きで息が止まり、そして感嘆の声を上げた。
そこは、一面が白い花の咲いた丘だった。腰あたりまで咲いた小さな花が風の波にあわせて流れている。そして、太陽の光がたくさんの三角に切り取られて、ゆっくりと強弱をつけながら丘の花たちをその形どおりに照らしている。
僕はその光景に魅入られながら丘を進んでいった。さらさらと、揺れている花が、空の青色さえも反射させているようで、美しい。
そんな淡い水色の海の上に、誰かがしゃがみこんでいる。僕の動きが止まった。
背丈は僕よりも小さい。真っ白な一枚の布に穴を開けてかぶり、腰を縛っただけの簡単な服装をして、頭には同じく白い鉢巻をしていた。よく見ると、どうやら花を摘んでいるようだった。
そして、立ち上がってすぐに僕がいることに気がついたようだった。やはり、僕よりも幼い少年だった。僕を見て、花を見ていた顔

がさらに笑顔になって、こちらに向かってきた。
「やぁ君。体の具合はどうだい？」
「いえ、あの――――」
「ここは、光の丘と言ってね。太陽の光がところどころ、この地特有の魔法で折り曲がってしまって、このように光の強弱ができる場所なんだ」
「はぁ――――」
「君、竜といっしょにいた子だよね。よく襲われずに飼いならしているね。どういう魔法使ったの？」
「僕はカンザーを飼いならしてなんていないよ！」
流石にその言い方にはカチンときた。だけど僕がもっと反論する前に、手で制止される。
「うん、分かっているよ、ずっと見ていたから。でもすごいなぁ、竜と人が一緒にいるなんて、初めて見るよ」
そう、僕も夢にも思っていない。何もかもが初めてのことで、突然のことで、僕は現実に追いついていないような、取り残されたような気分になった。
多分、僕たちの事を時々見ていたのは彼だろう。そんな影から見るなんて、あまりいい感じはしなかった。
「ああそうそう。わしの名前はセオ。この近くの村に住んでいるんだ」
「村？村なんてこんなところには・・・」
「うん、魔法で隠されているからね。入ることもできないし、出ることもできない」
「じゃあ、なんで君はここにいるんだい？」
そういうと、彼は持っていた花を顔の高さまで持ち上げると、何かを小さくつぶやいた。するとなんと、僕が目蓋を一回閉じたその間に、花束は木でできた棒に変わっていた。手品ではない、紛れもない魔法だ。
「へへ、これでも魔法使いなんだ。だから守りを抜けてこられたの

さ。わしがここで花を育てているのは内緒だよ」
　僕より子供なのに自分のことをわしなんて言うのは変だったし、今までこの森には人がいなかったのに突然のように会うというのも変だった。だけどそんな僕の考えは、知らぬ間に顔に出ていたようだった。
「たしかにわしにこんなところで会うのは不思議だね。だけどわしからしてみれば君が竜と共にいることが不思議だし、わしのことが見えるということも不思議なことなんだよ？」
「普通は見えない・・・ということ？」
「見えないわけじゃないけれど、それがそこにあるって分からないってことかな。うーん、説明するのは難しいけれど、とにかく竜さえも騙せるわしの魔法が、きみには効かなかったというのはたしかだね」
　セオは持っていた棒を器用に縦にすると、地面を一突きした。すると、今まで吹いていた心地よい風が一瞬でおさまり、辺りはしんと静かになった。本当に魔法使いだ。
「さて、そろそろいかないと。君もその・・・お友達が森中を探しているよ。早く行かないと八つ裂きにされちゃうかも」
「そ、そんなことは――――」
「ないよね、分かっているよ。彼はずっと一人だったから、ただいなくなるのが悲しいだけなんだよ。じゃあまた。わしのことを忘れなかったらまた会おうね」
　まるで僕をからかっているような言い方だ。見た目には全く合わない言葉使いだったし、本当に変な子供だ。
そのとき、突如後ろから突風が吹いて、僕は反射的に目を覆った。
「ここにいたのか。ここは音の反射がおかしい。貴兄（きけい）を見つけるのには苦労した」
　後ろを見上げると、今降り立ったカンザーの体があった。僕が無事なのを確認して、見た目どおり肩をなでおろしていた。
「今ここに魔法使いが・・・あれ？」

そこには人はおろか、白い花が咲く丘もなく、ただ深い森がただ続くだけだった。
「この近くには私と貴兄以外だれもいない。もうすぐ日が暮れる。洞窟へ戻ったほうがいい」
見えないわけじゃないけれど、それがそこにあるってことが分からない。僕はその言葉を、何度も心の中で繰り返した。

僕は、星一杯の黒い空を見上げていた。いつもよりも暗い空は、僕がそう感じるからだろうか。
青い竜は僕の後ろの洞窟の奥で眠っている。眠っているだろうけれど、でも僕のことをしっかりと意識しているということは、なんとなく分かった。
下は、どこまでも深い森が、とても弱く、でも確実にきらきらと輝いている。
僕はたしかに死にたいと思った。何も行動もせず、何もできなかった。だけど今はどうだろう。僕は生きて、またいろいろな人に会いたいと思っている。兄弟、友達、親戚、親切にしてくれた人たち。セオに会ってまず思ったことは、やっと人に会えたという事だった。寂しかった。懐かしかった。

はかなく終わる　僕の息
自ら生きず　誰の影だろう
僕の旅路は　誰にもない

命はまた　死を知ってこそある
命はまた　命を蝕んでこそある
命はまた　心を動かしてこそある
命はまた　命をつないでいくためにある

はかなく終わる　僕の世界

自ら探さず　誰の影だろう
彼の旅路は　誰にもない

このさみしさを　誰が預かるのだろうか
このかなしみを　誰が受けいれるのだろうか
このくるしみを　誰が届けるのだろうか
このおそれを　誰が和らげるのだろうか

人は目を背けてはいけないから
僕はここで泣いている

僕の口が、自然と作り出していく歌。生きると決めても、どうすることもできないという自分。僕もまた、竜のように羽があればいいのに。そうすれば、自由に行きたい場所に行くことができるのに。
僕はカンザーのところに戻って、青い羽の下に潜り込んで目を閉じた。僕が夢の世界へ落ちる寸前に、何か声が聞こえたような気がしたけれど、僕には分からなかった。
「よい、唄だった」

私は空を飛ぶ。私というものの根源は炎で、私と言う存在は燃えあり続けていくためにある。そう、ただそのためだけに――――
緑の木々は静かに揺らめき、その風に私は乗る。それ以外は静かで、とてもゆるやかだ。何も普段と変わりない。
だが、その時、私は久しく人語を耳にしたのだ。青の羽が言葉を話さなくなって、どれだけの時間が経っていたのだろうか。だが私の耳にする人語は、それ以来一度としてなかった。私の心には懐かしさはなかったが、かといって興味がないとも言えなかった。自然と羽先はそちらに向いていたからだ。
そして私が近づくにつれて、そこには私と同じ竜の姿があること

が分かる。間違いない。青の羽だ。青の羽も、こちらを向いている。
　青の羽は木々の間にある少し開けた広場に立っていた。足元には大小の枝やその切くずなどが散乱している。何をしているのだろう。
　私が地に降り立ったのを確認すると、青の羽は私の風で飛ばされないように脚で留めていたしていた木の棒を離し、私に向かってきた。木の棒は非常に精密に削られ美しい湾曲を描いている。
「ラグースよ。会うのは久方ぶりか」
「青の羽よ。お前はまた言霊を操るようになったのか」
　青の羽は一瞬だけ目であたりを見回した。そのようなことをしなくとも、虫の一匹までも気配で知ることができると言うのに。そして、再会の印に互いの角をぶつけた。
「汝はここにいてはならない。ここには人がいる」
　驚いた。ではこの木の棒も、人の業が成した物ということか。
「人？青の羽はなぜ人と一緒にいるのだ。まるで人が愛玩動物と共に暮らすように？」
　青の羽は、大きく息を吐いた。角に再び鳥達が舞い降りてくる。
「我が名はカンザーという。私は知るべきなのだ。そのために私は人を生かした」
　青の羽が名前を持ったことにはさして驚きはしなかったが、やはり人と共にいるということはよく分からない。
「確かに知るべき事はある。だがなぜ共にいる必要があるのだ。お前はそれで何を知ることができる」
「私の知らないこと。私がどこから来て、私が誰なのか。そう、それを知らないということも、なぜ生きているかということも、その疑問さえも、私はフィードによって知った」
「青のカンザーよ。うつろうものがどこから来たかなど、探しても見つかるものではない。竜は存在し、そして欲のままに生きることを許されている。それの何が悪い」
「私は、どこから来たのか、誰なのか、昔は知っていたのだ」
　昔。昔とはどこのことだ。それはつまり、前のこと。そう、昔と

はもう過ぎてしまった、起こり終わった事のことだ。私は始めてそれを認識した。
「だが今は知らない。知りたくないという思いもあるが、それは正しくない。生きる命とは死を知り、恐れることにより生を生み出すが、それと同じく私は知るべきことを知り、進まなければならない」
「何を言っているのだ。進む？今という場所から？どこへ？」
不思議な感情が、青の竜から私の心へ伝わってくる。快。いや、それよりも心躍るもの。これが“笑い”というものなのか。
「私のあるべき場所、私の行きたい場所へだ。緑のラグースよ」
その時、すぐ後ろの草むらから、突然何かが飛び出してきた。いくら話と驚きで頭が一杯だったとはいえ、全く意識していなかったのは不覚だった。

僕が言い出したのは、落ちた枝や木々で弓と矢を作ろうということだった。ここのところ、僕の食べるものはいつもカンザーが取ってきてくれるけれど、ずっと頼っているわけにもいかない。僕は弓も矢も作ったことがあるし、的に当てるのも苦手ではなかったから、僕はこの日、カンザーと共に材料になりそうなものを探して、弓矢を作ることにしたのだった。
ナイフはカンザーが持ってきてくれた。すこし焼け焦げていたけれど、しっかりと使えそうなナイフで、僕はそれでいくつか作ってみたけれど、なかなかいい木がなくて、もう一度森の中に入って材料を探していたのだ。
そして木々をかき集めて戻ってきた時には、そこには一頭しかいないはずの竜が、なんと二頭になっていた。緑色をした竜。忘れもしない。あの時に、僕を食おうとした竜だ。
そう、そしてその竜が僕を見た瞬間、なんと前触れもなく僕に向かって飛び掛ってきたのだ。ものすごい咆哮と威圧感で僕の体は固まり、逃げる余裕も失っていた。

躊躇なくカンザーが頭を低くしてその緑の竜に体当たりした。半分体が浮いていた緑の竜は大きくバランスを崩して後ろに倒れた。
「本能の虜となったか」
カンザーは僕と緑の竜の間にゆっくりと立った。緑の竜は、今度はカンザーに襲い掛かった。首の根元に噛み付かれ、真っ赤な血が噴出す。僕は不思議と、自分の体の同じ場所が噛まれたような感覚がして、とっさに手で押さえた。
カンザーは噛み付かれたまま、大きく羽を広げて空へと飛び上がった。そこで緑の竜を振り落とす。羽を広げる暇もなく森の中に落ちていき、落下音が森中を轟く。これで終わりかと思ったけれど、緑の竜はすぐにカンザーに向かって飛び上がって攻撃しようとする。しかし、カンザーのほうが小回りが利くようで、逆に何度も緑の竜の背中に体当たりを与える。
そこで振り返った緑の竜が、突然カンザーに火を吹いた。羽を閉じて炎から身を守るようにすると、くるくると回りながら一直線に落下していく、そして地面すれすれで再び羽で風を掴み、舞い上がる。僕は円状に広がるその風で吹き飛ばされそうになった。
しかし、代わりに首に下げていた赤い石が、飛んできた枝に引っかかって落ちた。すぐにそれを拾い上げて指で軽くこする。そこには守りのおまじないがいつもどおり刻まれていた。
後ろでまた何か重いものが落ちた音がした。それと共に、僕も一瞬だけ息ができなくなる。振り返ると、なんとカンザーが地面に伏していた。上を見ると、地面が揺れるくらいの咆哮を発しながら、緑の竜がカンザーに向かって飛び掛ってきている。
僕はなぜか、考える間もなく叫んでいた。
「英気に満ちし風の主よ、その身に無の鎧を！」
その言葉と同時に、カンザーも咆えるように何かを叫んだ。
「ディシーフ・エルク、エ・クヴァシル・アムース！」
落下してきた緑の竜は、苦しみながらもそう唱えたカンザーに触れようとした瞬間に、カンザーと緑の竜の間で何か硬いものにぶつ

かったかのように大きく跳ね返り、そして近くの地面に地響きとともに転がり倒れた。
　カンザーはゆっくりと立ち上がると、僕に向かってゆっくりと歩き出した。僕は対照的に走って近づく。
「今の式は――――貴兄が作り出したのか」
「ううん。お守りに刻まれていたんだ。でもまさか本当に効くなんて・・・・」
「竜は式など組み上げることはできない。貴兄もまた、式を働かせることができない」
「式って魔法のこと？僕、魔法なんて使えないよ」
「そうだ。貴兄は式を組み上げただけ、私は式を働かせただけだ」
　カンザーの声は苦渋の色に染まっていた。体は目を覆いたくなるほど、至る所にある赤い傷がカンザーの体を裂いている。血は、竜の圧倒的な治癒能力なのだろうか、ほとんど止まっているようだったが、三本の爪の跡や噛み傷は痛々しい。左の角は半分欠けていた。
「カンザー、僕のせいで――――」
「いや、貴兄は何もしていない。それに、貴兄が死ぬときの苦しみに比べれば、この傷はたいしたものではない」
　僕が死ぬときの苦しみ。それは僕が感じる苦しみ？それともカンザーが感じる苦しみだろうか。
　カンザーは緑の竜のほうに目を向け、歩いていった。緑の竜は浅く早い息をして、体が上下している。
「私はラグースの感じた衝動を知っている。だから私は、止めるためには戦わなければならないということも知っていた。そう、そうしてお前は元に戻った」
　緑の竜は、ゆっくりとカンザーを見上げた。血の入り混じった涎が地面を濡らしている。
「――――自らの命を危険に晒してもでも、人の命を守るという心。私にも理解できる時が来るのか」
「来るだろう。そしてその時は、それほど遠いものでもないだろう。

ラグースよ、お前が先を見ているのならば」
緑の竜は、ゆっくりと立ち上がった。僕もカンザーも、何も言わずじっとその様子を見ている。彼は僕たちと目を合わせることもなく、擦るように歩いて森の闇に消えた。
僕は呆然といなくなった闇を眺めていたけれど、目に留まるカンザーの背中の爪跡にぞっとして、僕は急いでカンザーの正面に回った。
「すぐに手当てしないと。僕、薬になる葉はたくさん知ってるから、すぐに摘んでくるよ。だからここで横になってて。お願いだから――――」
カンザーはじっと僕を見ていたけれど、やがてゆっくりと横になった。
「ああ、待っていよう。貴兄がそう言うのならば」
僕は頷くと、まずは木を探していたときに見かけた薬草を取りに走った。

2．青い竜と黒髪の少年ー上（後書き）

お疲れ様でした。下巻もどうぞ

2．青い竜と黒髪の少年 一下（前書き）

荒荒〜。

１１０４０４微修正

2．青い竜と黒髪の少年 一下

「私は知ったのだ」
カンザーは、空の上で突然語りだした。僕は風鳴りでよく聞こえなかったから、カンザーの体に耳を当てた。結局残ってしまった背中の傷跡が、ぼくの耳に当たる。
「私は私自身というものが何か。まだ分からないことは多いが、私がここにいるということを知った」
空を飛ぶ高度がだんだんと下がっていく。行く先には、森の間にできた浅い谷があった。
カンザーはその谷へと滑り降りてゆく。遠い昔に川が流れていたのだろうか。谷の底にはうっすらと川筋の跡が残っていた。
そしてずっと向こう。正面のはるか遠くに、何かが見えた。カンザーは乾いた川底すれすれを飛んで、それに近づいていった。だんだんとそれが何か分かる。商隊だ！たくさんの獣車や荷物を運んでいるのが見えた。すぐにそういった獣たちの鳴き声やうめき声が谷に木霊し始める。
「だめだ、カンザー。人を襲ってはいけない」
僕は必死に訴えたけれど、カンザーはあの時と同じように何も言わなかった。僕の心に前のおぞましい光景が蘇る。僕は身震いした。
商隊は大抵こういった事態のために武装をしている。だから、剣や鎧がきらめく光が見えても不思議ではなかった。竜だ、こっちにくるぞ、という叫び声が聞き取れるようになってきた。
そこで、カンザーは突然速度を落とした、ぴんと張っていた羽を羽ばたかせて、減速の風を作り出す。地面の砂埃が舞い上がって、僕は真っ白な世界に入り込んだ。
完全に速度がなくなったようで、カンザーは静かに地面に足をつけた。次第に砂の霧が晴れていく。
カンザーは商隊の目の前に降り立っていた。護衛隊のたくさんの

槍や剣がこちらに向いている。
人が乗っている、早く助けないと、こんなところで死ぬのは御免だ。いろいろな声が飛び交っていたけれど、突然波のように静かになった。カンザーが少しだけ、首を下げたそれだけで。
「大丈夫だ貴兄よ。私は人を襲いはしない。さぁ、降りるがいい」
「なぜ、じゃあどうしてこんなところに――――」
「貴兄は人だ。人は人と生きるべきなのだ。貴兄は私がここに来るまでの間、恐れでいっぱいであっただろう。それが貴兄の心だ。私とは暮らす世界が違う」
僕はそこでやっと気づいた。この竜は僕に元の、人間の世界へ帰れと言っているんだ。
「いやだよ。僕はカンザーと離れたくない。僕は、僕は君のために生き延びたんだよ。今君と離れたら、僕はこれからどうしたらいいのさ」
カンザーはずっと僕を見ず、商隊の人たちを見ていた。警戒をしてるからじゃない。きっと僕を見たくないだけなんだ。僕には分かる。
「よく見るんだ。あれが人の世界。お前が属するべき世界だ」
その時一人の農婦が、護衛隊の間を抜けてゆっくりと歩み寄ってきた。護衛隊の人が制し、少し手前で立ち止まる。他の人たちがさらに息を呑んでいるのが分かった。
「そうだよ、坊や。この竜の言うとおりさ。竜と人は全く違う生き物。だけど、みんな他人のために生きているんじゃない。自分自身のために生きるんだ。そして愛するもの、愛されるもののために、人も竜も生きていく」
「そう、私は知ったのだ。私は貴兄にとって、一番のことを成すべきだと」
その婦人は、僕に片手を差し出してきた。さぁ、私たちといこう、と。僕はその手を見つめた。
あの手を握れば僕は元の人間の生活に戻ることができる。だけど、

本当に元に戻れるのだろうか。何が戻るのだろう。僕のいた世界に？そしてそれでいいのだろうか。僕はカンザーに、命も心も助けてもらったのに、何も返せず、何もできずに。

カンザー、君はなぜ僕を助けたのか。僕に、何を求めていたんだい。

その時不意に心のどこかで、白い花が咲いたあの丘を思い出した。あのとき、誰かがこう言っていた。

彼はずっと一人だったから、ただいなくなるのが悲しいだけなんだよ。

そう。そうだよ、カンザー。君だってまるで僕と同じじゃないのか。僕にずっと言ってきたことは、まるで君にも当てはまる。まるで君は、僕に言うと同時に、自分に言い聞かせていたのではないのか。君は、本当は強くなんてない。だから君は自分についた血の匂いをおぞましく思っている。君は言っていた。私はこの体から逃げ、恐れていたのかもしれない。私はどこから来て、なぜここにいるかは知らない。だが、私はそれでも自分の行うことに恐れていた、と。そんな君を、僕は置いていくことなんかできない。

僕はいつの間にか涙でいっぱいになっていた目をしっかりとこすった。きっと砂埃のせいだ。

「ごめんなさい。でも僕、彼と一緒にいなければならないんです。僕も、きっといろいろと強くならないといけないから」

「――――そう・・・・・」

他の人のざわめきの中、農婦は手を下ろすと、ゆっくりと後ろに下がって、そして笑った。

「人は強くなるものよ。そしてあなたは、竜の心を知り始め、竜もまた、人の心を知り始めているのね。ならば互いを助け合って生きていくことも、もしかしたら可能なのかも」

僕はゆっくりと頷いた。そしてカンザーに目を向ける。カンザーは片目で、じっと僕を見ていた。またため息を漏らす。

「人がなぜ苦を選ぶのか、私には分からない」

「僕には分かるよ。それは僕自身のため、そして愛するもののためさ。さぁ、行こうカンザー」
僕の威勢のいい声にあわせて、大きな羽が広がり僕は空へと舞い上がる。だんだんと遠く小さくなってゆく人たちを見ながら、僕はやっぱり少しだけ、寂しさを覚えずにはいられなかった。
「貴兄は、私と共にいることを願い、私には守るべきものが生まれた」
カンザーはいつもよりも低く、とてもゆっくりと語りだした。
「私は人を喰うことはない。そうだ、それは約束。だから貴兄よ、約束してほしい」
まるで返事を待っているかのように、カンザーは何も言わなかった。僕はうん、と頷いた。
「もう、自ら死のうとは思わないことだ。死すれば何も行う事はできない。生きていれば何でも変える事ができる。死んでも構わないという覚悟を持って変えることもできるのだから」
「もちろんだよ。少なくとも今は、僕は君の体にしがみついているんだから、死のうとは思っていない。そうだろう？」
「そのとおりだ、貴兄よ。これは貴兄と私との竜の制約だ」
「竜の制約？」
「互いの誓いを互いで果たすものだ。そう、よく聞くのだ貴兄よ、我が真の名はクヴァシルだ」
僕は息を呑んだ。
「真の名前、僕なんかに――――」
「これで真の名は交わされた。制約は互いに守られる」
竜はゆっくりとため息をついた。青く光った目が僕を捉えている。
「私は、貴兄がいつかは再び自ら死を選ぶ時がくるのではないかと思っていた。だがこれでもうそのようなことは、ない」
「僕の事、心配してくれていたんだね。ありがとうカンザー」
「“心配”――――私は心配していたのか。そうか・・・・」
「自分で気づかなかったのかい？でも、カンザーなら気づかないよ

うな気もするよ」
　僕が笑うと、カンザーも少しだけ口を開けて笑ったような気がした。いや、きっと笑ったんだ。
「カンザー、これ――――」僕は首に下げていたお守りを、落とさないように慎重に取り出した。
「カンザーにあげるよ。僕だって君のことが心配なんだ。だから持っていてほしい」
「しかし貴兄よ。私はそれを身につけることはできない。それは人のためにある」
　僕は少し悩んだけれど、少し考えた末、一旦カンザーに森に下りてもらい、そこで乾いた丈夫そうな蔦を探した。少し細いけれど、引っ張ってもびくともしない蔦を見つけると、それに鍵の石を鎖ごと縛り付けた。
「これをカンザーの首に回せばいいんだよ」
「首では翔けることに支障が出てしまう。脚でもかまわないか」
「うん、もちろんだよ」
　蔦をカンザーの前脚の付け根にくくりつけ、しっかりと縛った。
「少しきついかな・・・」
「いや、これで落ちてしまうことはない」
　カンザーは前に後ろに脚を動かして確認する。蔦が切たり、はずれてしまうこともないようだった。
「よし、これでいいね」
　僕はそう言いながら、なんとなく辺りを見渡した。ここだけ他の森とは少しだけ雰囲気が違う。そう、たしかにカンザーが降りるにはちょうどいい開けた場所だったけれど、この一帯だけ、たくさんの木々がなぎ倒されていたのだ。倒されてからはずいぶん時間が経っているようで、倒れた木は朽ちていたけれど、まるで新しい草や木の芽が生えてくる様子がない。ここだけが荒野のようだ。
「ここ、雷でも落ちたのかな？でも燃えたような様子もないし、何なんだろう」

「分からない。私はここには来ないようにしている」
カンザーが来ないようにするなんて、やっぱり何かがあったのだろう。そう思って辺りを見回してみる。辺りをしばらくうかがっていると、ずっと向こうの倒木の間に、何かが一瞬光った。何だろう。
僕は恐る恐るそれに近づいていった。カンザーは不思議そうに僕を見守っている。
それは土の中からすこしだけ突き出した何かだった。ゆっくりと取り出し、土を擦る。すると、それは三角形をした硝子の破片だった。真ん中に斜めの黒い筋があり、それを境に黄色と赤に色づいている。
「これは――――あの夢の中で出てきたステンドグラスの破片・・・」
間違いない。僕がまじまじとそれを観察していると、カンザーが近寄ってきた。
「珍しい形のものだな。一体それは――――」
カンザーはそれを見た瞬間カンザーは文字通り固まった。呼吸さえも止まったかのように、ずっとこの破片を凝視している。まるで僕の心そのまま表現しているかのように驚いているようだ。
「僕、ずっと前にこれがたくさん散らばった神殿にいる夢を見たんだ。そこには――――」
「赤い竜が白き槍によって壁に留められていた。赤き血を流して・・・」
「知っているの？そう、そこに落ちていたものだよ。間違いない」
だけど、カンザーは静かだった。何も言わず、ただずっと何かを考え続けている。
「そう、ここで私は・・・」
カンザーはゆっくりと、辺りを見回した。あたりを歩き回り、まだ立っている木を見て回る。よく見れば、木の表面の苔の中に、三本の大きな爪跡が残っている事に気づいた。
「貴兄よ。私は知らなければならない。そう、私は行かなければな

らないのだ」
「行くって、どこへ？」
カンザーは僕を乗せて、今までにないくらい早く空を飛んだ。僕はできるかぎり体を小さくしていたけれど、そのうちに、いつも寝ている大きな割れ目のある崖に近づいてきた。そこで少しだけ進路を変え、その割れ目からあまり遠くない、崖の下へと降り立った。
僕がくらくらしながらも降りると、そこには巨大な洞窟が口を開けていた。
「そう、私はここには来ないようにしていた。ここは封じられた場所、来てはならない場所。だが、私は来た。」
カンザーは、ゆっくりとその洞窟に進んでいった。僕もゆっくりと中に入っていく。
中はつるつるした床や壁でできていて、いつも寝ている場所よりもとても暗かったから、カンザーの羽の光で中が見えるようになるまで、少し時間がかかった。
そして、僕を出迎えたのは、壁にびっしりと書かれたたくさんの文字だった。
カンザーはどんどん奥に進んでゆき、やがて突き当たりに達すると、その側面の壁に目を向ける。
カンザーは、ずっと壁に書かれた文を眺めている。僕も竜の頭の下に入り込むと、文の始まりを読むことができた。
『字は、まだ覚えているようだ。村の商隊駐留所で字を習っておいて――――』

僕は続けて、それを読むことはできなかった。僕が字を読むのが遅いから、ということもあったかもしれないけれど、僕はただ沈んだ気持ちでずっと読むのは辛かった。だけど、これがカンザーの知らなければならなかったことなのだ。僕は胸が締め付けられる思いをしながら、血で書かれた最後の行を読み終わった。
僕が外に出ると、空はもう暗く、夕闇が森を支配しはじめている。

カンザーはまるでその暗さに溶けてしまっているのではないかと思えるほどに、静かに頭を垂れていた。
カンザーは元々人間であった。僕はそう頭の中で繰り返したけれど、実感が沸かないどころかどういう意味なのかさえ、よく分からない。今は竜だけど、昔は人であったということ？今も竜の姿をしているけれど、本当は人間であるということ？ずっと考えたけれど、やっぱり分からなかった。
竜の俊敏さに相応しくなく、カンザーは今頃になって僕がいることに気づいたようだった。暗い中に青い瞳が浮かび上がる。
「読み終わったか、貴兄よ」
僕は言葉も出ずただ頷いた。なんと言えばいいのか。話が途切れることはあっても、尽きることなんて、一度としてなかった。だから、僕にもこの沈黙が重いものだということを、しっかりと感じ取ることができた。森は虫の声や鳥の羽ばたきさえも大きな音に感じる。
「そうだ、私は人であった。そう、全てではないが、覚えている節もある。間違いはないだろう」
やがて口にした言葉は、いつもの尊厳ある深い声ではなかった。でも、それがカンザーの心の底から沸く思いなのだと思うと、胸が詰まった。
「カンザーは、人に戻りたいの？」
青い竜は今、大きな首をゆっくりと伸ばして、青い目で空を見上げている。明るい星がすでに瞬き始めている。その光が眩しいというように、カンザーは目を細めた。
「ずっと考えていた。私の今の姿は真の姿ではないと。だが真の姿が何なのか、私は知らなかった。もはや人に戻ることを畏れるように。自分の影を避けようとするように」
目を閉じ、青の瞳は見えなくなった。
「私はもう竜となり、竜として生きている。いまさら人に戻ることもないだろう」

「本当に？僕はたしかに牙も爪も凶暴そうな、今のカンザーでいい。そう、だけど、このままでも後悔しないのかなって、ただそう思うんだ。」
カンザーは僕を見下ろすと、ゆっくりと体を近づけた。
「悔い、か。私は異質なのだということを知っていた。言葉を話し、命を生かし、そして考える。それこそ私が感じてきた悔いであり、弱い足掻きだったのかもしれない」
「じゃあ方法を探そうよ。足掻き続けないと。元に戻ろうと思っていなくても、元に戻ることができなくても、どうしてカンザーが竜になったのか、それだけでもカンザーは知らないといけないよ」
竜のまぶたが少しだけ開いた。僕も自身の言うことに、言ってから驚いた。
「ごめん。いくらなんでも無茶だよね」
「いや、それは正しい。それこそが私の問うべき質問だ。その答えを知らずして、人に戻る意思があるか否かと、考えることなどできはしない」
カンザーは一旦羽を大きく広げて、そして丁寧に折りたたんだ。言葉も、あの心の底まで低く轟く声に戻った。
「探しに行かなければ。私にはどこにでも行ける羽がある」
よかった。僕は笑った。カンザーがあんなに落ち込む姿なんて、もう二度と見たくはない。
「じゃあ、あの割れたステンドグラスがある神殿に行くんだね。そしてあそこにいた魔法使いにそれを聞けばいいんだ」
「魔法使い？あの地に誰かいたのか」
カンザーは知らないようだった。僕は思い出せる限り正確にあのときの夢のことを伝えた。
「竜化魔法陣、竜の王・・・大きな暗示だな」
「うん、だけど僕にもどこに白い神殿があるかはわからないし、探しに旅をするにしても、とっても大変だと思う」
「なるほどそうか旅をするのかぁ。竜が危険を冒して旅をするなん

て、まるで伝説の大いなる試練みたいだね」
そう、突然誰かが会話に入り込んできた。僕が驚いて暗い森の中をぐるぐる探したけれど、見つけることができない。結局、カンザーの目線でどこにいるのか見つけた。暗くてよく見えないけれど、たしかに誰かいる。
「気配も何もなかった。どこから来た」
「うーん、旅をするなら、竜の視界からも姿を隠せる呪文があるということを知っておいたほうがいいよ。それから知識がないと竜でも命を落とすということもね」
この明るい口調、どこかで話したことがあるけれど、思い出そうとすると掴み取った砂のようにするすると流れていってしまう。一瞬だけ思い出せたのは白い花だった。
カンザーは半分以上戦闘態勢に入っている。僕はカンザーに両手を当てておし留めた。
「待って。君、どこかで会ったことがあるよね。一体誰だい？」
相手は突然、子供のようにガッツポーズをとりながら喜んだ。
「竜の護衛波長よりわしの呪文が勝った。こりゃ自慢になるぞー。ああそうだった、分かっているよ。まるで思い出そうとしても思い出せないよね。それはわしに会ったことを忘れてしまう魔法をかけていたからさ。わしの名前はセオだよ。どうだい、思い出したかい？」
霧が晴れるように、すっとあの花畑の様子が思い出された。いや、覚えていたけれど、まるで思い出す必要がないかのように出てこなかったのだ。僕はもやもやが晴れたような気分になった。
「――――ああ、思い出したよ、セオ！君また立ち聞きしてたのかい？」
「滅相もない。わしはただ村の結界の調整をしていただけさ。そうしたら突然結界の精度が弱まってさ、どうしてだろうとここに足を運んだら君たちがいたというわけさ」
この間も、カンザーはずっとセオをにらみ続けている。目が少し

赤に染まってきているくらいだ。その間にセオはいつの間にか持っていたランプをつけ、僕がしっかりと見えるところにまで近づいてきていた。
「結界の精度って？どうして僕らが君の結界と関係あるの？」
「おおありさぁ！」
セオは両手を大きく広げて辺りを見回す。
「竜は魔法の根源なんだ。だから竜の心に変化があった時、その思いは周囲にいろいろな影響をもたらすんだよ。だからわしがこの現象を観測したときには、十中十、君たちだなと確信はしていたんだ」
「貴兄よ。この魔法使いとはいつ会ったのだ。村の結界とは何だ」
セオは実に楽しそうに僕に会った経緯とこの森に人の住む場所があることを伝えた。
「でも、わしの魔法が破られたときは本当にショックだったよ。魔法使いやめようかと思ったくらい」
そしてセオは一人でつぼにはまって笑っていた。僕は苦笑いするしかない。カンザーもこの魔法使いに肩を下ろしているようだ。
「でも、地の移動というのは本当に危険なことなんだ。何か準備とかした？武器とか、食料とか？旅には絶対必要なものがたくさんあるけれど」
「いや、その必要はない。この旅は私のものだ。私一人でいいだろう」
突然の言葉に、僕は言葉を失った。そして何か言う前にセオが先にしゃべりだした。
「必要はある。一人で旅をする人なんて見たことがないよ。いくら竜でも地の旅は楽ではないよ。そうそう、君は、そんな旅に連れて行くことなどますますできないと言うだろう？いやそんなことはない。人一人の旅も竜一頭の旅も危険だけど、二人いればその危険はずっと抑えられる」
「そうだよ。それに、君が僕を置いていくなら、僕は一人でも君を追いかけていくからね」

カンザーは少し考えているようだったが、やがて僕を見て、きっと笑った。
「それはさらに危険な事になりえる。貴兄が共にいたほうがよさそうだな」
僕はその言葉に抱きついた。カンザーも、ゆるやかに右脚で僕を抱いた。
「よし、じゃあ決まりだ。需要品はわしの村で調達するといいよ。ただし、結界を通り抜けることができたらね」
入り口はこっちだよ、と言いながらセオはぴょんぴょん森の中へと入っていく。僕はカンザーと共にセオを追った。

もうずいぶんと森を歩いたけれど、セオはまたずいぶん先で僕たちを呼んでいる。
「もうすぐだから、早く来てよー」
僕はこの森にいる間にずいぶんと体は鍛えられたと思っていたけれど、もうそろそろ限界だった。対するセオは、まだ僕たちの名前を聞いていなかったとか、竜同士が戦うなんて元凶に近いことだけど何があったのかとか、全く疲れを見せずにいろいろ話しかけてきた。
「私の背に乗るか？」
「ううん、もうすぐらしいし、がんばるよ」
本当にもうすぐだった。
それは、僕の背の三倍はある巨大な鉄製の扉だった。それはまるで、白い石でできた建物を取り壊して、その扉の部分だけの壁を残したまま、長い年月のたった感じのもので、試しに裏を覗いても何もなくただ暗い木々が続くばかりだった。
「これがわしの守っている村への門だよ。ここまでの道のりもいろいろな守りの仕掛けがしてあるんだ」
僕はずっとその扉を見とれていた。ほとんどが緑の苔で覆われて表面を見ることはできないけれど、なんとなく書かれている紋章に

目が奪われる。僕は門にゆっくりと触れた。重々しい鉄の冷たい感触が、なぜか僕の体をゾクッとさせた。
「君は門に触れることができるんだね。さすがはわしの結界を破るだけはあるなぁ」
「普通は触れることはできないのかい？」
セオは、カンザーの方を向いた。カンザーは扉からずいぶん離れたところで立ち止まり、そこから近づいてこようとしない。
「どうしたんだい。早く行こうよ」
しかし、カンザーはまるで金縛りにあったかのように、その場で固まっている。息が荒くなって、なんと瞳は赤く燃え上がっていた。
「カンザー、一体どうしたのさ」
「この門は、心鏡の扉と言ってね。この中にいる人にたとえ会って、どのようなことがあっても危害を加えない者しか通すことのない門なんだ。君はすごいよ。心からそうは思わないと念じなくても、自然体でこの門は君を認めたんだからね」
「僕は、一度死のうと思ったことがあるから・・・」
「まぁ経緯はどうだっていいさ。問題はカンザーくんだね」
カンザーは低く呻き声を出し、口から涎を垂らしながらも、そこから進もうと努力しているのは分かる。だが足は一歩としてそこから進んでいなかった。
「カンザーは、僕と竜の制約をしたはずなのに・・・」
「竜の制約？歴史書に残る古の誓いかい？それはすごい！もしそれが、“人に危害を加えない”という条件だったら、絶対にその力のほうが強いから門は通すのだろうけれど・・・」
しっかりとあのときの言葉を思い出してみる。カンザーの誓いは、人間を喰わないということで、危害を加えないというものではなかった。
「じゃあ、カンザーは入れないということなのかな・・・」
セオは、カンザーの目の前に近づいた。カンザーはそこに壁があるように、何かにぶつかっているようだ。

「おかしいとは思わないかい？」
セオはカンザーに語りかけた。カンザーはまるで今にもセオを食い殺しそうな様子で、呻き声を発しながらその場でのた打ち回っている。
「どのようなことがあっても危害を加えない者なんて、この世にいると思うかい？」
突然、カンザーの動きが止まった。
「人はどのようなときだって愚かだ。そしてそれを決める基準はどこにもない。例えば、他人と仲間、同時にどちらかしか助けることができなかったら？どちらを助けるにしろ、どちらかには危害を加えてしまう。誰かが得をすれば誰かが損をするし、誰かが楽をすれば、誰かが苦労する。ならば誰もこの門に触れることはできないのかな？いや、フィードは触れることができた。ではどうしてか」
カンザーの足が、とてもゆっくりだけど、確実に一歩進んだ。体中震えていて、まるでものすごい重圧を受けているかのようだった。いや、僕にはなんとなくその重圧が伝わってきているような気がした。
また一歩進む。それは僕の歩幅よりももっと短かったけれど、確実に進んでいた。セオは一歩、また一歩と下がっていく。
「そう、つまりそれはどうやっても、自分が人を傷つけてしまうことは、起こりえるということをしっかりと認識しているという点にある。自分はたしかに人に危害を加えないようにはする。だけど、どうしても加えてしまうかもしれないということを、心から認めたものにこそ、この門は開かれる」
また一歩、また一歩とカンザーはゆっくりと門に近づいていった。たまに止まっては体を休み、そして、また一歩ずつ進んでゆく。そして、カンザーはゆっくりと前脚をあげて、そして歩く速度よりもさらにゆっくりと、門に手を近づける。後もう少しというところで、腕の動きが止まった。
「そう、私の心は――――竜となっても弱いままなのだ」

そして、カンザーの爪の先が門に触れた。その瞬間、全ての重荷から開放されたかのように、カンザーの動きは元に戻った。体の振えも納まり、僕が感じていた圧迫感もなくなった。
「やっぱり君たちはすごいや。じゃあ、改めて歓迎するよ。この門を外の人がくぐるのは数百年ぶりだ」
そう言うと、セオはローブの下から木でできた古ぼけたお面をかぶった。お面にはたくさんの皺が描かれていて、まるでおじいさんのようだった。
「お面なんてなんで被るの？」
「まぁ入ってみれば分かるって。君たちは来客だからもちろん普通でいいよ」
そしてセオは門を押した。金属が擦れる深い音を発しながら、その門はゆっくりと開いていった。

門の向こうも、普通の森だった。何ら変わったところもない。だが、なにか違うような気がした。試しに門を抜けてからくるりと一回りすると、そこには今通り抜けているカンザーの姿はなく、閉じたままの扉があった。
「裏の扉はもちろん結界の外の裏の扉と繋がっているから、開いてなくて当然だよ？」
「じゃあ、ここは結界の中ということ？」
「うーん、正確には違うけれど、まぁそんなところさ。さぁこっちだ。村はすぐだよ」
今度はすぐではなかった。暗い森の中の獣道をひたすら進み、やっとのことで集落が見える場所に来るころには、僕の足は本当に棒になっていた。
「さぁもうすぐだ。あれが、わしらが暮らしている村、テフヌトさ」
そこには、他の森とは比較にならないほど大きく太い木々が連なり、その高い木々の枝や幹に家がくっついて建てられている。木々の間は長いつり橋で網目状に結ばれていた。地面にも木でできた納屋や

家々が点々としていて、煙などがところどころで出ている。
　僕たちが村に近づくごとに村は、少しずつ騒がしくなっていたようで、僕たちが村の外れにたどり着いた時には、夜中だというのに人でごった返していた。それがなんと、ほとんどが僕と同じかそれよりも小さい子ばかりで、みんなセオと同じお面を被っていた。表面がつるつるの人もいれば、セオのように皺だらけのお面を被っている人もいる。
「セオ老師様おかえりなさい。あのそれで――――」
「ああ、彼ら二人はわしの友人なんだ。村で客人として迎え入れたい」
　今にも人を人で倒してしまいそうな勢いだった。みんな僕たちが来たことが物珍しそうで、どこから来たのか、その竜は凶暴でないのか、伝承の竜の双子の生まれ変わりではないのかと、僕にたくさんの質問が一度に飛び掛ってきて、僕は久しぶりに人の活気に出会ってうれしくなった。
「静かにしてくれみんな。客人方はもう疲れているんだ。いろいろな話は明日にして、今日は客人をもてなそうよ」
　その言葉にみなはどんどん納得してゆき、今度は我先にと村の中に走っていった。
「すまないねぇ、こんな村だから退屈はしないよ」
「――――ここには、子供しかいないのか」
「さすがは“竜の視界”だねぇ。その通りだけど、正確には間違い。ここの土地は、人の成長をある一定の年齢を境に止めてしまう力があるんだ。だから、体はみんな子供でも、年老いている人もいる。だから歳を表すためにみんなお面をつけているというわけさ」
「え、じゃあまさかセオも・・・」
「うん、わしはだからおじいさん。今年で１０２歳になるかな？」
　僕は息を呑んだ。
「あ、あの、いえ。な、なんか馴れ馴れしくてすみませんでした」
「いいのいいの、歳に関係なく体は子供だから。逆に恐縮にされる

と肩が凝るよ」
「ということはこの村に住む者は不老なのか？」
相変わらずカンザーは慌しい村の中に目を向けている。
「手厳しい質問だね・・・たしかに多少寿命は延びる傾向にあるけれど、平均はあまり変わりないようだ。寿命を迎えた者は、ある日突然死ぬんだ、ぱたりと。前触れはほとんどない」
僕は一瞬その様子を想像してしまって、気分が悪くなった。
「その寿命だって、必ず平均まで生きるとは限らない。自分がいつ死ぬか分からないのは外でも中でも同じだけど、やっぱり突然というのが辛いときもあるよ・・・」
セオはその時だけやけに元気がなかったけれど、それからは元の調子で僕を宿舎へ連れて行ってくれた。そこははるか下にいる人が小さくなるほどの高さにある建物だった。ここまでは恐ろしく長い橋子を登ってきた。登り用降り用が別々にあるのが面白かった。
「どう、高いところ怖い？」
「まさか。怖かったらカンザーには乗れないよ」
カンザーは僕のいる宿舎のある木の根元で体を休めていた。遠くから誰かがこっそりと見物しようとしているのが上からよく分かる。あの様子だとカンザーは、夜は眠れそうにないなと思った。
「ここが宿舎。家が壊れて寝る場所がなかったり、酔っ払いとかを寝かしつけたりする場所だけど、普段はほとんど使われてないからきれいだよ」
セオが持っていた杖を地面につけると、一斉に建物の蝋燭が燃え上がった。
僕は吸い込まれるようにふらふらと宿舎の中を歩き、ふかふかしたベッドが並ぶ部屋を見つけると、そのままその上に倒れて、死んだように寝てしまったそうだ。

目を覚ますと、見慣れた岩の裂け目でなく、木でできた天井だということに、僕はまず驚いた。人の作った建物。僕の家も、毎朝起

きるとこんな天井が見えた。
外はまだ日の出前のようで、薄暗く深い霧がかかっていた。僕は宿舎から一歩出て、外を眺める。どうしても、高い所にいるという実感が沸かない。手すりから下を覗いても、ずっと下でほんの少し明かりがともっているかなと思える程度で、それ以外は真っ白だった。白い雲の上に建物が浮いているかのようだ。
僕はひんやり湿った空気を大きく吸い込んで、ゆっくりと吐き出した。見えるのは二階建ての宿舎と、それを支える大きな木の一部。霧で全てが見ることができないくらいに大きい。今までこんなに大きな木は見たことなんか一度もなかった。一体どれくらいの歳月をここで過ごしてきたのだろうか。いやそもそも普通に育ててこんなに大きくなるだろうか。
宿舎から誰かが出てくる。僕が振り向いたときにはもう隣に立っていた。
「いやぁ、宿舎で寝るというのも悪くないね。今度からこっちで寝ようか。それにしてもついたとたんに寝ちゃうなんて相当疲れたみたいだね。まるで呪縛の魔法にかけられたみたいだったよ」
セオだった。相変わらず木のお面をしていて、表情は分からないけれど、きっとにこにこしているに違いない。
「ここ、すごいところなんですね。よく見ると何もかもすごくて、昨日はなんか感覚が麻痺してました」
「言葉遣いは前のままでいいのに――――たしかに、霧のおかげで見るべきものが限定されたから、まじまじと物が見れるってことだね。まぁ朝になれば晴れるからそうしたらまた麻痺するかも。」
僕はその言葉がなぜかつぼにはまり、少しだけ吹き出した。そしてセオのいた場所、声のした場所を見たとき、そこにセオはいなかった。辺りを見回しても、誰もいなかった。
僕は宿舎に戻り、中を見て回ることにした。僕が寝ていた部屋はとても広くいくつものベッドが並んでいて、どれもきれいに白い毛布が折りたたまれている。その部屋を通り越して、食堂と思われる

広い部屋に入った。とんでもなく長い一枚板で作られた机が三枚も縦に並んでいる。そのうちの一枚の端に、朝食が用意されていた。僕のためにセオが用意してくれていたのだろうか。椅子もスプーンもお椀もすべて温かみのある木でできている。

僕は久しぶりの料理を味わいながらもあっという間に平らげてしまった。もっとゆっくり食べるべきだったと、水の入った桶でお椀を洗いながら後悔した。その時、太陽の光が壁をくりぬいただけの窓から僕を照らし始める。その場所から外を見ると、霧は下に下がってきているようで、本当に雲の上にいるのではないかと感じた。外の遠くで、笛の音が聞こえる。

僕がベッドのところに戻ると、ベッドの脇にいろいろなものが置かれているのに気がついた。衣類や食べ物、見たこともないくらい美しい織物などが所狭しと。なんだかとても申し訳なく感じてしまうが、僕の足は簡単に作った古い草鞋だったし、ズボンもぼろぼろだった。正直このまま人前に出るのは恥ずかしい。

白い麻でできたズボンを穿いて、紐で腰を縛る。上着も用意されていた。僕はずっと鎧を直に着ていたけれど、普通は下に何か着るものだ。でも、いざ鎧を脱いでみると、慣れてしまっていたのか妙に落ち着かなくて、やっぱり鎧はそのまま着た。不思議と中で蒸れることもないし、それに前よりも僕の体にぴったりと合ってきているような気がする。

しっかりとした厚手のブーツを履いて、篭手のない右手だけに鹿の皮のグローブをはめると、急に人間らしくなったような気がして、僕は不意に苦笑いした。昨日、あのはしごを上ったとき、右手は素手だったので、上りきったときには右手は真っ赤になっていたけれど、これなら大丈夫。

外は下のほうを除いてすっきりと晴れ渡っていた。空に浮く家々をつなぐいくつもの橋に人が行き交っているのが見える。まだ朝だというのにこんなにたくさんの人が動き回っているのも僕にとっては印象的だった。

偶然、僕のいる空の通路を通りかかった子供・・・かどうかはわからないけれど二人の人が、僕を見つけるやいなや、走りよってきた。やはり例に洩れずお面をしているが、二人ともセオよりはずっとつるつるしたお面だった。
「竜の使いさん。よく眠れましたか？」
「あ、はい、おかげさまで。ここは本当にすごい村ですね」
「ええ、そうでしょう。ですが外から人が来るなど、今まで一度としてありませんでしたから、みんな大騒ぎで」
そういっている間に、もう一人の子が手すりにつかまって遊びだした。
「こら、そんなことしたら危ないじゃないか、お父さんの横にいなさい」
僕はその言葉に心の中では驚いたけれど、表には出さないように努力した。見た目はほとんど変わらないというのに、この二人は親子なのだ。僕の頭は、歳の印象の整理で必死になった。
「この村に来て、僕は驚くことばかりです。こんな世界があるなんて知らなかった」
「それはまた、村の皆も同じです。それに竜と共に来るなど、いまだかつてないことですよ」
そこで、子のほうが僕の左手を握った。鎧の上から、不思議と触れた感覚が伝わってきた。
「おにいちゃんは“竜の双子”なの？」
「竜の双子？」
「ああ、単なる伝承の話の一つですよ。子供に聞かせるお話なのですが、竜と人が一緒にいるだけで、子供たちはそう騒いでばかりなんです」
僕は子供の手をゆっくりと握り返して、微笑みかけた。
「ああそうさ。僕は竜の双子だよ。僕たちは大切なものを探しに旅に出でなくてはいけないんだ」
「大切なもの？」

たしかに身長も体格も同じだが、やはりこの子は子供で、あの人は大人だと、雰囲気が語っていた。
「ああ、僕の一番の親友の宝物をね」
あと、村長がぜひ会いたいと言っていたよ、と言い去っていく二人を見送りながら、僕は人の心は成長するということを実感していた。
僕は木と縄でできた揺れるつり橋を何度も渡って、村長の家がどこにあるのかを毎回聞きながら進んでいった。あちらこちらで穴の開いた筒を横にした笛を吹いている人を見かける。皆親切で、案内をしてくれると名乗りを上げてくれる人も多かったけれど、僕はそんなことまではと毎回断った。人が来たことなんてないと言うだけはあって、本当に僕のことは物珍しいらしく、話しかけてきてくれるどころか、時には僕にお祈りしてくる人までいた。おかげで僕が、あまり他の家と変わりない村長の家につくころには、すっかり日は昇っていた。
この村の家には扉も窓もないから、僕は入り口から遠慮がちに中を覗き込んだ。中から少し強い口調の声が聞こえる。セオだ。
「竜の双子がこの地に召喚されたというのは偶然なんかではない。わしはあの竜の護衛波長を知っている。あの竜はまさしく――――」
そこで、僕がいることに気づいたようだった。セオは立ったまま、藁の座敷に座る少年と話していたようだった。
「やぁ、きみがフィードか。これから君のところに行こうと思っていたのに、そちらから来てもらうとは、これは失礼した」
その人は他の村人の着ているような質素な麻に、少しだけ鮮やかな装飾をした服を着ていた。そしてなんと、お面をしていなかった。若い少年が僕に笑いかける。
「俺の名前はレイスという。未熟ながらこの村の村長をしている。よろしくな」
「あの、初めまして、フィードと言います。こちらこそよろしく」
「そんな入り口にいないでこっちに座ろうよ。わしも立ったままで

腰が折れるよ」
「ははは、それは絶対にないですよ」
僕がその場に座ると、僕はレイスさんをじっと見て、辺りを見回す。特に何かすごいものがあるというわけでもなく、この人がいる以外、特に他の家の様子と変わりはないようだった。だけどなんとなく雰囲気が違うように感じる。
「村の長だけがお面を外すのを許されるのだ。さて、君はこれから旅に出るのだな。一体どういう理由でかね？」
「あの、それは・・・言わないといけないことでしょうか」
「いやいやそんなことはないよ」
村長は多少慌てながらも、まるでセオのように微笑む。
「竜の旅だ。我々が知る必要のない、理解し得ない理由がそこにはあるのだろう」
僕は答えられなかった。長はすでにそのことは理解していたようだった。
「旅をするためには準備がいる。村総出で君たちのために準備をしよう」
「いえ、そんなことまでして頂かなくても――――」
「いいかい。この村が偉大な竜の旅の始まりの地となるのだ。それがどれだけすごいことか分かるかね？竜の飛び去った地は恵みがもたらされる。その始まりに、この村がなるのだ。これほどすばらしいことはあるまい」
僕はどういったらいいのか困り、セオを見た。セオはきっとにこにこしながら僕を見ていた。
「さて、早速だけど調度品をそろえないとね。わしと共に来てフィード。いいものをあげるよ」
「老師はせっかちなお方だ。何か必要なものがあれば村の誰かに訪ねるといい。君のためなら誰でも用意してくれるだろう」
「あの、本当にいろいろとありがとうございます」
「何、あなた方の願いを聞くことのできる私たちの幸運ですよ」

僕は何度も深くお礼を言った後、村長の家を出た。セオは相変わらずすたすたと歩いていき、梯子を降り始めた。僕も後に続く。今突風が吹いたらきっと落ちるだろうな、という変な考えを振り払いながら地面に降り立つと、笛の音がいたるところで聞こえてくる上とは一変して、小さく金属を叩く音や何かを削る音が聞こえてきて、妙にゆったりと静かな雰囲気が漂っている。下は木でできた家や石でできた家がぽつぽつと立ち並んでいた。

「上は生活区、下は作業区というわけさ。さぁこっちだ」

赤くなった金属を叩く家もあれば、何かを縫っている人がいる家もあった。でもどちらかと言えば皆静かで、黙々と作業をしているといった印象が強かった。

「さぁ、ここがわしの家だ。とはいってももちろん職場だけどね」

それは宿舎と全く同じように木で作られた家だった。唯一違うところといえば、この村の中で初めて目にする扉があることくらいだ。

ぼくはその時やっとあることに気づいて、そこで辺りを見回した。だけど、見当たらない。

「ああ、カンザーくんは一本向こうの官舎だよ。ちょっと体の大きさを測りたくてね。さぁ中に入った」

中は他の建物の部屋とは違って薄暗く埃だらけで、僕の息は一瞬つまった。山積みになった本が外との外気を遮断して、空気を篭られている。セオはその中にあるランプに火をつけ、椅子に座った。机の上にある本や紙やいろいろなものを下に降ろした後、どこかから引っ張り出した紙を広げた。

「これが大陸の地図だ」

「地図？」

セオは僕の反応ににやりと笑った。僕が見下ろすと、そこには青や緑で塗りつぶされた場所や、いろいろな地名が点で描かれていた。

「自分の町を出る必要のないものにとっては無縁のものだから知らなくても当然だね。商隊も自身の地図は決して公開しないものだし。これはいわば世界の略図さ。ここがわしらの今いる場所、トルネス

の森の中・・・」
　そういって指をさす。そこには緑に塗りつぶされた場所があった。
「エイルという村は、どこにあるの？」
「エイル・・・高い処方と調合のできる村であるということは知っているけれど、場所は分からないよ。この地図はわしがたまに買出しで出歩く範囲しか正確じゃないからね」
「そう・・・」
　僕は少しだけ寂しいような、懐かしいような、それでいて悲しい思いに襲われた。
「生まれ故郷？育った場所？」
「うん、僕が住んでいた村だったんだ。今はもうどうなっているかは分からないけれど――――」
　あの日、僕のいた村は襲撃に会い、そして・・・・。
「まぁ、過去は聞かないよ。そうそう、そしてこれが“銀の槍”だ」
　地図の中心。セオは肩をすくめながら、茶色く輪になっているところの中心にある、黒い点へ指を移動させる。
「銀の槍って、あの伝説の？」
「そう。なかなか博識だねぇ――世界を創りしグランが世界を揺るがないように打ち付けたもの。それがここにあるとされているが、実際はどうか分からない。誰も行ったことなんてないからね。だけど、世界の風が銀の槍を中心に回っていることくらいは知っているだろう？」
　僕は頭を横に振った。
「そうかぁ。じゃあ説明するとね。世界に吹く風は不思議と、この銀の槍を中心に右回りに回転しているんだ。風は銀の槍に近づくほど強くなり離れるほど弱くなる」
　セオの指が地図のうえでぐるぐると回る。
「なぜ風の話をするかと言えば、理由は二つある。まず一つは、君たちはこれから空の旅に出るからだ。よって、この風に逆らって空を飛んだ場合、場所によっては全く進まなかったり戻ったりしてし

まう場合もあるんだ。だから、君たちは原則として、この風に沿って旅をしなければならないだろう。だから自由にとはいっても、ルートは限られてくるはずなんだ」

セオは近くの棚に行くと、そこから何か金属でできたの物を取り出した。それは手のひらに乗るくらいの円盤状の首飾りみたいで、たくさんの目盛りとそれにあわせたたくさんの針が、いろいろな色で何かを示している。

「そしてこれが二番目の理由。これは“方時計(ほうじけい)”という貴重なもので、ありとあらゆることを計測することのできるすぐれものなんだ。なおかつ、旅をするものには必須のものとなる」

セオは再び地図に目を戻した。不意に見たセオの影が、積み上げられた本に映るのが不気味だった。

「この方時計はまずその土地の時刻を指し示す。この時刻と太陽の位置で、方角を求めることができるんだ。そして次の目盛りは、その土地の風速、まぁつまり銀の槍からの距離を表す。これは方時計に風を当てたりしなくても自然と表示されるから便利だよ。そう、そして現在の風の向きを正確に測ると、この地図上で、自分達が今どこにるのか正確に把握できるというわけさ」

「え、それだけで分かるの？」

「そう、暫定的だけど、ずいぶん正確な割り出しができるはずさ。まぁ慣れればだけどね。少し例題を出してあげるよ」

そう言って、セオはいくつかの例で、方時計と地図の見方を教えてくれた。僕は意外と複雑な計算をするのが得意だったから、覚えるのにはそれほど時間はかからなかった。

「そうそう。ずいぶん飲み込みが早いね。これなら示陸士にもすぐになれそうだ」

「まだ、方時計には針があるけれど、後は何を示しているんだい？」

「そうそう、まだ言ってなかったね。ここからはさらに難しいよ。この赤い針は時間の倍率を示すんだ」

「時間の・・・倍率？」

「うん、だけどこの話は難しいから、また後でね。わしはそろそろ結界の監視に行かないとけいないから」
そうだ、セオはこの村の結界を作っているのだ。すっかり忘れていた。そしてもう一つ忘れていることもあった。
「うん、いろいろありがとう・・・ございます」
「だから普通のままでいいって。わしにはそうやって普通に話しかけてくれる人がいないから、少し気が滅入るときもあるんだ。だから君たちが来て本当に楽しいよ。そうそう、もちろんその地図と方時計は持っていっていいよ。そしていつか、返しにきてね」
セオはお面を一度だけ外して僕に笑いかけると、杖を持ってさっさと出かけてしまった。

僕が村の下の様子を見たり、カンザーを探したりするために歩いていると、やがて木の間を流れる川にたどり着いた。川岸ではなにやらにぎやかに人が集まっているようだった。
「おお竜の使いさん。こんなところまで来るとはおなかがすいたのかな？」
女の子の声だった。男性と女性でお面の模様は微妙に違うようだったけれど、ぼくにはさっぱりよく分からず、声を聞いて初めて分かる。
集まった人たちはみんな弓を持っている。僕が知っている弓よりも少し長めで、形も違う。そして何より、その対となるはずの矢や矢筒を誰も持っていなかった。
「狩りの帰りですか？」
「いやいやこれからさ。、川射ち、つまり魚を射抜くんだ」
魚を？僕は驚いた。地上にいる生き物を射抜くならまだしも、水の中の魚を射抜くなんて難しすぎる。その女の人は川に顔を向けて楽しそうに説明してくれる。
「たしかに釣りなどもしますが、これは弓矢の練習の一環なんですよ。どうです、やってみますか？」

弓には自身があったけれど、今はその自信も揺らぐ。
「僕なんかにはできませんよ」
「いえいえ、まずは試しですよ。さぁさぁ、これを持って」
僕はとてもしなやかな木でできた弓を手渡された。ずっと軽く、それでいてとても丈夫そうだ。弓にはたくさんの不思議な文字が刻まれていた。
「矢はないんですか？」
その言葉に、その女の人だけでなく近くにいた人までもが驚きの声を上げる。
「風の矢を使ったことがないのですか？」
「風の矢？」
「説明するよりは、見てもらったほうが早いですよ」
そういって周りを見回すと、いろいろな人が矢をつけず素引きで川を狙う。するとなんと、引き分けていくうちにだんだんと光り輝く白い矢が、何もないところから現れた。手を離すと、甲高い音を発し、矢が川の中にとんでいった。
「あー外したか。やはり客人を前には心も乱れるな」
頭を掻きながら照れている人を見ながら、僕は目に見える魔法というものを初めて目にしたことに、深い感動を覚えていた。
「僕は、魔法なんて使えませんから――――」
「いいえ、この弓にはこの森特有の力を集める文様が刻まれていますから、普段どおりに引けば大丈夫ですよ。弓が矢を導きますから」
それでは試しにと、僕はしぶしぶと体を川に対して垂直にして、足を広げて胴を固定する。ゆっくりと弓を引くと、なるほど、たしかに矢がそこにはあった。
しかし、川の中にいる魚をどうしても見ることができない。じっと川の中を眺続けるけれど、ゆらゆらと揺れる川底が見えるばかりだ。
一瞬、その川の中で何か銀色のものが揺らめいた。
僕は矢を放った。白い筋が、一直線に川の中のそれに向かって飛

んでゆく。川に小さな水しぶきが上がったけれど、それだけだった。
「さすがですね。たった一回で魚を見分けることができるとは。とてもおしかった」
僕は自然ともういちど弓を引いていた。悔しかったというわけではない。そう、それは獲物を捕らえられなかった時のための次の条件反射のように、僕はまた川を狙っていた。
一瞬だけ、突風が僕の傍らを吹きぬける。
「下に指二本分、右に髪の毛一本分だ」
僕はその言葉どおりに、その銀の目標から矢をずらし、そして放った。矢はたしか目標からそれて飛んでいったけれど、水しぶきが上がったその場所には、白い矢が刺さった一匹の魚が浮き上がっていた。
誰もが静かだった。僕が弓を下ろして後ろを見ると、そこには大きな青の鱗の壁がそそり立っていた。
「ありがとうカンザー、おかげでいい射ができた」
「水には光屈折が存在する。後は流速による軌道のずれ、風の影響もある。見えるものが全てではない」
周りの人たちは、カンザーの姿に感嘆の声を上げていた。夜に見かけたひともいるらしいけれど、鮮やかな青の鱗は昼のほうが美しいと、誰もが目を離せないようだった。
「さぁ、川射ちを再会しよう。昼に食べる魚がなくなってしまう」
そういって、一人が弓を引いた。しかしなぜか、完全に弓を引ききっても白い矢が現れなかった。
「あれ、おかしいな・・・」
他の人も何度も試していたけれど、誰一人して風の矢は現れなかった。困惑の声が広がっていく。みんな慌てているようだった。
「それは竜がこんなところにいるからだよ」
その声には聞き覚えがあった。僕が目を向けると、そこにはレイス村長の姿があった。
「竜は魔法の根源と同時に強い安定の力を持っているからね。人の

使う魔法というものは世界を歪めて不安定にするもの。こんなに近くに竜がいれば、あまり強くない弓の呪文は消え去ってしまうということさ」
「安定の力とは、どのようなものなのだ」
カンザーは長がお面をつけていなかったり雰囲気が違ったりするためか、いつものように少し警戒しているようだった。
「カンザー、この人はこの村の長なんだ。だから間違いではないよ」
「貴兄よ、この村の風はどうも変だ。まるで私が作り出す風のように波がない」
そう？と言いながら試しに風を感じてみるが、実際には風はしっかりと強弱があるし、不可思議な風は吹いてはいない。
「私に乗るのだ。少し様子を見たい」
「カンザーがそう言うならば、そうするけれど・・・」
カンザーが何を言っているのかは、僕には分からなかった。だけどその“風”に関係あるのか、カンザーは歩いたまま村のほうへと進んでいく。
「弓のほう、ありがとうございました」
「いやいや、こちらこそいいものが見れたよ」
カンザーが離れていくと、再び矢が使えるようになっていることを確認してから、僕は前を向いた。
「今までどこにいたのさ。上を歩いている間もずいぶんと探したんだよ」
「ずっと鞍について話していた。もし突風で貴兄が飛ばされたら困る。身体に縛り付けてでも行こうかとも思ったが・・・」
「まさかそんなことはされたくはないよ。それで身体の大きさを測るって言っていたのか」
「そうだ。馬の鞍を延長したものらしい。もしかしたら使い物にならないかもしれないとは言っていた。貴兄は何をしていた。その首に下げているのは何だ」
「そう、これ、方時計って言うんだ」

僕は方時計と、これの使い方について、自分自身の暗記の確認も兼ねて説明した。
「場所の正確な確認は、私も考えていたことだ。また知識なく危険な土地に飛び込むことも避けたい。この式は役に立つ」
「うん、だけどこの方時計には、まだ教えてもらっていない針もあるから、また後で教えてもらうんだ」
その時、カンザーの足が止まった。僕は話に夢中で、カンザーが今どこを歩いているかを気にしていなかったから、辺りを見回す。
そこは村の中心となる広場のようだった。真ん中には大きめの焚き火が燃えていて、その周りでいろいろな人が話したり、また遊んだりしている。僕たちがいることに気づいた人たちは、近づいて挨拶をしてくれたりした。
広場は円形の石畳でできていて、他の土の踏み固められた場所とは少し違う。その円には不思議な模様が描かれていた。
「不覚だ、機能してしまう」
カンザーは早口にそう言うと、突然、耳鳴りがするほどの音量で咆えた。そして焚き火に近づくとそれに火を吹きかけた。小さく燃えていたそれは突然大きき炎の柱となり、轟々と燃え出す。
周りの人たちは、叫び声を上げながら逃げ出していた。
「カンザー、なんてことをするんだ。門でのことを忘れたの？」
「間に合ったか」
カンザーは僕の言っていることが聞こえないかのように静かに言った。
その瞬間、広場の地面に書かれていた模様が突然白く光だした。そして、次の瞬間、広場はお碗状に大きくへこみ、そして石の地面はゆるやかに消えた。カンザーが羽を広げる間もなく、僕たちは開いた大きな穴に落ちてゆく、穴の側面も石でできているようで、そこにも同じようなたくさんの模様が書かれているようだった。
僕はただひたすらカンザーの背中につかまっていた。カンザーが羽を広げるには、この縦穴は狭すぎる。カンザーの身体がひるがえ

ると、もう点に近い白い穴の入り口が一瞬だけ見えた。それに比べて下はどこまでも深く暗く、その中に吸い込まれるように、僕らはただ落ち続けていた。
やがて、突然その縦穴の直径が大きくなった。すかさずカンザーは羽を広げ、ゆっくりと落下速度を落としていく。すると、壁に書かれていた模様がカンザーの羽の光と同じ色で輝き始め、それとともに下から風が吹き始めた。やがて、カンザーはただ羽を開いているだけで、ゆっくりと降下してゆくほどになる。
「あれは竜のための門だ」
「竜のための門？」
「不覚にも踏み込み、展開をしてしまった。」
なるほど、この穴に落ちる人を出さないために、カンザーは人を脅かして逃げてもらったのだ。僕ならとっさには思いつかない行動だ。
「そしてこの門は、開く意思なく開くことはない」
その時僕は、下が妙に明るい事に気づいた。落ちないようにしながらも下を見ると何かがあるのが分かる。
そして、僕の視界が開けた。今まで縦穴だった場所は、薄暗くとても広い空間となる。天井も下もたくさんの突起物が生えていて、たまにそこから水が滴り落ちている。
カンザーが底に降り立つときになって、初めて光っているものが何か分かった。そこには、あの広場と同じような円形の石畳の上いる、一頭の白い竜からだったのだ。カンザーよりも大きく、そして美しい。身体は羽を大きく広げたままその石畳に伏していて、少しだけ錆びた鉄の鎖で何重にも押さえつけられていた。
「カンザー、あれは一体・・・」
カンザーはただ答えず、じっと静かにしているだけだった。ずっと白い竜を凝視している。このままずっと沈黙が続くかと思ったけれど、カンザーはすぐにそれを破った。
「この竜はラルヴァンダド。世界を支える竜。悪い者ではない」

「じゃあ助けないと。あんな風じゃ動けないじゃないか」
カンザーはまた少しの間無言になった。まるであの白い竜と話しているかのように。いや、きっと話しているんだ。
「彼の身はもはや器にすぎず、彼自身はもう世界に溶けてしまっている。彼はもうここにいて、ここにはいない。なるほど、この村の者が魔法を使えるのは、君の強い影響なのだ」
「そう、この竜は言っているの？」
「そうだ貴兄よ。ラルヴァンダドは貴兄を歓迎している。竜の双子の生まれ変わりと」
竜の双子・・・村の人も言っていたけれど、僕にはよく分からない。
「そうだカンザー、君の身体のことも聞いてみたほうがいいよ。何か知っているかも」
「私が一番初めに聞いたことだ。だが、君は知らぬと言う。人を竜に変える術など、この世界にはないはずであるし、あってはならぬものだと」
白い竜の上の辺りがまばゆく光りだした。僕は腕で光を遮っていたけれど、少しずつ目が慣れてくる。その光は、三角の面だけでできた結晶から放たれていた。
（あなたが旅に出るというのならば、あなた方を祝福しましょう）
その光を通して、僕の頭に声が響いた。その声はやさしい女の人の声だった。
（その石を噛み砕きなさい。そうすればこの身の力はあなたに流れ、必ずあなた方を助けるでしょう）
カンザーは僕を乗せたままゆっくりと飛び立ち、光り輝く石に近づくと、ためらうことなくそれを噛み砕いた。鈍い音と共に洞窟の中は再び真っ暗になり、声も聞こえなくなった。いや、光が途切れる瞬間に、こう聞こえた。
（クロノスの鉄槌よ。その力を以って正しき秩序を築き給え・・・）
「私たちの旅を祝福してくれたのだ」
「うん、僕にも言葉、聞こえたから・・・」

「貴兄にも聞こえたのか。ならば最後の言葉は貴兄に宛てたものだったのだな」
「僕に？」
「そうだ。私は確かに聞いていたが、その言葉を覚えることはできなかった。竜には覚えることができない。私の中にある式が、それを邪魔してしまう。だからそれは、貴兄に宛てた言葉なのだ」
クロノスの鉄槌よ。その力を以って正しき秩序を築き給え。意味はわからないけれど、その言葉を心の中で繰り返すうちに、なんだか元気が沸いてきた。
それから、出るのはあっという間だった。というよりも、あの縦穴は竜の羽と同じように風を作り出すらしく、僕らはその風にのって押し出されるように外に出ることができた。そして、地上に帰ってきた瞬間、大きな穴があった場所は、何事もなかったかのように元に戻っていた。

僕は村長の家で、事の経緯を説明していた。カンザーが暴れた理由や現れた大穴、そして洞窟の底にいた竜のこと。僕が話し終わると、なぜか不穏な空気は明るい空気に変わっているようだった。じっとしていたセオが立ち上がる。
「みんな聞いたかい。この村の守護神にこの二人は会った。まさにこれはめでたい。わしらの土地に恵み、与えるものから祝福された者、そして村の人たちの命を助けようとした竜など、この世にいるだろうか。いやいやいまだかつてないぞ。これはすばらしいことだ」
「あの、でもカンザーはみんなを怖がられてしまったようで――――」
その言葉を村の長は手で制した。
「命を助けるための最善の行動であったし、あの咆哮がなければ怪我人がでていたかもしれなかった。村一同の代表として感謝する」
村の重役会議は事もなく終わり、僕は宿舎に戻る前に、少し靄のかかる木の下に降りていった。下にはカンザーが木の根元で横にな

っているのがすぐに分かった。
「どうした。特に悪いことは言われていなかったようだが」
「やっぱりカンザーは耳がいいね。こんなに遠くでもものが聞こえるなんて」
「それが竜だ」
僕は丸まったカンザーの体の真ん中に座って、体全体でカンザーに触れた。鱗のごつごつした感覚が心地よい。
「やっぱり僕、こうやっているほうが落ち着くや」
「それは、凶暴な竜に囲まれ守られているからな」
明らかに冗談だ。僕は吹き出した。そのまましばらくしてから、木の上にある村の様子を見た。星の下にあるすばらしい場所だ。
「でも僕、もういかないと、ずっとこの村の人たちに頼ってしまいそうで怖いんだ。みんなずっと優しいし、話していても楽しいから。でもずっとそれに甘えてはいけない。この外は僕のいた村のように過酷なことがたくさんある。そして僕らは、行かなければならないんだ」
「過酷な道へ進むことが、時と共に畏れるようになる。幸福な地に慣れてしまえば、それだけ過酷な道がより過酷になるということだな」
僕は頷いた。カンザーは、深く息を吐くと、空を見上げる。いっぱいの星空に、はぐれ星が流れていた。
「上で笛の音が聞こえる。町全体で祭りが行われるようだ。行ってくるといい。私はここで、この村での最後の夜を聞いている」
僕は立ちひざになると、カンザーの口に僕の額を当てた。
「――――何か意味があるのか？」
「ううん、なんとなく。じゃあいってくるよ」
僕はカンザーの尻尾を飛び越えて梯子を駆け上る。なるほど、たしかに上はお祭りのようにぎやかだった。
僕は今まで食べたことのないような美味しい料理を前に圧倒されていた。家々で料理が作られては外で振舞われている。そしてなん

と酒までである。子供ばかりの村に酒があるのは少し妙な感じもしたけれど、いろいろしているうちに結局僕も飲んでいた。とても甘く、それでいてすっきりしたその飲み物は、本来なら収穫祭にしか出さないものだと言う。僕はたしかにふわふわした感じにはなったけれど、周りの人に比べればあまり酔うことはなく、セオに大酒飲みだなと言われた。やがて村中で笛の合唱が始まると、僕もセオに横笛の吹き方を教えてもらいながらそれに参加した。みんな踊ったり歌ったりしていた。僕はたしかに楽しかったけれど、ぽったり開いた心の穴をどうしても塞ぐことができず、僕は気を紛らわすために、同じくどう考えても大酒飲みのセオに質問した。

「ねぇ、セオ。方時計の残りの針は、何を指し示すんだい？」

「ああ、そうだった説明するの忘れてたね。いいかい、酔って忘れちゃダメダヨ。この大陸は、場所によって存在する魔法も生きている生き物も全く違うけれど、なんと時間の進む早さまでも場所によって違うんだ」

時間の進む早さ。僕はとっさに想像したけれど、場所ごとに時間の早さが違うなど想像もできない。

「この赤い針は、現在の位置の時間の早さと、ベルタウンと呼ばれる時間の基準となる町との、時間の進む速度の倍率差を表している。これが1よりも小さくなればベルタウンよりもいる場所の時間はゆっくり流れているし、大きくなれば早くなっている。もし君がこの倍率の差が大きいところを往復すれば、時間の進み具合の差に混乱するだろうね。横にあるのは、その基準となるベルタウンの今の時刻。現在いる場所の時刻を示す針と見比べれば、少しずつずれていくのが分かるよ」

僕は突然の難しい話に頭がいっぱいいっぱいになる。カンザーがこの話を聞いていることを願った。なんとか頭の中で復唱して理解しようと努力するけれど、やっぱりぼけっとしてくる。

「辛くなってきたみたいだね。もう少しだから頑張るんだ。最後の重要な点だからね。問題なのは君たち旅人の体調なんだ。歩いて進

む商隊の人たちならまだ無視できる範囲だけど、君たちは空を飛んで高速で移動する。それはつまり、時間倍率の変化がはげしい中を飛ぶということで、進路によっては一日中、ずっと太陽が出続けて沈まないということだってあるし、移動中は現在時刻の針が逆戻りすることだってある。つまり、いつ休んだらいいのかわからないことになる。これは非常に危険なことで、旅人たちの体力を著しく消耗させる要因なんだ。だから、最後のこの針は君たち自身の、君達のためだけの時刻だ。この時計が夜を指し示すタイミングで、夜になる地を選んでは休み、そして次の場所へと進んでいくといい。周りの時刻に惑わされてはいけないよ。たとえ昼でも、針が夜だったら寝なければならない。これが、旅をする上での重要な点だ」

僕は最後のセオの真剣な説明に圧されて酔いは吹き飛び、しっかりとそれを頭に叩き込んでいた。

「まぁいいさ。明日もう一度ちゃんと説明するよ。心配は要らないさ。もう竜の鞍もできているし、旅の間の食料もみんな宿舎に準備されてる。今日は全てを忘れて楽しもうよ」

セオはそう言うと、もう一杯と酒を注ぎに行った。僕はゆっくりと宿舎に戻ると、方時計を眺めた。僕はこれから、これを指針に旅をしなければならないんだ。

僕は、まだ村が祭りで盛り上がっている間に眠りについた。

僕はまだ星が出ている時に目を覚ました。外はもうすっかりと静まり返っている。宿舎の中は結構な人が寝ていて、かなり散らかっている。なるほど、酔いつぶれた人はここで一夜を明かすということだ。

僕は用意されていた背嚢に地図や、必要なものを詰めた。ふとみると、祭の時に吹いていた笛もある。僕はそれも中に入れた。革でできた丈夫そうな特注の鞍も手にする。ゆっくりと廊下を出て食堂に行くと、乾燥した食料などが山済みになっていた。ここまでたくさんなくてもいいのに、と思いながらも、村の人たちの親切に感謝

した。僕はもう一つの背嚢にできる限りの食糧や水を詰めた。
「それを下まで、まさかひとりで持っていく気はないだろうね」
僕が驚いて振り返ると、そこには光る杖で、少しだけあたりを明るくしているセオがいた。
「ごめん、こんなこそこそと――――」
「いや、旅人はいつどんなときでも自分の意思でそこを出発するものだ。それがいつなのかも、例え突然でも不思議じゃないさ。さあ、一つはわしが背負ってあげるよ。梯子を2往復するなんて出発する前に疲れてしまうよ」
　僕はセオと二人で梯子を降りた。外はもう深い霧に覆われている。
「人間なら出発にはとんでもない悪天候だけど、竜なら問題ないね」
「竜には遠くの物が見えるからね」
「おお、よく分かってる。でも気をつけたほうがいいよ。竜は音で遠くのものを見るんだ。だから竜の角が濡れてしまうと、竜は目隠しされたも同然。知っておいたほうがいいよ」
「音で物を・・・知らなかった。ありがとう」
僕が地面に降り立つと、霧の中には青い二つの光点が浮かび上がっていた。
「ああわしらは今、霧の幽霊ににらまれているな」
「ではその幽霊はその荷物ごと喰らってやろうか」
「カンザー、そんなことしたら僕の食べる食料がなくなっちゃうよ」
　そう言うとカンザーはため息を漏らした。目が慣れてきたのか、カンザーの影をなんとなく捉えることができるようになった。白い中に蒼い体が浮かび上がる。
　僕はカンザーに鞍をつけた。どういう設計なのかはカンザーが良く知っていて、よく見れば僕が乗っている間は振り落とされないように、腰から下をがっちり固定できるようになっているようだ。しかも必要に応じて自由にその固定幅を変えられる複雑な設計になっていた。
「私自身が動きやすく、なおかつ貴兄がどんなことがあっても落ち

ないようにした。これで今までのように貴兄が落ちないよう集中する必要はなくなる」
「カンザー、ごめん負担をかけてばかりで」
「いや、私の唯一の示陸士よ。これからは貴兄がいなければならない」
　僕はその言葉に少しうれしくなりながらも、背嚢を鞍の左右にある止め具にとめ、縄でさらに固定した。さらに僕の手が届きやすいところにあの模様の入った弓を止める。
「よし、これで準備は完了。矢はカンザーくんの護衛波長を用いて生成されるように書き直したよ。まぁ試してないから分からないけれど。後はあの扉まで飛んでいって、くぐり抜けるだけだよ」
「そういえば、行きも空を飛んでくればよかったのに・・・」
「結界の力でそうもいかないんだよ。帰りは大丈夫だよ。この霧の中道を間違えなければ」
　セオはお面を外し、にこにこ笑っている。
「場所は覚えている。霧の中でも物は見える」
僕は足から順番に鞍に体を固定した。すこしきついかもしれないと言うと、落ちるよりはましだとカンザーに怒られた。
「最後に、君たちは竜の双子の話は聞いた？」
　僕は首を横に振った。
「そうか、じゃあとりあえず聞いておいてくれよ。この子供しか知らない伝承を」

ある山に、一匹の邪悪な竜が住んでいた。竜は人を襲い、家畜を奪い、村々を壊した。
ある日、その山にとある騎士がやってきた。彼は男の赤ん坊を連れ、旅をしていた。
そして彼は何も知らずに山に入り、竜と対峙した。竜は命を賭けて戦い、その騎士も幼い子のために命を賭けて戦った。

その戦いは三日三晩続いた。
そして竜は死んだ。
騎士は赤ん坊を連れて竜のいた洞窟に入ったが、そこにあったのは一つの竜の卵だった。竜はこれを守っていたのだ。
騎士は負った傷で間もなく死んだ。

山に平和が訪れ、それから数年の時が流れた。
ある日、狩りをしていた農夫が、竜に乗った少年を見かけたという。
人間は知恵と技を以って竜を支え、竜は羽と牙を以って人間を支え、互いに元気に育っていたのだ。
竜の名をポルックス。人の名をカストル。
彼らの心は一つしかなく、体のみが二つある存在。

彼らは旅を続け、世界を恐怖に陥れていた闇を殺し、安定を作り出した。

竜は長い寿命を全うし、人間もその寿命を大きく上回って竜と同じ日に死んだ。

僕はその話と今の僕たちに、なんとなく似ている気がしてならなかった。邪悪な竜、やってきた騎士の死、そして竜に乗った少年。
「そして、また旅を始める。心を分かち合い、体のみが二つある存在として」
「うん・・・セオ、本当にありがとう。いつか、必ず戻ってくるよ」
「もちろん、あの方時計はわしのものだ。いつかは返してもらうさ」
「うん、もちろん」
それから、僕たちは静かになった。霧がさらに濃くなり、セオの顔がよく見えなくなる。
「さぁいくんだ。汝らの道に往くべき光があらんことを！」
カンザーは大きく羽を広げ、空に飛び立った。すでにセオも地面

も見えず、ただ風を切る音だけが、僕を包んだ。
「この霧は、あの魔法士のものだな。姿を隠すためのものであろう。だが、私には見えてるということだ」
「うん、村の人に出発する僕らが見つかったら、なんだか騒がしくしちゃうからね」
「――――そのとおりだ」
カンザーは僕が鞍に固定されているのを確認しながらも、今までにない曲がり方をしながら、出口の扉に向かった。

僕が門を抜けたとき、僕が驚いたのは、そこは昼間の森であったということだ。方時計を見ると、こちらの現在時刻は午前九時。もともと2と3の間にあった赤い針が、1より少し小さいところまで移動している。
「時間の倍率が変わったんだ。この表示が正しければ、僕らが村にいた間でも、こっちではまだ――――大体10時間しか経ってないよ」
「では、私たちのためだけの時刻は村の今の時刻にしておいたほうがいいな」
僕が慣れない鞍から足を外して降りるのは時間がかかるので、カンザーにもう一度門をくぐってもらい、結界の中の時間と、僕たちのためだけの時計の針を合わせた。午前四時四十分だ。
「始めにどこへ行くのかは決めているのか」
「うん、ここのちょうど風下に、この方時計の基準になるベルタウンがあるんだ。ベルタウンまでだったら、時間倍率が1になるように進めばいいし、本格的な旅の肩慣らしになるって、セオが言ってた」
「それがいいだろう。基準となる大きな町であれば、それだけ情報が集まりやすい。聖堂の情報が得られる可能性は十分にある」
「うん、じゃあいこうか」
その時、カンザーは静かになった。空を見上げ、じっと何かを見

つめている。そう、白い竜ラルヴァンダドと聞こえない会話をしていたときのように。
「貴兄よ。私に会いたい者がいるそうだ。先にそちらに行っても構わないか」
「うん、大丈夫だよ。でも、誰なんだい？」
「行ってみなければわからない」
カンザーはその場で浮き上がって、目的地の場所へ飛んだ。そこは、いつもカンザーが羽を休めている崖の上だった。そこには、あの緑の竜と、なんと人がいたのだ。緑の竜はカンザーのようにその人に襲いかかろうとする様子はない。カンザーは、緑の竜とその人と距離を開けて降り立った。僕は急いで鞍のはめ具をはずそうとしたけれど、カンザーはそのままでいいといった。
「青のカンザーよ。この子供が、用があるそうだ」
その人は、体格のよい若い騎士だった。銀の鎧を全身に纏い、兜のみを外している。腰には剣を下げ、それに片手を乗せている。もう一方は、強く握られていた。堂々と足を広げて立っている。
「何だ、少年よ。私に何用がある」
「お前は六年前、この森の麓にある村で、俺の兄と両親を食い殺したか」
カンザーは目を細めた。僕もすぐにこの人が何をしたいのかが分かった。僕は沸き起こるように緊張したけれど、何もできなかった。
「ああ、殺した。忘れてはいないぞ、あれは雨の日のことだったな」
「そうか。ならば、今ここで仇を討つ！」
怒涛の叫びでそう宣言しながら、剣をすばやく抜き構える。その目は、本当に憎しみを滲ませていた。
「怒りの鬼人よ。よく聞くがいい。今お前と戦ったところで、お前が勝つことはないだろう」
「なぜそんなことがいえる。俺はお前を殺すことのためだけに今まで剣を鍛えてきたのだ。竜も何頭も退治した。そうだ、お前なんかに負けることはない！」

青年はカンザーに向かって走りこんできた。カンザーはただその様子を眺めているだけで、じっと動かない。青年はカンザーの首の下に入り込むと、切っ先をあごの下につきつけた。しかし、そこで刃は止まった。

「なぜだ、なぜ何もしてこないんだ。このままお前は死ぬのだぞ。それでもいいのか」

「私は、死を畏れぬ者に会ったことがある。彼も私も同じなのだ。死ぬべきことに価値がある。そして汝には私を殺す権利がある。だがな、鬼人よ。汝が私に勝てぬということは、今そこで刃を留めた時点で分かっていることなのだろう？」

青年は不思議と剣を落とし、その場に崩れ落ちた。ここからは見えないが、青年は泣いているのだろうか。悶え苦しむような声が聞こえる。僕にはこの展開がよく分からなかった。

「だから青年よ。時が来たとき、私は汝と会おう。その時に、汝の復讐は果たされる」

「それは・・・・いつのことだ――――」

「それは分からん。もしかすれば、私は途中で命を落とすかもしれない。だが生きていれば、いつか必ず」

カンザーは、一瞬だけ緑の竜を見た。ラグースは青年に近づいてくる。

「さぁ、私たちはいこう。これでますます時が貴重なものとなった」

カンザーは何事もなかったかのように、崖を滑り降りた。大きく空を掴み、森の上を静かに滑っていく。緑の竜とその人は、すぐに見えなくなってしまった。

「僕、本当に怖かったよ・・・」

「だが死ぬことはなかった。貴兄と同じだ。死を恐れぬ者は、相手を畏れさせる」

カンザーは死のうとしていたわけではない。そのことを知っていたから、わざと動かなかったのだ。僕は笑った。

「僕が例題だったってこと？」

「そういうことだな」
でも、カンザーは今までもたくさんの人を殺しているんだ。僕は不意にそう思った時、カンザーはあの時、本当に自ら死のうと思っていなかったのか、確信が揺らいだ。
そうして僕らは、静かに深い森を飛び立った。

2．青い竜と黒髪の少年 二下（後書き）

お疲れ様でした。三部はさらにジャンルが冒険へとシフトしています。

死の谷（前書き）

ここからはゆっくり投下していきます。一ページのボリュームが激しく多すぎた・・・。

3．旅をする竜たち

死の谷

3．旅をする竜たち

死の谷

大いなる空。風が舞い、雲が流れ、地を照らす。その青い空の上をその色に引けをとらない蒼の竜が、大いなる空を舞っていた。空より濃いというわけではない。誰もが息を呑む蒼なのだ。逞しい体に、凶悪な爪や牙、ぴんと張った流線形の羽。竜の象徴の角は片方が半分折れていたが、体中にできている傷の痕とともに、竜の凶暴さを示していた。そんな竜の背には、艶のある青の鱗とは対照的な、赤い鎧を身に着けた僕が、竜にしがみついていた。篭手は左腕にしかなく、右腕は肩から先は人間の肌を露出している。非常に複雑な表示のされた円盤状の首飾り、方時計を首に下げていた。竜のための特殊な鞍が腰から下を固定しているけれど、それでも今にも振り落とされそうで怖かった。

「カンザー――――息が詰まるよ」

僕は息も切れ切れに竜に訴えた。もちろん普通ならば風の音で何も聞こえないはずなのだが、竜はきちんと反応して、その背に乗る小さな存在を片目で確認していた。

「人間であるフィードにはこの風は辛いのかもしれない。だがこれより進度を落とすことはできない。平行機構が維持できなくなる」

「うん、分かっているよ。それに、街に着くのも遅れてしまうからね」

「しかし、一度休憩したほうがいいだろう。方角と距離も割り出さなければ」

「ごめん僕、迷惑かけてばかりだ」

そんなことはない、と喉を鳴らしながら、青い竜は高い空から高

度を下げ始めた。もう少しで雲に手が届きそうなほどの高さ。僕はもちろん今まで体験したことのない世界を目にしていた。長い間暮らしていた森はすでに眼下になく、代わりにあるのは赤い岩や土。荒れた大地が見渡す限りどこまでも広がっていた。見ているだけでのどが渇いてくる。まるでそこは、生き物をすべて拒んでいる世界に感じた。

カンザーは谷状になっている岩の上へと滑り降りてゆき、静かに着陸した。乾いた砂が舞い上がり、僕はたまらず腕で目を覆った

カンザーが羽をたたむのを確認してから、鞍のベルトをはずし岩の上に降り立った。辺りを見回しても、草一本生えていない。空から見た死滅感は、地上に降りても変わりなかった。

「僕の住んでいた場所もあんまり植物は生えなかったけれど、こんなに何もないなんてなんか寂しいな」

「岩と死の砂が、この地から命を遠ざけている。この地は見捨てられているのだ」

僕は青の竜、カンザーから少し離れ、鎧の手で赤い砂を掬い上げて、ぱらぱらと地面に滑らせた。砂は風に乗って流れていく。その様子を見ながら、もう一方の手で方時計の針と、砂の流れを見比べた。

「うん、地図の通りだ。このまま正しく飛べば、後三日で街に着くはずだよ」

「そうか、それはよかった。太陽さえも絶対ではない旅。私には貴兄しか指針がない」

「僕だってまだ自信はないよ。本当に目的地に向かっているのか、心配でならない」

「そうだな。まるで手探りの旅だ」

そこで突然、カンザーは目線をあげた。警戒のように、少しだけ口をあけ、低い声で威嚇をする。僕はその線に沿って振り返った。そこにはなんと、誰かが下から登ってきていたのだ。人どころか草木一本いない世界に突然現れたその人に、僕らは身を強張らせた。

「私の視界の死角から来たか」

カンザーは首を下げて臨戦態勢をとる。謎の人のすぐ近くにいた僕は、その人が岩の上に登りきるのをただ見ているしかなかった。
その人はとても豪華な服を着た中年のおじさんだった。だが服はぼろぼろな上に、ここまで上ってくる間に汚れたらしく、その華麗さは台無しのようだった。その人は登りきって初めて人がいることに気づいたようで、険しい顔を少しだけ緩めたが、後ろにいる青の竜を見て体を強張らせた。そして、引きつった声でこう叫んだのである。
「ひ、人殺しの竜が、なぜこんなところに！俺を追いかけてきたのか。また人を騙して安心しきった人間を残忍に殺す気だな」
僕には、突然のその言葉が理解できなかった。
「ザンニン・・・残忍って一体――――」
男はなぜか僕の反応にとても驚いているようだったが、すぐに鼻を鳴らしてカンザーを強く指差す。男の口の端は異様に釣りあがっていた。
「あの青い竜さ。君ももう少しで騙されて食い殺されるところだったな。奴は言葉巧みに人間を信用させて、そしてその人間を裏切って絶望に染まった体を食う悪魔だ。俺のいた町はそれで何人も殺された。お前も危ない所だったんだ」
僕は一瞬だけ青い竜に振り返るが、カンザーは何も反論することもなく、じっとその人を睨んでいた。その様子に、なぜか僕は、心の奥に何か不安に近い感情を覚えた。
「それに奴はいろいろな理由をつけては人を殺す。“竜の契約”っていうでっちあげをした上でな。俺は知っているぞ。こいつは、今はお前を襲いはしないが、ある日突然目が赤く染まって何もかもを食い殺す奴なんだ。どうやら、その様子ではもう心当たりがあるようだな」
では、竜の約束も、今までの様子も、全部嘘だったということなのか。竜の約束をしたことは僕以外、知らないはずなのに。フィードが訴えるようにカンザーに目を向けると、カンザーはゆっくりと

口を開いた。
「貴兄よ。こいつは生きてはならないものだ」
「ほらきたぞ！そう言って真実を知る俺を殺すつもりだろう。いいさ、殺せよ。お前の正体がそれで暴けるというものだ」
中年の男はカンザーの前にゆっくりと歩み出てきた。口ではそう言ってはいるが、対照的に体中は震えている。僕はその光景に耐えられなかった。
「カンザー、きみはそんなことしないよね」
「こいつは死ぬべきなのだ、貴兄よ。人としては生きてはいない。私たちを陥れるつもりなのだ」
青の竜は前脚を大きく振り上げると、その中年の男に逞しい腕を、白い爪を振り下ろした。僕は思わず目を閉じた。
鈍い、肉が裂ける音が辺りを一瞬だけ濃くした。そう、ただそれだけで、元のように風が砂を運んでゆく音のみがその世界を支配した。いや、一瞬何かが地面にぶつかる音が聞こえた。僕はゆっくりと目を開けた。そこには片足を真っ赤に染めた竜と、赤い血の広がる岩の上に、うつぶせに倒れた男の死体があるだけだった。それを目にした瞬間、僕の体中から力が抜け、その場に座り込んでしまった。
「・・・・カンザー、どうして――――」
「これでいいのだ貴兄よ。さぁ、旅を急ごう。ここは悪い風が流れている」
でも僕は、その場から動けなかった。言葉巧みに人間を信用させて、そしてその人間を裏切って絶望に染まった体を食う悪魔。そう、僕の頭の中で、その言葉が何度も木霊して、その意味を捉えようと必死になっている。竜の制約。あれも全部嘘だったのか？？
「悪いものを見てしまったからな。体は大丈夫か」
青い竜が一歩、僕に近づく。僕の体は無意識にびくっとなって、カンザーから滑るように離れた。竜の動きが止まる。
「カンザー・・・君は人を殺して何とも思わないのかい。君は人の

命を奪ったんだよ」
　だけど、僕はその答えを知っていた。この竜は今までに何人もの人を殺してきた。今だってなんのためらいもなく人を殺した。そう、彼は人ではなく竜。何とも思わなかったとしても、もちろん不思議ではないのだ。まるで人間が意識なく食べ物を食べるように。やっぱりカンザーはただの獣でしかないのだろうか。僕はどうしたらいいのか分からなかった。
「君は、僕を騙してきたのかい？」
「貴兄よ――――」
　カンザーがゆっくりとフィードに近づいてくる。爪についた血が一歩一歩、赤い足跡を残している。僕はここで裏切られながら死ぬのか。そう思うと、僕は耐えられない恐ろしさと悲しみで、いつの間にか竜を見上げながら涙を流していた。
「あなた！」
　突如、男の死体がある場所で声が聞こえた。二人が振り向くと、そこには真っ白な美しいワンピースを着た、若い女の人が座り込んでいた。長い髪が乾いた大地の風になびいている。真っ赤な身体を必死にゆすって声をかけているが、当然のように男の反応はない。僕もカンザーも、その様子をじっと見つめていた。
　やがてその行動が無駄だと分かったのか、その人は突然顔を上げてカンザーを睨みつけた。その顔は美しい女性の顔には決して似合わない、恐ろしい憎悪を滲ませていて、僕は息を呑んだ。
「人殺しの竜め。よくも私の夫を！」
　そして、女の人はその顔で僕を睨みつけた。見ているだけでも恐ろしかったその人相の目が僕に向けられ、金縛りのように体が動かなくなる。
「あなたもよ。なぜ夫を止めてくれなかったの。なぜ一緒に逃げてくれなかったの。あなただって夫を殺したのよ」
　その言葉は心の奥底に深く突き刺さった。僕が人を殺した。人形のようにその言葉を繰り返し、それでも分からなくて、ふっと目の

前が真っ白になる。頭が痛い。嫌だ、僕は人を殺してなんていない。
いや殺した。
直接でなくとも、まるであの竜のように人を殺したのも同じ。
僕はいつか、頭を抱えて叫んでいた。引きつった声に喉が痛くなるが、全く気にしてはいない。叫びが谷を木霊し、またその叫びが耳に入って新たなる叫びを作り出す、無限の木霊。
「貴兄よ、正気に戻るんだ」
「嫌だ。人殺しのことばなんて聞きたくない！」
そう、それは僕のことでもある。僕も人殺しだ。ヒトゴロシダ。今この瞬間にも自分の心を崩したい。どうなっているのか分からない。悪魔の竜、死んだ人間、人殺しの自分、自分を恨む女の人――――
あれ、何かおかしい。フィードの頭で繰り返される光景の数々。思い出したくない瞬間。だが、頭の端が何か違和感があると訴えている。それは何だ。フィードは必死に頭の中を整理する。そう、それはすぐに導き出された。冷静に考えれば、これはおかしいのだと。
僕の叫びが、糸が切れたように収まった。頭がすっきりと晴れてくる。僕は目を腕でこすり、涙を拭う。ゆっくりと立ち上がったが、足に力が入らないということはなかった。
カンザーが血の付いていない足を前に出す。僕は何もいわず、ゆっくりと青い竜によじ登った。僕が見たときには、女の人は半分驚いたような、そして半分はさらに濃くなった憎悪を表していた。
「人殺し同士共に行くということね。そして私を殺して、そして裏切って死ねばいいわ」
だが、カンザーがその人に近づくごとにその声は小さくなり、恐怖に顔が引き攣りはじめた。僕はその光景を、無表情で見つめていた。
カンザーは大きく息を吸い、業火を女の人に吹きかけた。一瞬だけ叫ぶ声が聞こえたけれど、轟々とした火炎放射の音でかき消される。死んだ男と共に、女の人は炎の中に消えた。

僕は詰めていた息をゆっくりと吐いた。そう、きっとこれでいいんだ。僕は静かにカンザーの背に体をつけた。
「行こうカンザー」
カンザーは無言で大きく羽を広げ、その場から飛びたった。崖の上で燃える狼煙は、やがて小さくなって見えなくなった。僕はそれが見えなくなるまで、いつまでも見つめ続けた。
「なぜ、私の背に乗ったのだ」
カンザーには似合わないほどに恐る恐る聞いてきたので、少しだけおかしかった。
「男の人は登ってくるまでにずいぶんと服が汚れていたけれど、女の人は全く汚れていなかった。まるで幽霊のようだったんだ。それに、そもそもあんなところまでわざわざ登ってくる人なんて、いるはずもないしね。だから、普通じゃなかったんだ」
「貴兄は頭がいいのだな。すぐに見分けることができるとは。だが、私は少し心配した」
「うん。ごめんねカンザー。僕、君の事を疑っていたよ。だってあの時、君は何も言わなかったから」
「すまなかった。私にも、あれが人間なのか、幻なのかは確信がなかったのだ」
「幻・・・」
旅は厳しいということを、フィードは心の中でもう一度復唱した。
「僕、これからはどんなことがあっても君の事を信じるから。旅の友を信じなくて、ほかに何も信じることのできない旅にいるんだから」
「私のことを信じてくれるのか。それは光栄だ」
「光栄じゃなくて、そういうのはうれしいって言うんだよ」
「そうか――――うれしいというのだな」
僕の硬かった体はいつの間にかほぐれ、笑ってカンザーにそう答えた。
カンザーの前脚についていた血は、いつの間にか死の砂となって、

さらさらと流れていった。

死の谷（後書き）

お疲れ様でした。

時の街ー1（前書き）

ここから本格的に冒険編（？）に入ります。各部ジャンルが全く異なるので読みにくいと思いますがご了承ください；

時の街―1

水。

僕は、黒い水面に足を浸けて立っている。何も身に纏っていなかったけれど、寒くもなければ暑くもない。風が吹いてもいない。右手には淡く青色に光る、見たこともない剣を握っていて、切先は水面に触れていた。その点から広がる円はどこまでも伸び広がり、無色の空との接線まで、いつまでも進んでいるようだった。水平線の上に、様々な高さの立方体のものがたくさん突き出て密集しているのが見える。いくつかのものは途中で折れたり、傾いたり、崩れたりしているのが、空に映る影のように存在していた。剣の青以外、僕を含めて全てが無色だった。

「あなたは私と夫を殺したの」

僕がびくっとして声のしたほうへと振り向くと、そこにはあのときの夫婦が、僕を見つめていた。二人とも、不気味に笑っている。その姿はまるで影のようだった。僕は言いようも無い恐怖が体中を駆け巡る。本来ある心の壁や、心の奥底で目をそむけるといった行為が一切できない。僕の心臓は高鳴り、息は荒くなる。体中が震えて、水面を細かく揺らした。

「そう、俺たちを殺したんだ。お前は人殺しなんだ」

違う、お前らは――――僕の言葉は発せられなかった。幾ら喋ろうとしても、空気が肺から喉を通って出てゆくだけ。

「言い訳をここで発することはできないわよ。ここは真実しか存在しないから」

そう言って、全く表情を変えないまま、二人は近づいてきた。波も無く、音も無く、僕という物に近づいてくる。

僕は叫びながら逃げ出そうとしたけれど、実際は声も出なければ、目を二人に合わせたまま、ゆっくりと一歩一歩後退するのが限界だった。まるで体が僕のもので無いかのように、まるで空気が硬いも

のでできているかのように。
そして彼らは、僕を飲み込んだ。

僕は、何かに噛み付かれたかのように、叫び声をあげながら飛び起きた。あまり暑くは無いのに、体中は汗びっしょりになっていた。息も荒い。
「――――悪い夢を見ていたようだな」
青い瞳が僕を見下ろす。その瞳を見て、僕はやっと安心できた。
「うん・・・あの二人の夢を見たよ・・・。怖かった――――」
カンザーは、ゆっくり息を吸って、深くため息をついた。心地よい暖かい息が僕に降りかかる。
「あんなものに怯える必要は無い。それに、もしあれが人であったならば、罪があるのは私だ。貴兄ではない」
「でも、僕は――――」
「貴兄にも罪があるならば、それでも私と貴兄は同じだ。私とならば、怖くはあるまい」
そう言って、カンザーは僕の額に口の先をつけた。不思議だ。恐怖がまるで吸い取られていくようだ。
「貴兄はまた一つ、生きる意味を知った。ただそれだけだ」
「うん。そうだね・・・」
僕は、カンザーの角のはるか後ろに広がる空を見つめた。たくさんの星星が、きらきらと輝いている。
「明日、ベルタウンに着くけれど、君は街には近づけないね。テフヌトの村とは違って、竜を見たらきっとみんな怖がるだろうから・・・」
「しかし、貴兄が無事かどうか私は心配だ。私が見ることのできる距離にも限界がある」
カンザーは息を荒くして言った。目の色も変わる。
「ありがとうカンザー、心配してくれて。でも大丈夫さ。そんなに

危険がある街じゃないだろうし――――。もし心配なら、毎晩会いに行くよ。無理なら笛で合図する。それなら聞こえるでしょ？」
「ああ・・・」
実に心配そうな竜の姿を見て、僕はいつの間にかニヤニヤと笑っていた。こんな屈強な竜が僕のことを心配でしょうがなくて、弱気になるなんておかしすぎる。いや、彼もまた変わってきているのかもしれない。そう不意に思った。
「僕は明日が楽しみだよ。どんな街なんだろうか。テフヌトみたいにまた驚かされるような場所なんだろうかってね」
「時の礎となる地。また何かあるかもしれんな」
僕は心躍らせながら、カンザーの心音を子守唄にして、今度は深く眠りにつくことができた。

時の街

何度目のあくびだろうか。
どこまでも青い草原と、空の境界を見ながら、そう思った。
空はどこまでも青い。そして平原もどこまでも青い。ただそれだけで、人が来るなんてことは絶対にない！今日は商隊が来るという予定も無ければ、騎士団が入ってくるという情報も全く無い。だからこんな日に外門の監視を任された自分は不幸だ。
着ている鎧のはめ具を点検命令と同じ順序で確認し、それから持っている槍の刃先を確認する。曇り一つない、歪みも全く無い刃。その下に緑に輝く竜玉も、時折自分に暇だと告げる。
「なんでよりにもよって実施演習の日に門番なんだ？これじゃあ腕を磨くどころかなまっちまうぜ。お前もそう思うだろ？」

緑の玉は一瞬きらりと輝いて、まるで気にしていないような感じだ。それを見てますますこの暇な時間をどうしようかと考えた。
不意に振り返れば、そこには目にも余る巨大な鉄の門が存在していた。ベルタウン唯一の出入り口。だが街を出入りする人などそうそういない。外には騎士でしか倒せない幻獣や、よくわからない植物とかがうようよしているからだ。よってこの扉が開くのは門番を交代するときだけだ。
そう、そのはずだった。
はるか向こうに何か赤いものが見える。あきらかに普段とは違う何か。いままでの緩んでいた気持ちは一瞬で消し飛び、緊張の糸がぴんと張る。一体何だろうか。幻獣？だとしたら大事だ。時計塔の対幻効果を無視してくるやつがいるということか。
だんだんとそれが近づいてくる。そのうちに、それが人間であることが分かる。着ている服が赤いのか。いや、あれは鎧――――では騎士？いやいや一人で旅をするような馬鹿はいないだろう・・。第一歩いて来るなんて異常だ。頭の中でいろいろな憶測がぐるぐる回りだし、結局結論が分からないまま、その者は顔がはっきりと分かるくらいまでやってきた。なんと子供だ！それも一人。背中には大きな背嚢と、弓を背負っているのがわかる。普通ではない。槍を握る篭手に力が入る。
その少年は、自分がいることに気づいたのか、足早に近づいてきて、堀がある石橋を渡ってきた。
「何者だ！」
軽く槍を少年に向け、威嚇する。その声に少年は足を止めた。
「すみません。驚かせてしまって」
「一人か？どこから来た？」
「えっと・・・ずっと北の森にある村から・・・」
北にある森といえば、トルネスの森・・・。たしかにあの森のふもとには、ネイブラル村が存在するが・・・ここまではとてつもない距離な上、途中には幻獣の住む荒野も存在する。騎士でもないた

だの子供がこんなところまで来れるはずがない。もしかしたら、人の姿をした幻獣・・・だが着ているのは騎士の鎧・・・。
「お前、騎士か？たしかにこの街にもお前くらいの問題騎士が一人いるが、騎士なら竜玉を持つ装備があるはずだか？」
威圧的に言い過ぎたのか、少年は下を向いてしまった。
「すみません・・・騎士ではないですが、この鎧は特別にもらったもので・・・」
とりあえず、幻獣かどうかは確かめてみるしかあるまい。
「少年。この槍の刃先に触れてみよ」
「刃先・・・ですか？」
「そうだ。別にお前を刺すわけじゃない。お前が幻獣でなければ、斬幻剣に触れても何も起きないはずだ。それを確かめる」
「はい、分かりました」
少年は、恐る恐る槍の刃先に触れた。すると突如、緑の竜玉が強く輝きだした。ものすごい光に直視することができず、左手で目を覆う。やはり幻獣だったのか！そう思った矢先、なんと竜玉から声が聞こえてきた。
（我ら同志よ。汝に会えたことを光栄に思う。我らは汝を歓迎しよう）
そうして、竜玉の光は消えた。
なんということだ。こんなことは一度として起こった事がない。普段も、竜玉の意思を知ることはできても声まで聞くことは無かった。声を聞けるのは隊長くらいだ。自分は一度として聞いたことは無かった。
「・・・今の声は――――」
「聞こえたのか！自分の槍の声が！！」
「はい、僕を歓迎すると・・・」
他人の斬幻剣の声を聞くことができる者がいるとは・・・。
「――――自分の槍がお前を歓迎すると言った。ならば一心同体である自分もお前を歓迎しよう。門を通るといい」

槍で石の地面をトンと突く。すると、巨大な鉄の扉がその大きさにも関わらず静かに、ゆっくりと少しだけ開いていった。
「ありがとうございます」
少年は微笑みながらお辞儀をし、門の中へ足を進める。そう、なんだかその少年からは、不思議な気配がしてならなかった。
「少年よ。名は？」
「フィードといいます」
「自分はフェン。フェン・サー＝バルシュタットだ」
「はい、ありがとうございます、フェンさん」
そういうと、少年は門の中へ入っていった。門が再び閉まるのを見ながら、自分は不思議な高揚感に襲われていた。
「――――もしかしたら自分は、今日は一番についてるのかもしれないな・・」
その言葉に、竜玉は一瞬瞬いた。

驚いたのは、人の多さだった。
石ともなんとも言えない、見たことも無い材料でできた建物の間をたくさんの人が歩いている。右を見れば肉の叩き売り、左を見れば果物をどれにしようか悩んでいる主婦、初めて見る四本足の毛の生えた動物と戯れる子供、久しぶりの人の中と、初めての市場に、僕は飲み込まれていた。
巨大な城壁に囲まれた街、ベルタウン。その門の大きさにまず驚き、この市場を歩いている間も驚きの連続だ。時には人が多すぎて進むのが大変な時さえある。何度も商人に声をかけられて、そのたびに足を止めては果物についてなどの話を聞いて、丁重に断る。
やがて、久々の人との対話に疲れ始めたころ、その市場の路地を抜け、大きく開けた場所に出た。その場所にはなんと一周回るのに１５分はかかるのではないかと思えるほどの巨大で深い丸い穴が開いていたのだ。柵がぐるりとその周りを取り囲み、その外周は石畳

の広場になって、そこで人々が店を開いたりくつろいだりしていた。
僕は恐る恐るその柵に近づき、下を覗いて見た。ずいぶんと深い穴だ。円柱状の穴の側面に、何かがたくさんぶら下がっている。よく見れば、それは教会などに取り付けられている鐘だった。数え切れないほどの鐘が隙間なく無秩序に取り付けられていたのだ。微妙に大きさも形も色も違うが、すべてが磨き上げられたかのようにきらきらと風に揺らめいて輝いている。その穴の底には、丸々穴の円を時計の淵にしたような巨大な白い時計があり、下に降りられるらしく、人が一分ごとに動く時計の針をベンチ代わりにして座っているのが見える。
「すごいや・・・」
まさに別の世界に来た感じだ。いや、旅というものは、こういう見たことも無い世界を飛び歩くということなんだと、改めて痛感した。
この広場がどうやら街の中心らしく、どの道もここから放射状に広がっているようだ。僕はしばらくその光景に感動しながら、街の雰囲気を楽しんでいた。
「待て小僧!!騎士だからって物を盗むとは唯ではおかんぞ!!」
その穏やかな雰囲気をぶち壊したのは、後ろから聞こえてきたその一声だった。一瞬僕のことかと体を硬くするが、その声はずいぶん遠くからであった。
振り返ると、路地のほうから人ごみを掻き分けて広場へ向かってくる人が見える。僕と同じくらいの年だろうか。白の半袖服で、腰に黒のベルトを巻いている。腰にはこの街では珍しく剣を下げているようだった。手には赤い果物が一つ。走っている割に顔は余裕そうで、走りながらそれをかじって食べている。その後ろから、青いエプロン姿の男の人が、ものすごい相貌で追いかけてきていた。一歩足をつけるごとに地震でも起こるかのようだ。
「いつも隊長には・・・・・ただであげてるじゃんよ?!」
少年は陽気そうなよく通る声で後ろを追いかける相手に言う。

「バルさんだからいいのだ！今日の実施演習さえサボっている鈍らに食わすものは無いわ！！」
「別にサボったわけじゃないって！ただちょっと調べ物してたら――――」
「小賢しい！！」
剣を持った少年は広場に出ると角を直角に曲がった。そして同時に、少年は左手を剣の柄に触れた。突如剣のついた赤い玉が、瞬き光りだした。その途端、諦めたかのように少年は走るのを止め、歩き始める。当然間はすぐに詰まり、エプロン鬼はすぐにその角を曲がった。だがそこでなんと、今度は商人のほうが足を止めた。すぐ目の前に少年がいるのにだ。
「くそう。また逃がしてしまった。逃げ足だけは一流だな・・・」
まるでそこにいないかのような反応だった。目も少年を捉えているようには見えない。それどころか、捕まえるのを手伝おうとした人や、周りの人々も、全く少年の存在を無視している。一方少年は勝ち誇った表情でりんごをかじり、辺りを見回しそして、僕と目が合った。見てはいけないものを見てしまった、と直感で思った。
りんごを持つ手が止まった。にこやかな顔が一瞬で無表情になる。そしてゆっくりと、僕に近づいてきた。左手は柄に触れたままだ。光り輝く玉は色こそ違うが、門番の人の持っていた槍についていたものと同じようだった。
少年は僕の目の前までくると、僕をまじまじと見た。黒の髪の内側に光る瞳が僕をじっと見返す。
「な、なんですか？」
恐ろしげに答えると、少年は突然笑顔になって僕の左手をつかむと、無言で走り出した。
「うわなにを――――」
「静かに・・・声を出さないで」
実に静かに小声で言われたので、僕は不意に静かになってしまい、ただ引っ張られるまま別の路地に引き込まれた。

そこはさきほどの大きな路地ではなく、家々の間の小さな隙間のようなところで、右に左にと建物の間を進んでいく。まるで迷路に入り込んだかのようだったけれど、引っ張る少年は迷いも無く進んでいく。何度か人とすれ違ったが、やはり全く関心が無いかのようだった、それも僕も含めて。

やがて郊外の壁際の噴水のところまでくるとやっと足を止め僕から手を離し、少年は噴水の淵に立つと、右手で水を一すくいして飲んだ。そして、僕のほうを向いた。

「君、俺のこと見えてるよね？」

かなり荒い息をしながらも、じっと見据えている。なんなんだろうかこの人は。

「はい・・・。それでなんで――――」

「いやはや、やられたよ。本当にすごいな」

少年は左手を柄から離した。すると、玉の輝きは収まっていく。

「ごめんごめん、驚かしたね。まぁ座るといいよ」

そう言って淵に座り、横を指差す。僕はその場所に座った。

「俺の名前はジーン。ジーン・サー＝バルシュタット。ジンって呼べばいいよ」

「サー＝バルシュタット・・・。フェンさんと同じ・・・」

「あー・・・そうだよ。同じ騎士団だからね一応。奴と知り合い？隊長を知らないって事はずいぶん辺境の土地の生まれだね？」

「はい、北にある森――――」

「あーむずむずする！敬語とかさん付けは一切合財やめてくれ。隊の中だけでたくさんだよ。普通に話してくれないか？」

ぶっきらぼうにそう言うと、ジンは水を両手ですくい、もう一度飲んだ。飲むといいよと進められて、僕も一すくい。

「それで、名前は？」

「あ、僕の名前はフィード。探し物があって旅をしているんだ」

「旅って、一人でかい？」

「もう一人いるけれど今は別行動で・・・あの、それで、ジンさん・

・・じゃなくてジンは、なぜ僕を？」
「ああ、ここへ連れてきたか？それはフィードが俺のことを見ていたからさ」
「見ていたから？」
そう言うと、ジンは腰の剣を机の上に出した。
「これは？」
「これは騎士だけが持つことのできる斬幻剣。って知らないのか・・・・まぁいいや、俺はこれで姿を隠す魔法を使ったのさ」
「え、魔法！？」
「まぁ、普通は魔法なんて使えるものではないから驚くわな。だけど俺の斬幻剣はすこし特別だからね。ちょっと見ててごらん」
ジンは右手で水をすくって、左手を剣に据えた。
「原始の揺篭よ、その姿を星の欠片とせよ」
一瞬だけ、また剣の玉が光る。それとともに、水が光り輝いた。すぐに右手を閉じるが、光った水がこぼれて落ちるようなことはなかった。
僕が不思議そうに見ているのに少しだけニヤッとし、ゆっくりと手を開く。なんとそこには水の代わりに、白や青といった星のような形をした粒があった。
「食べてみてごらんよ」
ジンは早速一つ取って食べ始めた。僕も恐る恐る手に取り食べてみる。
――――甘い。
果実とかそういった甘さとは格が違う初めて食べるものすごい甘さだった。まるで蜜で作った飴のよう。頬が解けて落ちてしまいそうだ。
「すごいおいしい。こんなもの食べたことが無いよ！」
「これは金平糖って言うんだ。昔街に来た魔法使いが使って街で配ってくれた。その呪文を覚えてたのさ」
「すごいや！ほかにも魔法とか使えるの？」

「残念ながら。俺は魔法使い紛いのことができるだけで、いわばモグリなんだ。それで、なんで君が僕の魔法を破ったのかってことなんだけど。破ることができるのは腕利きの魔法使いか――――」
「私だけだ」
その声を聞いて、僕もジンも横の路地を振り向き、そして驚いた。そこには、白の鎧を纏った大男が左腕を壁に持たれ掛けさせながら僕らをにらみつけていたからだ。
「バ、バルシュタット隊長・・・演習はまだ途中では・・・」
「隊の中で、街で盗みを働いた者がいると聞いてな。私だけ演習を抜けてきたのだ」
「いえそれは・・・」
低いゆっくりとした、それでいて威圧感のある声。短髪で額から耳あたりに大きな傷がある。鎧も門番の人のものよりもずっと繊細に作られていて、腰にはジンの倍近くの大きさの剣が据えられていた。腕を組むと、鎧特有の擦れる音が辺りに響く。
「まぁいい。まずは武器庫の掃除からやってもらいたいものだな」
「はい！いますぐにやって参ります」
そう言うと、ジンは剣をすぐさま取って、大男の横をすり抜けて出て行った。行く間際、すまないまた後で、と言ったのが分かった。
そして、水の音と僕と巨人の騎士が残った。
「――――さて、君が今日街に入った不思議な少年か」
驚いた。やっぱり一人で来たことは不審に思われたのだろうか。僕は緊張しながらもその人を見ていた。
「そんなに驚くことは無い。外から一人で来る者などそういないからな。実は私が演習から抜けてきたのは、不思議な少年を門に通したと報告を受けたからだ。まぁ、見つけるのはそう難しくなかったがね」
そこで初めてその人は、ここに来て初めて少しだけ微笑んだ。額の傷が引きつって皺の影を作っている。
「初めまして少年よ。私の名はバルシュタット＝ナイト。及ばずな

がら、時の街ベルタウンの常駐騎士団の指揮をしている者だ」
　僕はその儀式的な挨拶に一瞬で呑まれ、慌てて立ち上がった。
「えっと・・・僕の名前はフィードといいます。ある場所を探して旅をしているのですが・・・」
「ほう、君のような子供が地の旅とは、最近の外の世界はずいぶん平和だな・・・まぁいい。君のおかげかどうかは分からないが、私の剣が最近落ち着かない様子でね――――そう、まるで竜との決戦の直前のように・・・」
　僕は喉がからからになるような、それでいて息がしにくいような、とにかくものすごい圧迫感が僕を押し付ける。もしかしたら、カンザーのことを知ったらこの人はカンザーを殺しにいくかもしれない。それだけで、今度は唾を飲み込んだ。
「――――いや、失礼した。こんなところで立ち話とは難であろう。続きは兵士宿舎で話すとしようか。ジーンも今はそこにいるしな」
踵と床からなる乾いた音を鳴らしながら、バルシュタットさんはゆっくりと僕に近づいてきた
。僕はあと少しでも何かあったら叫び声を上げそうな感じになっていたけれど、なんとその鉄の手は、僕の背嚢にかけられた。
「一人でこれは重かったであろう？宿舎までは私が持とう」
「あ・・・ぇ・・・は、はい・・・・」
　状況も予想も反したバルシュタットさんの言葉に、僕は一瞬頭が真っ白になってただ肯定することしかできなかった。
　白い騎士は僕から荷物を取ると、軽々と持った。懸命に持ってきたものがまるで物をつまみあげるかのようだ。
「宿舎はそれほど悪いところではない。男ばかりでむさ苦しいがな・・・」
　そう言って身を翻したその時、一瞬だけ騎士の腰にある剣の玉が瞬いた。
（我らの同志よ。我も汝に会えて光栄だ）
「・・・今の声が聞こえたか？」

「あ、はい・・・我らの同志よ。我も汝に会えて光栄だ、と」
僕の言葉に、バルシュタットさんの顔が一層にらみ顔になる。
「持ち主以外の竜玉の意志を聞くことなど、誰にも不可能なはず。話は本当だったのか・・・」
これも竜の血の力なのだろうか・・・。僕はやはり少し変わったような、変わってしまったような、妙な感覚になった。もう声を聞いても口には出さないほうがいいかもしれない。
「あの・・・すみません」
「いやいや。別に謝ることではない。ただ興味深いと思っただけだ」
僕は小さくお礼を言うと、宿舎に向かいだしたその大きな背中を追いだした。

時の街－1（後書き）

お疲れ様でした。

時の街－2（前書き）

・彼が久々に感じる人の中での平和。それだけならよかったのだが・・

時の街ー2

兵士宿舎は、ほかの家々のように見たことが無い材質ではなく、木と麻など、僕の常識の範囲内でできたものだった。建物自体は平屋だがやはり普通の家よりも大きい。木製の入り口に来るまでに、建物が見えてからずいぶんかかった。

「騎士の中には街を転々とするものもいてね。できる限りどこの駐留でも同じ環境にしたいのだ。それに、どうもあのレンガ造りは好きでは無くてな」

僕が他の建物と交互に見比べているのを見て、そう教えてくれた。

中は広さの割に静かだった。人がいる気配もなく、部屋に着くまでの間も誰にも会わなかった。

「さぁ、ここだ。ここなら、話をじっくり聞ける」

入った部屋は見たところ自室兼作戦室のようで、一般的な家具とベッドのほかに、木製の簡単な机と椅子、それからなにやら赤や青のマークや矢印がついた地図の広げられた広めの机がおかれていた。

僕は勧められるままに椅子に座り、バルシュタットさんは僕と机を挟んで向かい側の、僕の座ったものと変わりの無い椅子に座った。なんか尋問みたいだ。

「尋問みたいだ、という顔をしてるな。まぁそう固くなることは無い。固いのはこの部屋の空気で十分だ」

「はい・・・」

「とりあえず、君について話してもらえるかな？もちろん話したくないことは話さなくてもかまわないよ」

バルシュタットさんは肘を机に付き、神妙に指を組む。

「えっと、僕はある場所を探して旅をしているんです」

「さっきも言っていたな。どこを探しているんだ？」

「えっと・・・真っ白でとてつもなく大きい聖堂なのですが、それほど詳しくは・・・」

「聖堂・・・。この街にも確かに教会は存在するが、真っ白ではないしな・・・白い聖堂といえば鳥の城ウィンドフォウルくらいだが・・・」
「それ！どこにあるんですか！！」
僕は希望と喜びで、立ち上がって聞いた。
「待て、鳥の城はここから人の足で行けるような距離ではない。騎士の馬を飛ばしても二週間はかかる。今までは無事に来れたようだが、その先は一人では無謀すぎる」
「そうですか・・・」
僕はため息をついて座った。竜の羽ならばもっと早いかもしれない。けれど、それでもこれからますます危険なことが起こり得るということか・・・。
「話の途中で切ってしまったな。とりあえず全て話してもらおうか。質問はその後にする」
僕は、とりあえず森にあった村から来たということにした。あの谷からここまでの道のりについても話した。道については、僕が方時計を見せたら納得してくれた。
「よくこんな希少のものを持っているな。これはベルタウンで作られているものだから、我々はあまり不自由していないが、土地によっては３０倍の重さの金で取引される。注意するんだな」
「はい、気をつけます」
「赤の谷では、何者にも襲われなかったか？」
「いえ・・・人には会いましたが・・・」
「ふむ・・・負の投影砂ももろともしないか・・・。君は一体何者なのだね？これではまるで竜の使いだ」
「え・・・」
僕は再びその言葉を聞くことがあるとは思っても見なかったから内心すごく驚いたけれど、なんとか押さえ込んだ。
「いや、ただの伝記の話だ・・・。まぁ、君が幻獣でないことは確認済みだし、私の剣も君のことを嫌ってはいないようだ。それにこ

れ以上追求するのもどうかと思う。どうかね、しばらくはこの宿舎に泊まっていかないか？宿屋に無駄な金をかけなくともよいだろう」
「ぁ、はい、よろしければ」
実際、僕はこの街のお金を持っていなかったのだ。物々交換をどうしようかと悩んでいたところだったので、正直助かった。
「うむ。ではすぐに準備させよう。しばらく街の散策にでも行ってくるといい。この部屋を出て右の突き当たりにいる騎士を連れてな」

僕はお礼を言った後、荷物をとりあえず置いて、早々にその突き当たりの部屋に行き、その扉を開けた。
中は薄暗く、よく見えなかったが、誰かがいるのが分かる。
「なんだ？訓練で模擬刀でも折れたか・・・ってフィードかぁ。隊長に引っ張られたな？」
「うん・・・ちょっと怖い感じだったけれど」
「怖いのは顔と声だけさ。後は怒ったときと訓練の時と指令の時と・・・ってやっぱ怖いな」
そう言って少し泥の付いた顔で笑うジンを見て、僕も固かった体がほぐれた。
目がだんだんと慣れてくると、武器庫全体の様子が分かる。たくさんの剣が木の箱のようなものに突き立てられている。
「一応、この騎士団のほとんどの剣は今ここにあるはずだぜ？みんな今は訓練用のやつ持ってってるからな」
僕はそれらについている玉・・・竜玉に目が奪われていた。一個一個、微妙に色も形も違う。中で何かがきらきらと燃えているようだった。それも、見たことがある炎。
「竜玉は、騎士の証なんだ。竜を殺して得られる」
「竜を！？」
「そうさ。この騎士団の騎士になるための最終試験、それは、竜を倒すこと。そして倒した竜の瞳が、竜玉ってわけさ」
「そう・・・なんだ・・・」

（我らを哀れむ必要は無い、竜の同志よ）
それはどこからともなく聞こえた。部屋中の竜玉が光りだす。
（我らは選んで騎士の一部となったのだ）
（汝が竜の一部となったことと同じ）
（今こうやって騎士と共に歩めることは悪いことではない）
「竜玉が・・・一体どうなっているんだ」
僕にたくさんの声が流れ込んできて、それが重なり響いて、突然体がふわっと軽くなり、立つこともままならず倒れてしまった。ジンが僕を何度も呼ぶ声が、最後に聞こえて、そして遠くなって、暗くなった。

この感じ、覚えている。自分のベッドの上、テフヌトのベッドの上。久しぶりの普通としての目覚めだ。
ベッドから見る外はもう朝のよう。気を失って、結局一日寝てしまったということか。
（すまなかった。我々がもう少し配慮していれば・・・）
どこからかまた声が・・・。起き上がってみると、ベッドの床にはジンが眠っていた。傍らにあるジンの剣の赤い竜玉が光っている。
「いや、いいんだ。気にしなくていいよ。たくさんあったからね」
そう僕が言うと、竜玉は一瞬だけ瞬いて、元の玉に戻った。それと同時に、ジンが起きたことに気づいたのか動き出した。
「んん・・・あ、大丈夫か？すまなかった。フィードがそんな長旅をしてきてすぐとは思わなかったから・・・すぐに休ませるべきだったな。隊長も相当悔やんでたぜ」
「バルシュタットさんが？」
「そうそう。客人の疲労も考慮できんとは何たる失態だ、ってね」
その口調の再現におかしくなって、僕は朝から楽しい気分になれた。
「そういえば、もう一人フィードの連れには連絡してないんだろ？心配してるんじゃないのか？カンザー・・・って奴？」

「ど、どうしてカンザーの名前を！！」
「そんなに驚くことないじゃないか・・・。昨日ずっとうなされながら助けを呼んでたからさ・・・」
それを聞いて安心した。カンザーが捕まったりしたら・・・。いやその前に笛で合図をしなくては。カンザーが僕のことを心配になって街に突っ込んでもきたらそれこそ大変だ。
僕はベッドの横にある背嚢から笛を取り出すと、窓を開けた。
時々、カンザーが口ずさんでいる歌。カンザーは自分の歌っている歌など知らないといつも言うけれど、僕はあれが好きだ。悲しみを持ちながらも、それでも進んでいこうとする、そんな歌を。
僕は朝日に向かってそのメロディを吹き続けた。高い城壁を越えて、果たして平原の果てに隠れているカンザーに聞こえるだろうか。いや、きっと聞こえているだろう。朝市の声も子供のはしゃぐ声も洗濯をする水の音も何もかもを超越して。
「いい曲だ。朝の恒例かい？」
「本当は日没に吹くべきだったんだけど、こうなっちゃったからね」
「確かに、音色は朝のためというよりは夕日のためって感じだったな。さて」
ジンは床から跳ねるように飛び起きると、寝ていた毛布を片付けて鎧かけにある赤い鎧を手に取る。
「君の鎧はここにあるから。こんなに重いのよく着てられるな。俺の鎧より重いかも。それに下地は着てないようだったし・・・」
「ああ、ずっとこのままでいたから慣れちゃったんだ。それに、着れば重く感じなくなるし・・」
「そんなもんかな？俺は薄着一枚のほうが動きやすくていいぜ。さぁ朝飯だ。早く行かないと席が埋まる」
そういいながらもゆっくりと僕の調子に合わせて、立ちあがるときにも心配してくれた。僕は何度もお礼を言ったけれど、ジンはまるで何に対してお礼を言われているのか分からないような様子だった。きっとそういう事が体に染み付いているんだな。

ジンとこのベルタウンについて聞きながらも、一際広い食堂に到着した。窓から差し込む光が少しだけ篭った空間に筋になっている。テフヌトの宿舎と同じように、木で大きな机が作られ、そこに鎧を着た屈強な人や、今にも眠そうにしている人たちが個々で朝食をとっていた。ジンはさっと調理場の方へ行くと、食事の乗った木製のプレートを二枚持ってくる。

「本当は、俺は下座のほうの机に座るんだが、今日は君がいるから特別に上座だ」

「そんなことしなくてもいいよ。わざわざ泊めてくれたのも君らだし・・・」

「いいのいいの。さぁ早く。俺だって上座に座れる機会を逃したくなーい」

そう言いながら奥のほうの机に向かう。僕も仕方なく付いていく。上座といっても机や高さなどが違うわけではなく、ただ位置関係の問題らしい。食べているものもなんら変わりない。ただこっちの机にいる人のほうが、なんだか静かでありながら気迫みたいなものが違うように感じた。

料理はやっぱり騎士の宿舎だけあって、バランスのとれたものだった。僕はその中でも、二回目に目にする魚の塩焼きはおいしく感じられた。そう、あの時の光景が思い出される。

「何ニヤニヤしながら食ってるのさ。うまいなら口で言えよ怖いぞ？」

正面から犬歯だけはみ出た顔で僕の顔を覗き込む。

「ああごめんごめん。すごいおいしいよ。僕、魚あんまり食べたこと無いんだ」

「へー。森のほうから来たのに珍しいもんだな、嫌いなのか？」

しまった。僕の三泊の心臓が瞬時に高鳴ったけれど、ジンは全く気にしている様子も無く、二切れのパンを平らげお代わりをせがみに行った。僕は嘘をつくのはやっぱり苦手のようだ。

「あれ、フィード。君なんでここにいるのさ」

聞き覚えのある若々しい声に振り返ると、なんとそこには門で会ったフェンさんがプレートを持って立っていた。あの時と違い、鎧は身に着けず、ジンと同じような白い肌着一枚を着ている。体はそれでも何か鎧を着ているかのようにがっしりしている。茶色の髪が外の光に会ってきらきら輝いていた。

「フェンさん！バルシュタットさんが、僕をここに連れてきてくれたんです。やっぱり一人で入ってくるのは変だったようで、それで・・・」

「隊長への入城者の報告は義務だからそこは勘弁してくれよ。それより自分の名前を覚えていてくれて光栄だよ」

冗談っぽく笑いながら、僕の隣に座る。椅子も長い木で作られたもので、結果的には同じ椅子に座るようなものだ。

「実は最近、帝国がこの街を奇襲するという噂が騎士団に入ってきてね。まぁあんな辺境の場所からここを奇襲するなど不可能に近いからデマだとは思うんだが・・・」

なるほど。だから僕は一層不審な人に見られたわけだ。

「まぁ、君が敵でないことは確実だよ。自分の槍は嘘をつかない。隊長もそれは分かってくれているようだし――――」

「なぁフェン、フィードってどういう関係なのさ？」

「年上、それも自分より上級の騎士を呼び捨てか？ジーン三闘士？」

「はいわかりましたよ、フェン一闘士。これで満足？」

わざとらしく足をそろえ左腕を胸に当てる。フェンさんはそれを見ずに魚を食べていた。

「はいはい。君もよりにもよってこんな寝坊助と知り合いになるとはねぇ。運が悪かったんだよ」

「なんつーストレートな嫌味。もう一度言ってみろ！」

すらりとジンの攻めをスルーしながらも攻撃を続けるフェンさん。二人のやり取りに、僕はやっぱり人間のいる地に帰ってきたことを実感した。

空が、丸く切り取られていた。穴の中は思っていたほど明るくなく、空の青をますます鮮やかにする。カンザーの鱗ほどではないけれど、白と青のコントラストは、ため息が出るほどに美しかった。
それを囲むのは、たくさんの鐘。数え切れないくらいの、手のひらの大きさから人の背ほどのものまで、数知れず並んでいる。
「ここが時計広場さ。方時計とかは、全てこの時計と連動しているんだ。そして、世界中にある鐘もね」
「鐘？」
僕は寝転んでいた時計の長いほうの針から身を起こし、短い針のほうに座るジンを見た。ジンは鐘を見回している。
「この土地には、双子石っていう石が出土するんだ。その石を半分に割って、それを二つの鐘に取り付ける。片方が鳴ると、もう片方も不思議と鳴るんだ。それを使って、ここにある鐘は、みんな他の町にあるの鐘と連動するんだよ」
「鐘が連動・・・つまり一斉になるってこと？」
「そう。世界の時間は一定ではない。だから、商隊の人とかも待ち合わせもできやしない。だから、鐘の鳴った数で統一しているのさ」
完全には理解できないが、鐘を基準にしていることは分かった。
下を見ると、地面の中でたくさんの歯車がせわしなく回り、カチカチと音を立てながら動いている。巨大な歯車もあれば、本当に小さい歯車もあり、そういったものがすべて噛み合っているようだ。
僕はそれをまじまじと見た。
「これ、何で動いているんだろう」
「さぁ？魔法とか何かじゃないかな？方時計の動力もここから送られているらしいし・・・そろそろ行こう。１２時にこの中にいるのは自殺行為だ」
僕らが鐘の裏にある階段を上って上に上がったときに、時計の針は１２時を指した。その瞬間、一回だけ全ての鐘が一斉に鳴った。空気が揺れるように響き、街中に音を響かせる。音の波が見えるかと思ったほどだ。

「中にいたら、耳がやられちゃうところだったんだね」
「その通り。さて、次はどこ行く？訓練休めるならどこだって連れてくよ」
「とりあえず、僕の目的地の“聖堂”についての情報を得たいんだ。つまり聞き込みだね」
「わかった。じゃあまずは教会からだな。れっつごー！」
まるで子供のように進んでいき、僕を手招きするジン。僕はその腕白さにちょっと苦笑いしながらも、走って追いかけていった。
その後、旅をして世界に詳しい商隊の人や、バルシュタット常駐騎士団以外の騎士の人、街の食堂や旅人らしい人から聞いて回ったが、ちらほら“鳥の城”ではないかという程度の情報で、それ以上は得られなかった。
「鳥の城に行ったことのある人なんてそうそういないさ。ずっとずっと遠いところにあるからね。この街の商隊の人たちの定期ルートの外ともなると、まさに異世界だな」
「馬なら二週間くらいなんでしょ？」
「馬で何も無ければね。でも途中は想像もできないような地をいくつも通らなければならない。魔物や幻獣、肉食植物とかも脅威だ。行こうと思っているなら自殺行為だ。やめたほうがいい」
「幻獣って一体何？」
「それは・・・・」
ジンの顔が一瞬かげり、笑顔が蝋燭を消したように無くなる。が、すぐに戻った。
「人に幻を見せる獣さ。騎士の持つ斬幻剣でないと倒すことはできない。それも、強い心が必要だよ」
間違いない。あの死の谷での奴らだ。よかった。あれはやはり人でなかったんだ。僕は心の奥底にあった何か黒い枷が、外れるのを感じた。
「僕、幻獣に遭ったことがあるよ！」
「そ、そんな馬鹿な！だったら生きていられるわけが無い。騎士で

ないものが奴らから逃れることはできないはずだ」
「あ、あの時は・・・逃げ切れたんだ」
「あーじゃあ幻獣じゃないよ。でも騎士の鎧を着てるし、幻獣も警戒したのかもなぁ」
竜に助けてもらった、と僕は言えなかった。どんな混乱を招くか分からないし、知らないままでいられるならそれでいいと思った。カンザーの痛みを、広めたくは無い。
「そうだね。それに、もっと別のものだったのかも。僕もよく見てなかったから」
「ああ、騎士の俺が言うんだから間違いない。あーもうすぐ暗くなる。宿舎に帰ろうぜ」
「うん、でも日が沈む前に――――」
「あれだろ？分かってるって。なんなら宿舎の屋根で吹いてもいいぜ？屋根に穴さえあけなければ」
「あけないよ。ジンじゃないんだから」
「なんで俺だとあけるんだよ！」
ジンは僕に軽くどついて走り出す。僕は嘘の罪悪感を振り払ってその姿を追いかけ始めた。

夕食は朝食と違って皆一斉のようで、そこで僕は初めて隊長の名の下に紹介された。とはいっても、ほとんどの人は僕を知っているようだったし、僕もその後いろいろな人と話ができて知り合えることができた。この街を護衛するにあたっての逸話や、ジンの問題行動の数々など、楽しい時間を過ごせた。僕についてもいろいろと聞かれたけれど、竜と僕の本当の生まれについては僕にしては上手く避けれた。でも森での生活の話や、生まれの村の話などをして、僕が薬学に詳しいことを知るとこれでまた質問攻めだった。
もう一つ驚いたのは大きな風呂だった。他の人と一緒に入るというのはかなり抵抗があったのだが、ジンに背中を押されたのと、上級の騎士なども全く関係なくたくさんの人が入っている空間にいつ

かは慣れてしまった。彼らは騎士の人たちでさえめったにない僕の体の深い傷跡に驚き、僕は魔物に襲われたという誤魔化しに悪戦苦闘した。なぜか最後には大人も含めたお湯のかけ合い大会になった。後で焚き付け班にこっぴどく叱られたのはいうまでも無い。

「あーなんか怒られちまったぜ。まぁ上の奴らの体流さなくていいだけましか。訓練ないとそれはそれで力が有り余っちゃってしょうがない。あんだけ動けてよかったぜ」

肩をぐるぐる回しながら、言葉に反した物言いで言う。

「うん、楽しかった。なんか同じ騎士団の仲間になったみたいだ」

「みたい？いやいやフィードはもう騎士団の一員だぜ？フィード・サー＝バルシュタット、なんてね」

フィード・サー＝バルシュタット・・・。うん、なんかいい響きだ。僕は声を上げて喜んだ。

方時計の金属製の針が重なり、軋むような特有の音を出す。間違いない、午後十時。就寝時間だ。

「ごめんねジン。また床に寝かせてしまって」

「いやいや、俺が頼んでフィードと同じ部屋に寝かせてもらってるんだ。気にするな。俺は普段、相部屋だからな。じゃ、おやすみー」

そう言うと、一枚だけの毛布をかけ、ジンはすぐに横になってしまった。僕は蝋燭の火を消し、再びベッドの上で眠りについた。カンザーのおやすみの咆哮も聞こえた気がした。

時の街－2（後書き）

お疲れ様でした。ここまで読んでいただいていると思うとうれしいですwブログなどに一言残していただけると元気がでますのでお願いします。

時の街－３（前書き）

１１０４０５　加筆

時の街―3

何かが流れているのを感じる。いや、それは流線だ。それが空間に満ちている。

僕はその中で目を開けた。空はまだ夜。星の明るさで方時計を見れば、まだ四時少し前だ。空気は少しだけ肌寒いくらいだが、何かが満っている。それは、竜の炎の感じに似ていた。

ジンのほうを向くと、そこにはジンはいなかった。剣も無い様子だと、もう起きたのだろうか。

僕は軽い羽織を着ると、部屋を出た。薄暗く無音の空気の中にも、何かが織り込まれている。僕はそれを手繰るように進んでいく。やがて、砂地となっている大きな裏庭に出た。どうやら演習場のようだ。半分の月の光が、太陽の代わりに一色の影を作っている。

その中心に誰かがいる。そう、ジンだ。影から切り取ったと思えるような漆黒の全身鎧を身に付けているが、兜だけはしていない。剣を正面に構えたまま、周りの様子に解けているように微動だにしない。竜玉が赤く燃え上がり、炎が流れ出している。辺りを満たしている炎は、ジンのものだった。

やがて、その炎は剣身に流れ出し、炎を纏っていく。ジンはそれを、いつもとは全く違う、騎士の眼で睨み続ける。

完全な炎の剣と化してから、また時間が止まった。色の無い世界で赤い炎の筋だけが揺らめいている。

陽炎なのか、一瞬動いたと思った瞬間、剣は振り下ろされ、斬り返されていた。炎の軌跡が空間を舞い、残像の残るような、それでいて滑らかな速度で動いていく。その様子は、何か見えない敵を次々と斬り捨てているかのようだ。いや僕には、彼の心に映し出された敵さえも、なんとなく見ることができた。容赦なく襲い掛かってくる敵、絶対に回避不可能に思えるところからの攻撃と移動。

僕はその炎に飲まれ、全く動けずにいた。本能がそれに魅入ってし

まう。戦のためのものだというのに、美しく感じた。
「君にも、見えるのだな。剣に宿る炎が」
いつの間にか、僕の隣にはバルシュタットさんが同じくジンを見ていた。
「まるで炎の波。その波が全てを飲み込み、斬って突き抜けていくかのようです。どんな炎よりも繊細だ――――」
「そうだ・・・。己は剣に、剣は己に、剣と人が一つになっている。そして空間全てを自らに取り込み、それさえも意のままにする」
剣と人が一つに・・・。僕とカンザーも、完全に一つになれば、あんなすごいことができるのだろうか。どんなことが、果たしてできるのだろうか。僕は一瞬だけ、テフヌトで魚を射抜いた時のことを思い出していた。
僕はしばらくしてから部屋に帰ったけれど、満ちた炎が僕に舞の流れを波のように伝え、なかなか眠れなかった。それは嫌なものではなく、どちらかといえば興奮するようなもので、僕の心臓はずっと高鳴って止まなかった。

「お前らいい加減にしろ！」
僕はその声で飛び起きた。なんだか頭がふらふらする。太陽はとっくに空の上で、もう昼間だ。
起き上がると、そこにはフェンさんが立っていた。門で会ったときのように鎧姿で槍を持っている。
「全くジンの寝坊癖がフィードにまで移ったのか・・・。おいジン、起きろって」
そう言ってジンを足で突くが、ジンはよく分からない寝言を言って転がるだけだった。あの時の様子は嘘のようで、気持ちよさそうにしている。
「すみません。もう昼ですよね」
「ああ。まぁ君は疲れているだろうからいいにしても、こいつは許せ・・・ん！」

「ぐはぁ！」
槍の刃の無い先で腹を突かれたジンは飛び起きた。笑っている僕らを見ながら、今の必死さを一生懸命伝えようとしていた。
「いくらなんでも鳩尾突くことはないだろ！人が折角ぐっすり眠ってるんだからゆっくり起こしてくれればいいのにさ」
「隊長はいつも文句言わないが、お前の寝坊癖は酷すぎるんだ。それにお前、今日は特練だろ？」
「俺はフィードの付き人だからしばらく任から外れていいって話だったはずだぜ？」
「このままじゃ体が訛るだろ。隊長が言ってたぜ。風呂ではしゃぐ暇があったら鍛えたほうがいいかもなってな」
ジンが呻いているのを満足そうに見ながら、フェンさんは部屋を出て行った。ジンがいつも寝坊しているのは夜中にあれをやっているからだろう。僕もずっと眠れなかったから、寝坊してしまったわけだ。外で十二時を示す鐘の音が鳴り響いた。
僕らは人のいない食堂で遅い朝飯を取った。僕の村とは違って昼飯はないらしいけれど、ちゃんと用意してくれていた。駆け足で食べ終えると、すぐに中庭の演習場に向かった。
明るい空の下で、銀の鎧を身に纏った男たちが動き回っていた。いろいろなグループが剣の稽古をしていたり、トレーニングを行っていたりしているようだ。鎧が擦れる音や剣の交わる音、気合の一声が演習場に轟いていた。
「すごいにぎやかだ」
「やってるほうは必死なんだがね。傍から見ればただ騒いでる野郎たちだろ」
「ジンは、鎧着ないの？」
「フィードのように鎧好きじゃないからなぁ。それに、俺は自分の鎧、結構目立つ奴だから着たく無いんだ」
あの夜に見たジンの鎧。あれはここにいる人たちのように白い鎧ではなく、闇のような漆黒の鎧だった。たしかにここで着たら浮い

た存在になるだろう。
「そんなこというから特練に出ないのかジン。怪我しても知らないぞ」
出入り口近くにいる人たちが、僕らの話を聞いていたのか話しかける。そのグループは鎧の修繕をしていた。工具がたくさん広げられ、部品ごとに分解された鎧がきちんと並んでいる。数人が丸太に座って作業に没頭している。
「竜の鱗で作られた鎧でも、手入れしなけりゃ壊れるのさ。お前さんのはちゃんと手入れされているようだったな。俺は鎧師じゃないが、それでも鎧の音で分かるんだ」
「僕、鎧の手入れとかしたことないんですが・・・」
「そりゃまたすごいな。ずいぶん頑丈な鎧なんだな。それとも、まだ鎧が生きているのかもしれんな。竜の名残として」
その言葉は、妙に合っているような気がした。あの鎧は、もしかしたら本当に生きているのかも。
そう思いながら振り返ると、なんとジンは隣のグループで一対一の戦いを始めるところだった。互いの刃には布が巻いてある。
相手はジンの何倍もある屈強な男。もちろん鎧をしているし、持っている剣はとてつもなく優美で鋭い。刃とかそういった問題でなく当たればひとたまりも無いだろう。
大きな掛け声と共に、両手で剣を振り下ろす。僕が当たると思った瞬間に紙一重でその剣をかわし、懐に入り込もうとする。男も瞬時にそれに反応して後退、ジンの剣は鎧を擦れた程度だ。
「ひさびさに顔出したと思ったら、お客にいいところ見せようってか。だが、そいつは残念だったな。お前には無理さ！」
そういいながら、今度は剣を片手で横にはらう。ジンは剣を縦にしてその衝撃を受け止めるが、耐え切れずに押し出された。バランスを崩したところに来る追撃を片手で側転し避けた。
「それはどうかな。勝負はどうなるかは分からないさ」
「軽業師のようにちょこまかと！仕留めてくれるわ」

体重を乗せた一撃を受け流し、流れるように動く。ジンは大男の左肩に手を載せて、なんとそのままそこで宙返りをしながら首に剣を突きつける。そのまま男の後ろに着地した。
「あぶないあぶない。鎧を着てたら絶対負けてたね」
「鎧を着ずに勝負をしたところで練習になどならん。予備のでもかまわんから着て来い！」
余裕の様子のジンに怒鳴る男。だがすぐにきまりが悪くなったのか、小声で文句を言いながら丸太に腰を下ろした。その人に近づいてみると、一際鎧についた傷が多いようだった。きっと歴戦の人なのだろう。僕が来たことに気づくと、さっと照れくさそうに頭をかいた。
「すごい戦いでしたね。ちゃんと勝負したら絶対勝てたでしょう」
「いやいや、見苦しいところでしたな。どうも勝負になると頭に血が上ってしょうがない。だからあんな小僧にも負ける。ささ、立ってないで隣へどうぞ」
僕は同じく茶色の丸太に座る。よく見ると一度表面を火であぶって、その後磨いたもののようだ。
前ではジンが二刀流の小柄な男との二回戦が始まっていた。剣と剣が鈍くぶつかる音が鳴り響く。短剣の素早い対応に、多少ジンのほうが押されているように見えるがどうだろう。
「わしはティラゴス・サー＝エンテラス。みなティランと呼ぶがね。今は腕を磨くためにこうしておるが、午前中までは騎士見習いの指導係としてやってきておる」
「騎士見習いの指導ですか。もしよかったら僕にも教えてくださいよ」
「竜に返り討ちに遭わんように、全力で指導してはきたが、あんな小僧にも勝てなくなるとは、わしはもう引き際かもしれんな」
「でも、ジンは強いですよ。僕、夜見たときすごいと思いました」
その言葉に、ティランさんは予想外の驚き様だった。
「夜だと？あいつ士団規定も破っているのか。だが、夜に訓練して

いるとは知らなかった。わしらは、夜は外出禁止だからな。まぁあの小僧も、騎士の端くれってことか」
僕は、今度は負けているジンを見ながらも、ジンは本気を出していないと分かっていた。あの夜の動きに比べればとってもゆっくりだったから。
ティランさんは剣を横から引っ張り出すと、布を解き目の前で構えた。
それは傍目から見れば片手のようにも見えるが、両手持ちも可能なように作られた剣のようだった。片刃の表面には青い模様が描かれ、カンザーの鱗のように竜月色に輝いている。斬幻剣はいろいろな人のものを見てきたけど、僕はこの剣が一番好きだなと思った。だってカンザーとかなり似た色をしているからだ。
「お主、剣の言葉が分かるらしいな？」
まじまじと斬幻剣を見てた僕に、ティランさんはにやにやしながらも微妙な表情で尋ねる。
「え、はいそうです。でも、今はとくに話してたわけではないです」
ティランさんは剣をひざに置き、ゆっくりと撫でる。まるで自分の愛する子供であるかのようだ。
「そうか・・・そうだろうな。こいつは寡黙な性格なんだ。俺には言葉はわからねぇが、俺らは一心同体だから知っとる。こいつはまるで俺がガキだったころとそっくりでよ。強情なくせに何も言わねぇ。だから俺らは分かり合えたのかもしれんがな」
つばについた竜玉が緩やかに光る。それはカンザーが僕を見る目によく似ていた。
僕はその後ジンと再び合流し、いろいろなグループを回り、決闘や剣の手入れなどをしていく様子を眺めていった。僕も鎧の手入れの方法や、戦法についてなどをジンと共に聞いて回った。応急処置や手当てについては僕も詳しかったから訓練に参加したし、トレーニングも一緒にやった。そして僕が一番驚いたのが、馬だ。とっても珍しい動物で、まるで人に乗ってもらうために生まれた存在らし

い。つやつやした毛並みに乾いた足音。聞いたことも無い鳴き声に、僕は不本意にも大はしゃぎだった。この騎士団は三頭しか保有していないらしく、伝達用としか使わないらしいけれど、ジンは訓練として少しだけ走って回った。あまり乗る機会はないと言われているのに、馬がジンの意志を知っているんじゃないかと思うくらいに乗りこなしていた。

あっという間に時間は過ぎて行き、いつか空の色も変わって薄暗くなってきたころ、バルシュタットさんの号令で特練は終了した。

「すっごーく楽しかった。本当にあっという間だったよ」

「そうかぁ？俺にはこれのどこが楽しいのか分からないな。五日に一回のペースでやってりゃ飽きてくるよ」

飽きるのが早いのはジンだけさ、と皆に言われて文句を言うジンに笑いながら、みんなで食堂に向かった。

空が赤から紫へと変わるのを、少女は家の中から眺めていた。今日は自分の誕生日。これでやっと、兄と同じ“学校”というところに行くことができる。

「メル。いるかい？」

少女が振り返ると、部屋の入り口には兄の姿があった。

「お兄ちゃん。早く夜にならないかな。パーティ待ちきれないよ」

駄々をこねる少女のの頭に、兄の手が伸びる、ゆっくりと長い髪の毛をなでた。

「そうかぁ。じゃあ早いけれどこれ――――」

兄が取り出したもの。それは小さな箱だった。少女がそれを大事そうに受け取り、恐る恐るふたを開けてみる。蓋の中からやさしい音楽が流れ出した。オルゴールだ。

「こんな高価なもの、どうやって――――」

「一生懸命貯めて買ったんだ。ずっと前から欲しいっていってただろ？がんばってお金貯めて買ったんだ。大事にしてくれよ」

少女はその言葉を聞いてわっと喜んで兄に抱きつく。

「ありがとう。大事にする」
「そうか。じゃあもう少し待っててくれ。パーティの準備が終わったら呼ぶよ。きっと驚くぞー」
少女は元気に返事をし、兄は部屋を出て行く。椅子に座ると、再びオルゴールの蓋を開いた。やさしい音楽。これからの期待とうれしさで胸が一杯だった。
再び入り口のほうで音がした。振り返ると、兄が立っている。
「もう準備できたの？なら早く行こうよ」
「ああ、そうだな」
兄はさっきとは違う口ぶりでそう言いながらは近づきそして、なんの間もなくナイフを少女の胸に突き刺した。
何がおこったのかわからない。胸が熱くなって、喉から何かが噴出してきて、何も考えられない。
刺さったナイフを抜くと、返り血が兄の体や部屋を黒く染めた。
「な・・・んで・・・・」
「メル、おめでとう。僕に一番目に殺された人間だよ。喜んでくれ」
実にうれしそうに、兄は語りかける。少女の苦しそうなか細い息の音はだんだんと小さくなっていった。やがてしなくなった。兄はその様子をじっと見つけ続けていた。
「愛したお兄ちゃんに殺されてよかったな――――さて、次はお母さんにしようかなぁ」
そう楽しそうに独り言を言いながら、兄は少女のいる部屋を出て行く。
床には、血の足跡が続いていた。

時の街ー３（後書き）

お疲れ様でした

時の街－４（前書き）

そこは、彼が知る街ではなかった

時の街ー４

バルシュタットさんの今日と明日の連絡事項を終え、夕食もそろそろ終わるころのことだった。
突如外から走る足音が聞こえて来て、食堂の入り口に一人の騎士がやってきた。ずいぶん慌てた様子で、荒い息をしているその騎士の鎧には、なんと所々血のようなものがついている。
「た、大変です！」
「どうした、報告せよ！」
バルシュタットさんが立ち上がり、走ってきた騎士を睨む。その一声だけで、食堂は一瞬にして静かになった。
やってきた騎士は荒い呼吸をなんとか飲み込み、胸に腕を当て姿勢を正した。
「報告します！市民数名が突如刃物などを所持して暴れ回り、すでに数名が死亡。負傷者はなおも増え続けている模様です」
「そういった治安維持は保安隊の役目であるはず。我ら騎士が出向いては混乱を招くだけだ」
「それが、鎮圧に出動した保安隊数名も、突如暴徒と化したようで――――」
その声を遮るように、外で地面が揺れるかのような爆発音が鳴り響いた。たくさんの人が叫び声を上げる。
「――――念のために我らも戦闘配備だ！数名は私と共に状況の確認にあたる」
その言葉を言い終えないうちに、騎士たちは真剣な顔つきで立ち上がり、準備のために食堂を後にしてゆく。
「さぁて、戦闘配備なんて久々だ。俺も鎧着てくるから、外への出入り口で待っててくれ」
「うん、分かった」
「何が起こってるんだろうなぁ」

ジンは張り切ったように、それでいて半分楽しそうに食堂を出ていった。窓の外では暗い空が赤く色づいている。結構大規模な火事なのかもしれない。
「待つんだフィード君」
僕が宿舎の出口に向かおうとした時、僕は後ろから呼ばれた。振り返ると、バルシュタットさんが向かって来ていた。誰よりも深刻そうな顔をしていて、落ち着きなさそうに時折左手で剣の柄をなでている。
「君は危険だから部屋の中にいたほうがいい。何かあっては大変だからな」
「でも――――」
「ジーンなら大丈夫だ。あれでも騎士。問題は無い」
後ろに就いていた騎士に合図をすると、バルシュタットさんに兜を渡す。しっかりと頭に押し込み、堂々した風格で外に出ていった。僕にはなんとなくその相貌と、実際思っている事がずれているような気がしてならなかった。
僕は急いで部屋に戻ると、荷物から弓を取り出して背負う。カンザーがいなければ矢が作れない。それ以前に、まず試し射ちもしていないということを悔いた。僕はカンザーに少し頼りすぎていたのかもしれないと、少し心を引き締めた。
僕は武器庫に矢がないか探すために部屋を出た。廊下でも騎士たちが無駄の無い動きで準備に追われている。でも、僕の目に留まったのは、廊下の壁にいる妙なものだった。
白くくねくねした棒状のものが、壁から延び出てきていたのだ。それもたくさん。その光景に鳥肌が立った。それらは完全に壁から抜け切ると、なんと浮遊して空間の中を泳ぎだした。なんというのか、それらは壁や柱といったものを全く無視した幽霊のような感じで、実際少しだけ透き通っている。よく見れば顔のようなものまでついていて、本当に気持ち悪かった。
それなのに廊下にいる騎士たちには全く見えないようで、その異

様な光景を無視して作業に追われている。まさに僕だけ幽霊を見ている感覚。だが騎士の鎧に近づき触れると、鎧が瞬いてそれを弾いた。だからただの僕の幻覚ということはないだろう。
そのうちの一匹が、兜をしていない一人の騎士の頭に取り付いた。それでも全く気づく様子は無い。そしてそれはなんと、取り付いた人の頭の中に潜るように入っていってしまったのだ。僕はその瞬間、その人の体にその白い何かが染み込んでいくのが見えた。
　その騎士の動きがぴたりと止まった。その様子に周りの仲間が声をかけるが、一切の作業を止めて、時間が止まったかのように反応がない。
「うぐ・・・・」
「おい、具合でも悪いのか」
「・・・いや、最高にいいさ――――」
（意志を歪められている！今すぐに止めてくれ！）
　その騎士が自分の剣に手をかけるのと、剣の警告の声が聞こえるのは同時だった。そして引き抜かれた剣はそのまま、ちょうど今様子を伺っていた騎士の喉下に突き刺さった。
「――――ちょうどお前の息の根を止めたかったところだからな」
　そう言うと、満足そうな笑みを浮かべながらゆっくりと剣を引き抜く、白い騎士の鎧が真っ赤に染まった。刺された騎士は血を噴出しながらも、何か言いたそうに手をその騎士に挙げ、届く前に倒れた。床に血の輪が広がっていく。
　僕はその様子を理解もせずに呆然と見ていたけれど、腹の奥から何かが込み上げてくるのを感じた。だけどそれよりも早く、僕の身体は今立っていた場所から横に跳躍した。
（横に避けろ！）
竜玉の言われるままに体が反応した直後、僕のいた場所には見覚えのある青い剣が突き刺さった。あの訓練の時にジンと決闘をした人、ティランさんが、人ではない目をして僕を睨んでいた。口からは野獣のように涎を垂らし、興奮したように荒い鼻息をしている。

（同志よ。主はもう止められない！早く逃げるんだ）
剣の竜玉が荒くそう告げるが、僕は沸き起こる恐怖で体が動かなくなってしまっていた。まるで氷の上に座り込んでいるかのように足が地面を掴むことができない。廊下はまるで戦場と化していて、目に入るものは仲間同士の争い。廊下はすでに返り血だらけで、あちらこちらで気が狂った仲間を留める叫びと、狂った歓喜の声が入り混じっていた。
入り口からは同じく変になってしまった街の人々が入り込んできて、手当たり次第乱闘に参加し始めている。
「ガルルルル・・・」
僕は剣を持っている騎士から漏れる獣のような声で我に返り、慌てて落とした弓を拾うと、何も考えずに窓から飛び出た。勢いあまって回転し、地面に体を叩きつけるが幸いにも下は雑草の生えた地面。僕はすぐに体を起こすと、目の前の光景に息を呑んだ。
そこにはいつもの町並みは存在せず、代わりにいつかの光景が広がっていた。燃え盛る家、それが写る血溜り、必死に助けようとしている人々。そう、この光景はまるで、僕の村が襲われ、焼かれた時とまるで同じじゃないか。違うのは、襲っているのは兵士ではなく普通の人。それから宙を水中のように泳ぎまわっている謎の物体だけ。それが助けたり手当てをしたりしているものに取り憑けば、今度は人を襲いだす。もしくは互いに争い合い、建物や者を壊し始める。炎の轟々とした音、泣き叫ぶ声、獣の声のような狂喜が街中を満たしていた。
空気が異様に熱を持ち、見ている景色が揺らめいている。ああ、そうだ、僕の村の時もそうだった。見ているものがまるで幻のよう。人が斬られる瞬間も、絶望する様子も、燃えていく子供のおもちゃも、今までの平和全てが消えていくのが、全てがただの絵ではないかと思えている。自分はただそれを見ているだけなのだと。
揺らめく陽炎の中で、僕は泣いている子供がいる。服はすでに煤に塗れ、どうしたらいいのか分からずにうずくまっているようだ。そ

んな少年の後ろの炎の中に、ぼんやりと影が見えた。そこから現れたのは、何か棒のようなものを持った男だった。服の一部が燃えていても気にも留めない様子で、まるで獲物を獲たかのような目で少年を見つけると、まるで悪魔のように笑いながら、ふらふらと少年に近づいていく。僕は身震いした。それが合図かのように僕の体は無我夢中でその少年へと走り出していた。間に合え！

狂気の棒が振り下ろされるまさにその瞬間に、僕はその人を突き飛ばした。不意打ちが功をそうし、男は大きく飛ばされ転がった。と同時にたまたまそこに漂っていた白いくねくねしたやつが僕の足に取り付いたが、僕がはっとした時にはなぜか燃え上がっていた。奇怪な叫び声を発しながら、跡形もなく消滅する。それはまるで――――そう、僕の体に流れる炎が、そいつに燃え移ったかのようだった。

僕は少年に声をかける暇もなく抱きかかえると、すぐにその場から走り出した。あの男が怒りに満ちた呻き声と共に立ち上がろうとしいたからだ！とにかくここ以外のどこかへ！少年は僕の腕の中で暴れながら泣き喚いている。助けようとしている僕さえも怖いのだろう。分かるよ、昔の僕もそうだったから。僕は意識せず少年を強く抱きしめていた。周りに漂う邪魔な奴らを手で払って燃やし、突き進む。

すでに宿舎は轟々と燃え上がり、到底戻ることはできそうにない。中で身を省みずかたっぱしから荷物を外に放り投げている人がいるようで、窓から物が飛び出してきている。

「大丈夫かフィード！」

立ち止まり声の主を探すと、一人の騎士が僕に走り寄ってきていた。兜をしていて誰か一瞬分からなかったけれど、いまだ威勢のいい声でやっと認識する。

「無事だったみたいだな！全くとどうなってるんだ。仲間同士で殺し合いなんてまっぴらだ」

「フェンさん！あの白いやつは一体――――」

「白い奴？どいつのことだ？――――まぁとにかくまずは正常な者を避難させることが第一だ。中央広場に集めろと隊長が言っている。私も君たちを護衛しよう」
僕以外にはあの白いやつは見えないということなのだろうか。
僕はフェンさんと共に時計の穴がある広場へと走り出した。街の窓からは炎が噴出し、あちらこちらで乱闘が続いている。その間もフェンさんは街の人たちに中央広場に集まるように叫んで伝えていた。だけどみんな混乱した様子で、広場とは逆に、門のほうへ向かっている者さえいる。
「これじゃあ、まるで戦争みたいだ・・・」
僕は上がる息の中で、無意識のうちにそうつぶやいていた。地獄のような光景を走り抜けていく。見える視界のどこにも動かない人影があり、時にはまるでゴミのようにそれを踏みながら殺し合いを続けている人たち。それは決して兵士や戦士というわけではなく、子供から老人まで、男女問わず、今まで平和に暮らしてきた人たちなのだ！僕が時々踏みつける、その町を写す地面の水溜りのようなものも、赤い光源のせいでよくわからないけれど、多分血だろう。そう、街中が血だらけだ。
「な、なんだありゃあ・・・」
僕は、前を走るフェンさんが突如立ち止まり、呆然と眺めている光景を見た。
道の上で、逃げ惑う人を襲っている者。それは人ではなく、よく分からない、見たことも無い四足の獣のようなものだった。目にも留まらぬすばやい動きで、次々に人を食い荒らしている。
「野獣が、防壁を抜けてきやがったのか？――――いや、そんな馬鹿な・・・」
いや、違う。よく見れば、獣の姿をして入るが二本足で歩いている人、腕や足だけといった一部だけ異形化している人もいる。そう、あれは――――人。まるで行動や心だけでなく、体までもが変化したかのように、一部の暴徒はその姿を変えていっているようだった。

「こんなこと・・・あ、あるはずがない・・・。とにかく抜け道に迂回しよう。あそこを抜けるのは危険すぎる・・・」
驚愕しながらも、騎士の冷静な判断が体に染み込んでいるのか、フェンさんは僕が頷く前に横道に向かって走り出した。燃えた柱が横倒しになっているなど、ずいぶんと危険な道だったが、裏道は不気味なほどに人気がなく、ただ炎の煽る音だけが辺りを支配していた。
そして、いつまでも続くかに思えた迷宮は突然開け、僕の視界の中には、あの巨大に穴が目に飛び込んできた。が、僕は本当にここが、元の時の街ベルタウンなのかどうか疑った。もしかしたら迷宮に迷う込んだ間に別の世界に迷い込んだのではないか、と思えるほどに。今までの道のりも異世界だったが、ここはまさに戦場だった。死体は山のように積み上げられ、その向こうで騎士たちが狂ったように、同じく狂った人々に剣を振るっている。無事な人たちを守るように輪になってはいるが、その人たちに白い物体が取り付けば、守るべき者が今度は敵になる。酷い有様だ。
「我らバルシュタット騎士団は覚悟した！彼らとて操り人形のままいるよりは、同志に殺されるほうが本望であろう！我らはもう躊躇いはしない！」
気合を入れるような掛け声に戦っているものたちが声を返す。奇声と咆哮が入り混じる戦場の中を掻い潜って人が集まっているところへ今行くのは不可能に近い。
フェンさんは襲ってきた住民を蹴って倒し、喉を槍で貫いた。痛いくらいに苦渋の呻きを発しながら。僕を守るために、次々と向かってくる者に槍を振り回してゆく。このままでは、僕もどうにかなってしまいそうだ。
ほんの15分前までは何事も無かったはずなのに、一気に世界が変わりすぎている。あのままま風呂場ではしゃいで、眠れるものだと思っていた。そう、昔のあの日だって、僕は何の疑いもなく次の日が訪れるとばかり思っていたんだ。だけど、ほんの一瞬の狂気

で変わってしまう。僕は不意に足の力が抜けて、自分と少年の体を支えきれず座り込んでしまった。フェンさんはその様子に驚いたようで、僕を背に次々にやってくる人々を相手しながら叫ぶ。
「まだ気を抜いてはいけない！勝負はこれからなんだ。ここは私が食い止めるから、君はなんとかして安全な場所へ行くんだ！」
「で、でも――――」
「これは命令だ。さぁ、走れ！」
号令のような強い一声と共に、槍の元で石畳を叩く。僕は城門を空けた時のそれにびくりと反応して、そして甲高い音に圧されて、弱弱しくも立ち上がると同時に広場の外側を回るように走り出した。左は燃え盛る建物、横は戦場。これからどうすればいいのだろうかとか、もう考える余裕はなかった。
そうやって何かから逃げるように必死に走っていたから、僕は前に人がいると気づくのに遅れた。慌てて避けたその場所に、鋭い音と共に刃先が通過して、僕の髪がぱらぱらと落ちる。その剣には見覚えがあった。ああ、まさかそんな――――
「――――ジン・・・まさか、君も・・・・」
僕が顔を向けると、さもうれしそうに笑いながら、振り返るジンの姿があった。

時の街ー４（後書き）

お疲れ様でした。

時の街－5

「やぁフィード。俺はうれしいよ。こんなに清々と人が殺せる日が来るなんてさぁ」
　ジンは真っ赤な服を着ていると僕は思ったけれど、それは僕と別れるときに着ていた白い服だ。そこに染められているのは、全て血だった。たくさんの返り血が付いていた。剣の刃先からまだ新しい血が滴り落ちている。まさか、後ろで倒れている人たちは――――
「君もまた、あの白い奴に操られているのかい・・・」
「操られている？そんなことはないさ。俺は今までの俺だよ。ただ違うのは、開放されたということかなぁ」
　赤い青年はそんなことは興味がない、といった様子で持っている剣を舐めるように見つめながら近づいてくる。
「開放？人を殺すことの何が開放なのさ！目を覚ましてよ！」
「大丈夫。目はきっちりさめているからさ。フィードも、他の騎士や人々と同じところに連れて行ってあげるよ」
　本当に、言っていることとやっていること以外はいつものジンだった。だけど、僕に剣を振り下ろそうとしているジンは、やっぱり普通ではなかった。僕はその衝撃に心がついていかず、そのすばやい剣先をどのように回避するのか、見当も付かなかった。
　鈍い金属音。僕が何度目かの我に返ると、そこには大きな剣身がジンの刃の軌道を逸らしていた。
「ジン、いい加減にしろ！お前も騎士ならば、そのような幻獣に心を支配されるな！」
　バルシュタット隊長だった。ジンの剣を弾き返す。
「君は早く逃げるのだ。どこか安全な場所へ。ジンは私にしか止めることはできないだろう」
　そう言うと、バルシュタットさんはためらいもせずジンに斬りかかっていった。

「我らはもう躊躇いはしない！例えお前を殺そうとも、それがお前にとって一番幸せなことだと言うのならば！」
「それはそれは隊長。俺もあなたが怖くて仕方が無かった。今日で最後にしましょうよ！」
僕は変わってしまったジンと必死に戦いを繰り広げる二人をただ見ていた。べっとりとついた血糊の剣を互いにぶつけ合わせ、怒涛と共に振り下ろす。なぜ争わなければならないんだ。そもそもこの戦いに敵も味方も無い。ただの殺し合いじゃないか。誰も悪くないはずだ。
　その時なんと、白いくねくねしたものが僕の抱いていた少年に取り憑いた。僕はすぐに気づいて取り払おうとするが、ものすごい速度で少年にもぐりこみ、すぐに体の中に入ってしまった。僕はその後どうなるのか何回も見てきたけれど、絶対に想像したくなかった。
　だが突如、少年の体が反るように大きく打ち震えた。目は焦点が合っていないように虚ろになっていき、口からは嗚咽と共に涎が垂れている。痙攣とともにみるみるうちに体中から黒い毛が生え始め、顔も鼻と口あたりが引っ張られているかのように伸びてゆき、手の指も信じられない光景で三本に変化してゆく。体が少しずつ大きくなって、やがて窮屈にしていた衣服を破り、今まで生えていた歯がぼろぼろと抜けて、鋭利な牙が姿を現す。
　獰猛なうめき声と共に、僕の目の前には、一頭の野獣が静かに佇んでいた。僕がいることに今やっと気がついたかようにこちらに向くと、僕に威嚇の咆哮をあげる。
「グルルルル・・・・ダ・・・ダスゲテ――――」
　なんだろう、これは。一体どうなっているんだ。人が獣になるなんて・・・街中で見かけた獣も、こんなふうになってああなったのか・・・。僕は体中が震えて力が入らない。もう本当にダメだ。心臓の音が外の音よりも大きく聞こえる。僕はその獣の目に取り付かれたかのように動くことができなかった。
　少年だった獣は僕に飛び掛ってきた。襲ってくる牙と爪が元々何

であったか知っている。だから僕はもう動けなかった。僕に刃を向けているということが、理解できていなかった。僕は死んだだろう、彼が来なければ。
すばやいその獣よりもさらに早く、その獣の何倍も大きく、それでいて聞きなれた咆哮が舞い降りた。大きなそれに弾かれ、漆黒の獣は簡単に吹き飛ばされる。少年だったそれは、体勢を立て直すと、すぐに襲う目標を変えたようで、別の人に向かって走っていった。
「騒がしいと思って来てみれば、とんだ大騒ぎだな。貴兄よ」
僕の目の前には、この炎の中でもまだ青い、大きな鱗の体があった。そう、見上げればいつもの牙、いつもの羽、青い鱗・・・。たった二日くらいしか離れていないというのに、僕には数年ぶりの再会にも思えた。
「カンザー・・・来てくれたんだ」
「次からは笛で合図をしてほしい。貴兄を探すのには苦労した」
僕は何かの糸が切れたかのようにカンザーに抱きついた。涙がどっと溢れてくる。
「僕・・・僕！・・・・・」
「やはり、貴兄を一人にしたのは良くなかったようだ。早くこの街を離れよう」
僕はその言葉に驚き、顔を上げた。
「そんな！この街の人を見捨てていくことなんてできないよ！」
次の瞬間、カンザーは片方の羽を突如大きく広げた。刻まれた文字が風を呼び出し、ものすごい突風が巻き起こる。
それと共に、カンザーに襲い掛かろうとしていた騎士が吹き飛んで倒れた。あの槍は・・・。
「・・・くそう！獣の次は竜か！もう次に何が出てきても怖いもんはないな！！」
僕はそれが誰だか分かると、慌ててその騎士に走り寄ってゆっくりと身体を起こした。
「フェンさん、大丈夫ですか？」

「ああなんとかな。それよりも早く逃げるんだ。竜はいままでとは段違いの強さだ。炎を吐かれたらひとたまりもないぞ！」
そう言って立ち上がると、カンザーに向けて槍を構える。よく見れば体中傷だらけだ。鎧を貫通した割れ目から血が噴き出している。
僕はぞっとして慌ててフェンさんの前に回りこんだ。
「彼は人を襲ったりしませんから！！それよりあなたを早く手当てしないと！血が！」
「どうしてそんなことが言えるんだ。もう何も信じられないんだぞ！　お前だって本当は俺を殺そうとしているんじゃないのか！！」
僕はその言葉が心に突き刺さり、そして嫌に悲しく感じた。信頼していた誰もが敵となり、守るべき誰もが敵となる。きっとフェンさんだっておかしくなって当然だ。僕だって、カンザーが獣のように獲物を襲ったあの時は嫌だった。だから僕は、フェンさんに抱きついた。あの時と同じように・・・。でも、あのときよりも僕はずっと震えていた。
「そんなこと・・・言わないでください。信じなければいけないんです。そうしないと、殺されていった人の為にならないじゃないですか・・・・」
僕はそのままずっとそうしていた。フェンさんは、やがてゆっくりと槍を戻していき、そしてしゃがみこんで僕に目線を合わせた。兜の間にある暗いくらい隙間から、強い意思を持った瞳が見える。
「――――すまない。自分もおかしくなっていたんだな。これじゃああの暴徒となんら変わらない。ほんとうにすまなかった・・・」
「いえ・・・」
僕は立ち上がるとカンザーに振り向いた。フェンさんの瞳から受け取った強い意志が、僕に宿ったかのようだ。僕の心は強く固められた。
「カンザー。あの白いくねくねをなんとかできないかな」
「それは一体何のことだ」
竜が話せることに、フェンさんはとても驚いているようだった。

だけど説明している時間はないし、フェンさんも僕たちの話に割り込むことなく黙っていた。
　僕はくねくねを指で指し示したり、いる場所を口で説明したりしたが、カンザーにも全く見えていないようだ。
「カンザーにも見えないなんて・・・」
　僕が絶望に落ちそうになった時、
「見えぬなら見えるようにすればいいだけのこと」
カンザーは簡単にそう言うと、頭を空へ向けた。まるで長い首がぐんぐん伸びていくのかのような錯覚を覚える。口を大きく開けて息を吸っているようだった。そして、ふっと息が止まった刹那、咆えた。
爆音なんてめじゃない。地面が轟くほどの深く、それでいて大音量の咆哮が響き渡った。僕はすぐに耳を両手で塞いだけれど、全く役立たず、頭がぐわんぐわんしてへばりこむ。
本当に地響きでも起きているんじゃないかとも思った。石畳の地面から何からが共鳴して細かく揺れ動く。カンザーが息を吐ききるまではすぐだったんだろうけれど、ぼくにはとんでもなく長く感じた。
「　　」
カンザーが何かしゃべったようだけど、全然聞こえない。耳鳴りが世界を支配している。
「カンザー、全然聞こえないよ」
　そう言うと、カンザーは僕の額にゆっくりと口の先をつける。
（見えぬ世界から引っ張り出した。これで誰にでも見える。貴兄には少し悪かった）
　その声は確かにカンザーだったけれど、それはまるで竜玉からの声と同じようだった。そう、声だけでなく心のようなものも繋がったような感じだ。
「見えなくて半分イライラしてたんじゃない？」
（そんなことはない。が、否定はできないな）
　顔は相変わらず凶暴だけど、笑ったような意思が伝わってきて、

状況も忘れて僕も笑った。
だんだんと耳が回復してくると、辺りはさっきよりもますます混乱したものになっていた。よく見れは白いくねくねは透き通ったものではなく、しっかりとした姿になっていた。他の人たちにもすでに見えるようになっているようで、慌てながらも切ったり叩いたりしている。
「こいつらは幻獣だ。なるほどだから兜まで装備したものは狂わなかったのか！」
フェンさんが辺りを見回し、穴が開くほどの形相で幻獣を睨み付けている。近くにいた一匹を見つけると、槍で突き刺した。竜玉が瞬き、幻獣は跡形もなく消え去る。
「これが、幻獣なんですか？」
「君には見えていたのか。いや、そもそも君は一体何者なんだ。いやいや、今はそんなことよりも幻獣の殲滅だ。相手が見えればこちらのものだ」
フェンさんはすばやく立ち上がると、いよいよ勢いづいて槍を振り回していく。
「カンザー、僕らもなんとかしないと」
「ああ、貴兄がそう決めたのならば」
僕はカンザーに笑いかけるとすばやくカンザーの背中に乗り、足腰を固定した。カンザーは今までにない速度で離陸した。すぐに空にいる幻獣の集団に突っ込んでいき、爆炎をあげた。するとまるで気化したガスのように炎は連鎖して、一帯をすっきりとさせる。ちょっと感動した。
僕も負けじと弓を取り出すと、下で人々に襲い掛かろうとしている幻獣に向かって弓を引いた。カンザーの回りから何かが流れ集まり、矢を紡いでいくのが分かる。そして、青白い筋が僕の口元に触れる。カンザーの羽の動きが安定した瞬間に矢を放った。見たこともないスピードで下に届いたが、やはり幻獣にあたることはなかった。

「だめだ。あんな小さいのに当るわけが――――」
そう言いきる前に、驚いたことに狙っていた幻獣が、掻き消えた。いやそれだけではなく、矢が突き刺さった場所を中心に、次々と幻獣が消え去っていく。
「あの矢は私の風を強くまとめたもの。織り成す風は私の炎だ」
「すごい。これならなんとかなるね」
「相反する存在。存在してはならなかったものは消え去らなければならない」
カンザーは無感動にそう言うと、また轟々と炎を吐いていく。僕もできる限り人に当たらないように注意しつつも、風の範囲を考えながら次々と矢を放っていく。

時の街ー５（後書き）

お疲れ様でした。

時の街－６（前書き）

１１０４０５　物語修正のため一部変更

時の街ー6

やはりジンは強い。
どれほどに攻めていっても受け流し、必殺の一撃を与えようとしてくる。鎧の継ぎ目や喉などを狙って。
多分見えるのはごく一部だろうが、先ほどから白い幻獣の姿が見えない。突如現れた竜に助けられた、あの少年が何かしてくれているのか。
いや、今はそんなことを考えている暇は無い。ジンは鎧を着ていないというのにほとんど無傷、対して私の鎧は傷だらけだ。斬幻剣は劣化をしない。そうすると、劣化する鎧のほうが弱い。
「ほらほら、ぼけっとしてると死んじゃうよ、隊長？俺、いつの間に隊長よりも強くなったんですかね？」
そうだ。ジンはいつの間にか私よりも強くなっていた。捨て子であった奴を拾い、私は幼いころから奴を育ててきた。特に剣の訓練をしたわけでもないのに、私をひたすら見て覚え、強くなっていき、そして騎士の試練である竜さえも倒した。いや、奴が出会った竜は、自ら剣になることを名乗り出たという話もあったか・・・。奴は本当に強くなった。
（もう世に悔いは無いというのか。我が主よ）
私の剣がそう語りかけてくる。そうだな。唯一の悔いは、息子のように育ててきたお前を止めることができなかったことくらいか。
ジンは私がほんの一瞬気を逸らしてバランスを崩したその瞬間に踏み込み、私の篭手を切りつけた。何度も攻撃され、劣化していた篭手はついに割れ、ジンの剣が私の右腕を切り裂いた。息も途切れるような激痛が走り、私は剣を落としてしまう。すかさずジンの剣が兜の間から喉に入り込み、兜を弾き飛ばした。
「隊長、もう終わりみたいですね」
ジンの声は、なぜか悲しそうであった。

「ああ――――お前に殺されるなら、本望だな・・・・」
私はゆっくりと目を閉じた。今までの一生、隊長としての自分、守ってきた人々が、所狭しと心から沸きあがってくる。これが走馬灯というものか。
「それはよかった。じゃあ、さようなら・・・・お父さん――――」
一瞬、目の前が白くなった。そして聞いたことが無い轟々とした音。私は殺されたのだと思った。痛みは無い。だから数秒して、もう一度目を開けたときには、その光景があの世のものだと思ったのも頷けるだろう。
少し離れたところに、光り輝く一本の光の矢が、地面に突き刺さっていた。それはまるで、最後の狂気の世界に舞い降りた一本の光の筋。そう思えるほどに美しく、きらきらと輝いていたのだ。
そして、その声は聞こえた。
『クロノスの鉄槌よ。その力を以って正しき秩序を築き給え』
その矢が突然強く輝きだし、そしてその矢を中心に、グランの銀の槍さながらに、光の風が街中に吹き荒れた。その瞬間見えたのだ。その風が、ジンの心に蔓延り食らう獣を吹き飛ばし、かき消したのを――――
光は瞬時に収まり、元の燃え上がる街に戻った。それと同時に、ジンが私によりかかってくる。それを、体が勝手に抱きしめていた。ジンと同じく、今まで暴れていた者たちがみな意識を失って倒れている。これが奇跡なのだなと、自然と受け止めることができた。
「おいジン。大丈夫か！」
ジンをゆっくりと揺らす。意外にもすぐにジンは意識を取り戻し、ゆっくりと私の顔を見た。最近は見せなかった子供じみた顔。何も知らないかのような済んだ瞳が私を認めると、強く抱きついて大声で泣き始めた。私はジンを、再び強く抱き返した。
僕が中央広場に足を着けた時、そこは日常の夜と同じように静かだった。風もない。街を燃やす炎も息を潜め、雲から少しだけ覗い

た月の光が、僕ら生者を照らしていた。
例えば喜びの声というのは、どこまでも響き、轟くものだけど、反対に悲しみの嘆きというのは、実に近くに行かないと聞こえることはない。僕はカンザーに動かないように言うと、とりあえず近くの人からできる限り手当てを始めることにした。誰も何をされても何も言わない。傷を負った人は無言で手当てしている場所を眺め、手当てする人も無表情で作業する。人の中には、亡骸を時計のある穴の中に放り込んでいる人もいた。やがて、僕がそれをじっと見ていると、手当てしていた人が「死んだ人をあの中に入れれば、その人は完全な過去の人になるのさ」と言った。
僕がしゃがみこんで即席の包帯を巻いていたとき、誰かが僕の背中に触れた。僕はその感触にぞっとし振り返ると、そこにはなんと黒い姿をした獣が、真っ赤になった手で僕に触れていた。声も上げられず固まっていたが、しばらくしても僕を襲う様子はないようだった。その代わりにこう言った。
「ねぇ、僕も治して。僕もテアテすれば直るんだよね？」
まだ血がこべりついた口から、あの時のあの声でそう聞かれる。僕の矢でも、獣になった人は戻せなかったのか・・・。僕は急に悔しくなって、カンザーと同じように顔を抱き寄せて、震えながら静かに涙を流した。その間も、少年は無垢に僕に聞き続けた。

「すまないけれど、焚き火のために燃やすものを集めたいんだ。手伝ってくれないか」
そう僕に尋ねてきた人は、なんと茶色の毛並みをした大きな熊・・・いや、熊人がいた。人ではないが、かといって熊でもない。いや、完全な熊なんて見たことはなかったけれど。
僕はもうその時には何がおきても驚く気力がなかった。だから素直に頷いたけれど、もう一つ驚かなかったのは、なんだか見たことのある瞳、懐かしいような、それでいて苦しいような、深い深い目をしていたからだ。体中に怪我をしているようだが、目も覆いたくな

るような傷も、血は止まっているようだった。
「君は驚かないんだね。それも都合がいい――――ああ、獣になってしまったものは、自己治癒の力が強いみたいだから・・・動けるものはなんとかしないとね・・・」
そう淡々と言って、疲れたように笑った。なんだろう、この痛み。
僕はゆっくりと彼の後についていく。まだ燃えていない家を見つけると、中に入って手分けして良く燃えそうなものを探し始めた。不法侵入だとかもうそんなこと言っていられる状態ではないだろう。中はひどく荒れていて、どうやってつけたのか想像もできない深い切り傷があったり、何か引きずったような血の後が外まで続いていたりと、この惨事の有様を略図で表現している。
そんな家の中を漁っていると、その沈黙を破るかのように、熊の人は口を開いた。その声は弱いながらも、まるで他人事のように淡々たるものだった。
「――――私はね、この爪で、妻と息子を殺してしまったんだ」
僕の手が止まった。彼は語り続けた。
何一つ忘れてはいない。この姿になったときの嫌に気持ちいい歓喜と、肉と骨を絶つ感触。心はずっと恐怖を叫んでいたのに、それさえも喜ぶ自分。何がなんだか分からなくなって、狂気に身を任せていた。もしかしたら、自分の心の奥底では、そもそもこういう感情があって、いまそれがさらけ出されているだけではないかという錯覚さえ覚えた。
「そうして元に戻ったと時になって、やっと泣くことができた。でも思うんだ、この手を見て。またあの衝動が戻ってくるんじゃないか、獣の姿であれば、あの感情はもう僕の心に染み付いてしまったのではないかって。そうすると、いても立ってもいられないんだ・・・」
「――――どうしてそんな話を僕に・・・」
そう言いながら僕は振り返ったけれど、彼から返事は返ってこなかった。僕もそれ以上何もいえなかった。大きな逞しい背中が、細

かく震えていたから。きっと喋っていなければ何かまた考えてしまうからだろう。嫌なこととか思い出しちゃうからだろう。口に出せば楽になるかもしれない。そう思ったのかもしれない。
「ごめんね。変な話しちゃったよ・・・」
「いえ、いいんですよ」
熊の人は少しの間じっとしていたけれど、すぐに木々をかき集め始めた。倒れているタンスなども軽々どかしている様子が、なぜか手に入れてしまった獣の力を悪い意味で確認しているかのように思えた。
そうやって、僕らが燃えるものを持って広場に戻った時、突然僕の背中に何かが当たった。
「いてっ」
振り返って見ると小石。誰かが僕らに向かって投げたのか。見回してみると、そこには今も泣き出しそうな子供の姿があった。持っていたもう一つの石を投げつけると、今度は熊の人に当たった。
「この、人殺し！」
僕が怒って何か言おうとする前に、少年は大声で泣きながら走り去ってしまった。僕の肩に熊の手が乗せられる。見上げると、彼は俯いてますます暗い表情をしていた。
「いいんだ・・・ああやって僕に石を投げることで、彼の心が少しでも晴れるならば、僕は石を受け続けるよ」
そう言って、何かに気づいたように熊の人は前を見る。僕も目線を移すと、騒ぎを聞きつけてか、いつのまにか二人に騎士が立ちはだかっていた。二人とも熊の人を真剣な顔で睨んでいる。
「分かってはいるんだが・・・すまない、いっしょに来てくれないか」
表情の割には、ひどく哀れんだ様子だ。
「・・・はい。覚悟はしていましたから・・・」
僕の横から前に出る時、僕は気づいた。やっぱり見たことのある目。そう・・・いつだったか。あのときの――――初めて僕がカン

ザーに会った時の、カンザーの目・・・。いや違う、そのカンザーの目に映る僕の目。生きることをやめた、あの時の僕の目だ。
「死んじゃだめだ！！」
僕は叫んでいた。あの時のカンザーの気持ちが痛いほどに分かる。
熊の人は、一瞬だけ歩むのを止めたけれど、また歩き出す。僕は最後の「ごめんね」という声が心の奥底にまで響いていた。僕にはもう、できることがなかった。

焚き火をしているところでは、まばらに人が集まっている。でも、中には火を見るのを怖がって、逆に離れていく人もいた。僕は最後にはすることがなく――――いや、する気力が完全になくなって、自然に焚き火の中でも、騎士団の集まる焚き火に近づいていった。この街の中では一番大変だったのだろう。他の人々に比べ、さらにげっそりした表情をした人たちばかりだ。だがそれでも、対照的に黙々といろいろな作業を行っている人たちもいる。みんな僕を見ては怪我はなかったかとかと、いろいろ心配して声をかけてきてくれた。
「フィードくん、無事だったみたいだね」
僕が静かなその声は、体中包帯を巻いたフェンさんだった。やつれた表情で、でもまだ意思の炎を消さない瞳で胡坐をかいて座っていた。
「身体のほう、大丈夫ですか？」
「いやはや、今頃になってやっと痛みが襲ってきてね・・・。こんな経験初めてさ」
少し弱まった威勢で言うと、傷に響かないように乾いた笑い声をあげる。そして、不意に止まって、真剣な目で僕を見た。
「そう、君が何者なのか、まだ聞いていなかったね。君には悪いけれど、この元凶は君にあるのではないかとさえ思っているのだよ」
突然の物言いに足元をすくわれたような感じになった。
「ぼ、僕がですか？」

「そうだ。話によっては君を――――」
「貴兄を、どうするつもりだ？」
僕もフェンさんも驚いた。二人の間に割って入るように竜の顔が突き出てきたからだ。いつもと対照的に風も音もなかった。瞬間移動でもしたんじゃないだろうかと思えるほどに、本当にいつの間にか、この巨体はこの焚き火のすぐ横に来ていたのだ。
「カンザー、動かないように言ったじゃないか」
「貴兄にもしものことがあるならば、この燃え残った街は、今度は跡形もない灰になるだろう」
僕の言葉を無視し、フェンさんを深く睨みつける。竜がいることに周りの人もやっと気づいたのか、小さな叫び声を上げてその場から輪のように逃げ離れた。
カンザーとフェンさんは、しばらくの間にらみ合っていた。痛い空気がぴんと張っている。今動いたらこの空気がどうにか切れてしまいそうな気がして、僕は息を吸うのもためらった――――だがやがて、動いたのはフェンさんだった。
「・・・参ったな。竜に好かれる人なんて聞いたこともない」
負けたとばかりに顔を崩すと、フェンさんは今度こそ思いっきり笑った。そして、一瞬後に傷に響いたらしく悲痛の叫びをあげる。それを見て拍子抜けした周りから笑いが洩れた。
「フェン、そういう判断はお前がすることではない」
その声の先には騒ぎを聞きつけてか、今戻ってきた様子のバルシュタットさんが立っていた。鎧はすでに脱いで代わりにフェンさんのように包帯男だ。特に右腕は何重にも巻かれた包帯から血がしみ出している。背中には、片腕で誰か背負っている。僕にはすくにそれが誰か分かった。
僕は今の睨み合いもすっかり忘れてバルシュタットさんに駆け寄った。大きな背中の上では、ジンが静かな息を立てて眠っている。見たところたいした怪我はないようだ。服もあの血に染まった服から新しい物になっている。だが身体中についた乾いた血はまだふき

取られていないようだった。
「やっと今さっき眠ったところだ。とはいっても、これから見るのは悪夢ばかりだろうがな・・・」
　僕はある時見た夢を思い出して鳥肌がたった。僕はバルシュタットさんに目を移す。
「その傷、ジンがやったんですか？」
「まぁ、避けるのに失敗した程度だ。傷の割にはたいしたことはない。騎士の中には、もう二度と剣を握れぬものもいるからな、それに比べれば・・・」
　バルシュタットさんはジンを火に近い毛布に寝かせると、その横に座り込んだ。やはり疲れているのかいつものような硬い風格はなく、他の騎士と同じような柔らかな感じだ。
「麻酔や薬は重症でないかぎり街の人に回るようにしていてな・・・流石に、私も堪えたよ」
　そう言って、やっと傷に似合うだけの悲痛な顔をした。でも一瞬だけだ。僕に座るように促す。僕が焚き火の近くに座ると、カンザーもその後ろに顔を突き出したまま身体を休めた。バルシュタットさんは僕にカンザーが危害を加えないかと確認した後、周りの人々にも休むように伝えた。まぁ、目はずっと竜に釘付けだったが。
「驚いたな。竜が人を襲わず、人の言うことを聞くとは――――」
　僕はその言葉にカチンときた。
「カンザーは僕の手下でも何でもありません！えっと・・・」
「貴兄はいい相棒だ」
「――――そう、いい相棒」
　カンザーのフォローに感謝する。なんか、相棒っていい響きだ。
「相棒か・・・。まるで私達と剣みたいなものだな」
　そう言って置かれた剣をいとおしそうに撫でるバルシュタットさんの気持ちが、僕にはなんとなく分かった。
「この事態を収束させてくれたのも君たちだ。この街全体を代表してまずは礼を言う」

そう言って深々と頭を下げるバルシュタットさんに僕はどう反応したらいいのか戸惑った。
「僕は僕のできる範囲でやっただけで・・・結果、うまくいっただけで・・・」
うまくいった？僕はあの子供や、熊の人のことが頭をよぎり、それを心で反復した。握った手に力が入る。
「あの、獣になった人たちは・・・」
「ああ分かっている。彼らも被害者だ。だがしかし、人々の中にはそう考えられない人も多くてね・・・」
「あの姿じゃあしょうがない・・・。怯える人もいるし、殺そうと叫びまわっている人だっている。そういう人たちに対する対策のために、姿が変わってしまった人は隔離するように隊長は指示を出したんだ」
フェンさんもあの光景を思い出しているのだろうか、苦い顔をしていた。
「あの白い輩はＤＮＡ情報を乱用していた。それを元に戻すのは難しい」
ああ、たまに出るカンザーのよく分からない言葉だ。
「でぃーねぬえーじょうほう？」
「貴兄には難しい話だ。だが古竜の知識を用いるとは、ただの歪みではない」
カンザーはそう言うと、ため息のような音を立てた。そこから炎が出てくるのではないかと、周りの人は一瞬びっくりしたようだ。
「よく分からないが、私たちも目に見えずそれも人の心を豹変させ、ましてや相貌までも変えてしまう幻獣など、今までに一度も聞いたことがないし見たこともないのは確かだ」
「人という存在は不可侵なのだ。もし本当に人の中に入れるというのならばそれは禁忌の技。幻が成せる業ではない」
カンザーはそう言うと、もう話すことはないとでも言うように目を閉じた。彼の意味深な言葉に、誰もが何も言えず、辺りは沈黙す

る。焚き火の燃える音だけが響いていた。

僕ははしゃいだ騒がしい声で目を覚ました。石畳に直で寝たせいか、節々がちょっと痛い。駆けられていた毛布を取って起き上がると、太陽の下に聞こえるのは子供の笑い声だと分かった。

そしてそれを見て驚いた。カンザーにはたくさんの子供たちが群がっていたのだ。興奮気味に背中に乗ったり尻尾を触ったりして遊んでいる。

「すごいや！僕竜なんて見るの初めて！」

「竜って怖くて恐ろしいものなんだよね。本当はもっと怖いの？」

「ねぇ、火を吹いてよ、火。それから僕、一緒に空を飛んでみたい！竜は空に手が届くんだよね」

僕は一瞬ひやっとしたが、意外なことにカンザーは特に気にしている様子もなくその遊び相手になっている。子供たちの要望に答えて頭に乗せてあげたり、空に向かって火を吹いて見せたりと、なんだが上機嫌だ。

カンザーから少し離れたところでは、親であろうか、大人たちが対照的に心配そうな顔をしてそれを見ている。僕は急いで起き上がると、青い竜のところへ向かった。

「カンザー、なんかみんな心配してるみたいだしさ・・・。あんましそういうことはやんないほうがいいんじゃない？」

「分かっている。だが例えば、彼らが私から目を離せば、彼らはこの荒野を見ることになるだろう」

そう言いながらも、カンザーは近くに来た子供に口を開けて見せた。そうか。カンザーだってこの子供たちが嘆くところを見たくないんだ。彼は姿に合わずずっとやさしいんだ。

「・・・貴兄と会ったときの心の鼓動ばかりが聞こえる。永遠は無理だが、目を逸らせる手段を、私に作らせてくれ」

なんだろうか。カンザー、前よりも、やっぱり少し変わった？僕はきらきら輝く青色の宝石を見つめながら、なんとなく感じた。

僕は穏やかな思いに包まれながら頷いた。
もうほとんど消えた焚き火の傍にいたのは僕だけだった。すでに騎士団の人たちは街の掃除作業や食事や物資の手配、警備などで走り回っていて、僕が思ったよりもずっと街は活気だっていた。いや、妙に明るい。まるで上塗りされた白のように。自然の活気ではないような気がしてならないのは、僕の思いと雰囲気がずれているからだろうか。
僕は手伝えることはないか、そしてジンは今どころにいるのか聞こうと歩き回っていた時、僕は不意に、何か暗い闇のようなかじかむ感覚に見舞われた。気温はそれわど低くない。太陽から降り注ぐ熱を肌でよく感じることができる。それなのに、僕はまるで極地に裸で突っ立っているかのような衝撃だ。
それは僕が今立っている通りのさらに向こうから流れてきていると感じた。正直いますぐにそこから離れたい。なのに、僕の足は自然とそちらに向いていた。その冷気の中に、かすかな何かが染み込んでいる気がする。それが気になったからなのかもしれない。
太陽の陰る裏路地に勇気を出して入り、ゆっくりとだが確実にその”気配”に近づいてゆく。それとともに僕の不安は掻き立てられるばかり。すぐ隣にカンザーがいてくれたらと強く感じた。
裏通りを抜け、広い通りに出た。ここは木造の建物が多く存在するエリアらしく、見た目のひどさが際立っていた。いまだ残り火からか黒く炭化した残骸から煙がくすぶっており、緩やかな風とともに空に舞い上がっている。
僕を引き寄せたそれは、その残骸の下にあるようだった。今にも崩れそうな木材をなんとか上り、感覚の導くままに柱を持ち上げ、潰れたタンスをおしやり、まだ熱の残るすすや残骸を蹴り払って、やっとそれを見つけた。
それは、訓練の時にジンと決闘をし、そして夜、僕を襲ったあのティランさんの剣だった。青白い剣はまるでゴミのようにすすだらけで、残骸の一部と化そうとしていた。竜玉はあの時のように透き

通った青ではなく、真っ黒く変色してしまっている。その暗闇の深さこそ、僕が感じていたものだったのか。
僕はすぐ近くの瓦礫を押しやりながらティランさんの姿を探した。しかし、しばらく探しても、人一人を探し出すことはできなかった。そもそも、瓦礫の中には幾人もの死体が埋まっていたのだ。
僕は剣のところに戻り、ティランさんがどこにいるのか知ろう思った。だが竜玉に触れようと伸ばした手が、寸前のところで止まった。体が棒のように固まる。泥沼に沈むかのような圧迫感を感じて、僕は手を離した。
ティランさんは多分正気に戻っているはずだ。ではどこにいるのだろうか。こんなところにティランさんの剣があるのだろう？なぜこんな状態になってしまったのだろうか。
僕は鞘のない剣を持ち上げ何とか拾い上げた。非常に重い。金属の重さだけでなく、何かとてつもない重さが加わっている気がした。力を振り絞って瓦礫から抜けだし、僕はそれを瓦礫の中にあったカーテンで包んでから、両手で持ち上げて運んだ。
僕は近くにいた二人の騎士たちに剣を見せた。彼らは布を開いてそれを見た瞬間、なぜか一瞬怯え、その後神妙な顔になって、布の再び巻いてから受け取った。
「ティランさんはどこにいるんですか？」
僕の質問は予想されていたようだった。騎士たちは手に力をこめ、やがて肩を落とし、ゆっくり息を吐いてから、静かに言った。
「ティラン一闘士は、戦死しました」
「」

時の街ー６（後書き）

お疲れ様でした

時の街－７（前書き）

書きたい時に書くのが私のジャスティス

１１０４０６－修正

時の街－7

僕の行動は、最善だったんだろうか。大切な人を亡くした痛み。変わってしまった自分への恐怖。数々の傷跡。僕はその痛みを知っている。僕のいた村だってそうだったのだから。
震えるほどの不安が僕を襲う。僕はこの街に深く関わり、どのような道のりがあったにしろ、その行動の結果が今この瞬間なんだ。これからこの街の人たちはどうなるのだろう？対立？暴動？これだけの痛みを受けてなお、これからさらなる問題が広がっていくことは、容易に想像できた。
ずっしりと、重い。僕の心にのしかかる暗い何かが、僕の手を、足をすくませ、震わせた。現実から目を覆いたくなる。この街から、すぐにでも立ち去りたかった。それで僕の責任も不安も決して拭えないとわかっていたとしても――――。
フェンさんが、僕を呼び止めた。
「――――フィード！」
僕がびっくりして振り返ると、フェンさんは僕と同じようにびっくりしていた。あれだけの怪我をしたというのに、いまだしっかりと仕事をこなしているのに驚いたのだ。
ここはカンザーのいる広場へと向かう道の途中のようだった。
「どうしたんだ。さっきから何度も呼んでいたんだぞ」
「す、すみません。ぼーっとしてました・・・」
フェンさんは僕の顔を見るなり、真顔になって、そして僕に目線の高さを合わせるようにしゃがんだ。
「フィード、気持ちが沈むのも分かる。大抵の騎士は、死線を潜り抜けたり仲間が死んでしまったあと、そんなふうに心が沈んでしまう。そうやって『ツブ』れた奴らを俺は何人も見てきた」
フェンさんは一度下に目線を外し、ゆっくり息を吐いた。
「だけど、気をしっかり持つんだ。いたたまれなくなったら叫べば

いい。泣けばいいんだ。足掻いて目を背けずに、自分の体験したことを握りしめていくしかないんだよ」
強い意志を持った目が、僕の心にしっかりと語りかけてきていた。そしてその意味を理解した途端、まるで気がつかなかった僕の心の留め具は外れ――いろいろな感情がごちゃごちゃになって、意味がわからなかった。僕の瞳は涙でいっぱいになり、あふれ出そうになったが、僕はそれを必死で抑えつけ、手で涙を擦り取った。
「――大丈夫です。僕はまだやれます」
僕はカンザーに絶望の淵から救ってもらった。だから僕がまたダメになっても、きっと彼がなんとかしてくれる。僕にはまだ、心の支えがあることを、しっかりと認識した。
そんな心境が顔に出てたのか、フェンさんは小さく頷き、そして呟いた。
「君は強いな――私も折れずに頑張らなければ」

フェンさんが僕を呼び止めたのは、バルシュタット隊長が僕に用事があることを伝えるためだった。僕がフェンさんに連れられて来たのは、元駐在所があった場所。木製の建物はほとんどが燃え尽き、黒い炭と化していた。それでも燃え残った建物に布を斜めに伸ばし、広めのテントとして作られた仮設所には、職種問わず多くの人が出入りしているようだった。
煤けた匂いが残るテントの中は医療品や武具、その他駐在所で燃え残ったあらゆる荷物が無作為に所狭しと並んでおり、人々が作業に追われていた。
その一番奥には、端が少しだけ炭化している机が置かれており、そこでバルシュタット隊長がじっと机に置かれた書類や図を睨んでいる。流石にこの大怪我では鎧は着られないためか、鎧ではなく何かの正装のようなものを着ていた。右腕以外の包帯は見た目ではわからないが、この人も大分無理をしていることはよくわかる。
「隊長、フィードを連れてきました」

「ご苦労、君はすぐ作業に戻れ」
目を離さず命令するバルシュタット隊長に、フェンさんはすぐに肯定し、テントを出て行った。
「すまない。こんな時だというのに」
「あ、いえ。大丈夫です」
出て行ったフェンさんを目で追ってると、バルシュタット隊長も出ていく彼を見て嘆息した。
「多少怪我をしていても、今は奴に仕事をさせるのが一番なのだ。ああ見えて、もうかなり追いつめられておるからな。今は動いて気を紛らわせる時間が必要だ」
　そうか。僕に言っていたあの言葉は、もしかしてフェンさん本人が自分に言い聞かせるための言葉でもあったのかもしれない。
「さて、こちらの話をしよう」
僕が机に目を落とすと、広げているのは地図だった。それは前に見かけたような周辺地図ではなく、もっと広域の、セオが前にくれた地図に似ていた。
隊長は僕と自分の分のコップを取り出し、僕に水を手渡した。
「こんな非常時に難なのだが――――いや、この非常時だからこそ、君に頼みたいことがあるのだ」
「なんでしょうか？」
突然の物言いに、僕は少し戸惑った。僕としては、人にものを頼むよりは命令する印象のほうが強かったため、頼みというのは少し違和感を覚えた。
「君は、昨日の幻獣についてどう思う？」
「どうって言われましても、僕は幻獣には詳しくないですから・・・」
　僕の困り顔に、隊長は苦笑いで答えた。
「騎士たる我らだ。敵となる幻獣については誰よりも多く知識を持っているつもりだ。だがそれでも、昨日の幻獣についてはまったくもって不明だった。」

隊長はため息をつき、水を一口飲む。僕もつられて水を飲んだ。気づいていなかったが喉はからからだったようで、おいしく感じた。
「街の対幻効果が効かない。目に見えない。人を操る、変貌させる。どれをとっても異質だ。そう、まるで幻獣でなく魔法のような・・・」
「魔法？」
「そうだ。君が首謀だとは私は思っていないが、フェンの言っていたことも当たらずとも遠からずかもしれない。つまりこの襲撃は、人間が何かしらの意図をもって仕組んだものなのではないか、とね」
僕は驚きで目が丸になった。
「そんな！こんなひどいこと、誰がやったのです！？」
「いや、これはあくまでも予測にすぎない。我々はあまりにも情報が不足しすぎている。他の街でも同じことが起きているのか、この街で再び発生するのか。それさえも理解できないのだ」
そう言うと、バルシュタット隊長は机の上に置いてあった一通の手紙を、僕に差し出した。受け取って見てみると、表には隊長の名前とサイン、それから証明印が押されている。裏返すと、魔法都市ミーミスブルン常駐騎士団団長ジーク＝ナイト宛と書かれている。
「これは・・・」
「それが今回の頼みなのだ。君の次の目的地は、鳥の城ウィンドフォウル、でよかったかな？」
「え、はい。多分そこへ向かうことになると思います」
すると、隊長は左手で地図を指差した。
「ここがベルタウンだ。ここから風下方向に進んだ先にあるのが、鳥の城ウィンドフォウルだ」
銀の槍を中心に回る風、それに沿ってずいぶん離れた風下の位置に、その表記はあった。
「そしてベルタウンと鳥の城の間にあるのが、魔法都市ミーミスブルンだ。」
隊長の指が動く。

「その手紙には、私の署名と、この街に起きた出来事や、幻獣の特徴などが細かく書かれている。それをこの魔法都市ミーミスブルンにいるジーク団長に届けてほしいのだ。ミーミスブルンは、その名の通り魔法の研究が大変進んでいる場所だ。そこならこの街で起きた出来事について何かわかるかもしれないし、あるいは獣と化した者たちを戻す術もあるかもしれない」

獣と化した者を戻す術・・・それはもしかしたら、カンザーを人に戻すこともできるかもしれないということ・・・？僕ははっとした。

「鳥の城の途中にある魔法都市ミーミスブルンに寄って、手紙を届ければいいのですね？」

「そうだ。これは急を要する。馬よりなにより、竜の羽のほうが何倍も速く到着するのでな」

そういいながら、隊長はベルタウンとミーミスブルンの間を分断する、黒い線を示した。

「ここは闇暗の渓谷。触れたものを波紋一つ発さずに溶かしてしまう黒の酸液で満たされた谷だ。我々がミーミスブルンへと向かう場合、この渓谷が邪魔をするために、渓谷を大回りで回避する必要がある」

指が黒い線を避けて進む。

「しかし、竜なら別だ。竜ならこの渓谷をまっすぐに抜けることができる」

指が黒い線を突き抜け、ミーミスブルンへと達した。

「どうだろう。引き受けてはくれないか？」

僕一人で決めるのもどうかとは思った。けどカンザーならきっと快く認めてくれるだろう。どちらにしろ、途中の街ならば立ち寄ることは間違いないのだ。僕は重い役割を受けることをひしひしと感じながら答えた。

「分かりました。届けます」

バルシュタット隊長は、そこで目を輝かせて笑った。ああ、ジン

そっくりの笑顔だ。
「ありがとう」

時の街－７（後書き）

お疲れ様でした。

時の街－8（前書き）

長かったこの街も終わりですね。例のごとく投稿後に添削を行います。

時の街ー8

「なるほど、それでこうなったわけか」
カンザーは不機嫌そうに僕に答えた。もちろん『不機嫌』というのは僕の想像だけど。
バルシュタット隊長の指示は早かった。僕がテントを出てまっすぐにカンザーの元に向かったというのに、それよりも早く伝令は伝わり、僕が中央広場に来たときにはカンザーの回りで、僕らの旅の準備が騎士たちの手で行われているところだった。事情を知らないカンザーはその中心で黙って寝転んでいたわけだ。
「勝手に予定を決めてしまってごめんカンザー。」
「いや、私の示陸士よ。急を要することだったのだろう。貴兄が進みたいと願うのならば、私の羽はそこへ向くだろう」
「ありがとうカンザー」
そう言って笑いかける僕に、カンザーは深いため息で答えた。
それにしても、こうやって旅の準備をしてもらうのは二度目だ。流石に気が引けるので、僕も準備のほうを手伝うことにした。
荷物は、ひと月分はありそうな携帯食料と水。薄手のコートから厚手の防寒着まで全季節に対応した衣類。仮設駐在所で使っていたテントになるとても広い布など、子供の村テフヌトで用意してもらった荷物も合わせればかなりの量だ。流石にこれだけの量を載せることはできないと僕が言うと、騎士の人たちは笑った。
「馬に人間とこの荷物両方載せて走れるんだよ。まぁ見てなさい」
そう言って荷物に手を付けると、驚くべきことにあれだけ大量に広がっていた荷物はあっという間に背嚢に圧縮されてしまった。聞いてみると、僕の荷物を準備してくれたのは騎士団の中でも順次別の街へと移動してゆく非常駐隊で、彼らは旅をするうえでどのように荷物を持ち合わせるかについてとても詳しかった。
「本当ならば私たちが魔法都市に向かうべきなのだが、今この街は

人手不足なのだ。君たちに託すしかないと思うと、悔やまれるよ」
これほど屈強な彼らに、いや、僕はこの街の人たちに託されたんだ。この街の存亡にも関わる大事に。僕は感じる責任に声が出ず、ただ頷くしかなかった。
「我らが受けたのだ。これ以上確実に届く文もあるまい」
答えられない僕の代わりにカンザーがそう答えると、騎士は肩を落として頷き、準備を進め始めた。
そうやって、荷物の管理法や旅の諸注意を聞きながら、夕方ごろにはほとんどの準備が終わってしまった。僕としては、まだジンのことなどが心配で、今すぐ街を離れるということは少し後悔していたけど、そうも言っていられないことも分かっていた。誰も言わないけれど、カンザーがここに居続けることも、神経質になっている今のこの人たちにはよくないことだろう。
僕の噂を聞きつけてか人々が集まり始める頃、バルシュタットさんがやってきた。夕日に照らされた顔のしわの影が、この襲撃のすべてを語っているような、そんな感じがした。
「準備のほうはいいかね」
「はい、大丈夫です。こんなにいろいろ準備してもらって、ありがとうございます」
「いや、君には生きてもらわねばならないのでな。当然のことだよ」
そこでバルシュタットさんが一瞬だけ僕から目線をカンザーに移し、そして僕に聞いた。
「もう一つだけ頼みたいことがあるのだ、聞いてくれるかね？」
ずいぶん緊張した面持ちだ。僕は少し身構えながらも肯定すると、バルシュタットさんは目で部下に合図した。
集まっている人たちからざわめきが聞こえる。その方向を向くと、人々を割って彼は連れられて来た。
二人の騎士に両腕を抱えられながらもやってきたのは、なんとジンだった。見た目はよれよれで、とても一人で歩けているようには見えない。目線は誰を映しているでもないようだ。

「こいつも君と一緒に連れて行ってもらいたいのだ」
バルシュタットさんの突然の物言いに、『えっ』という驚愕の声を、僕とジン、同時に発した。
「君を信頼していないわけではない。だが、君ひとりで行くよりは、騎士団のだれか一人を連れて行ったほうが信用もあるだろう」
「い・・・いやだ！俺は行きたくなんてない！！」
ジンは突然暴れだし、逃れようとするがどうにもならない。
「俺は・・・俺はもう誰にも関わりたくない。もういやだ、やめてくれ。いっそのこと――――俺を、俺を殺してくれ！」
僕は、ここまで人は変わってしまうのか、という悲しみと、今の暴れる姿に対する恐怖を感じられずにはいられなかった。
僕はその時、もう一つ嫌な予感を感じた。はっとして横を向くと、カンザーが赤い眼をして怒りの形相をしている・・・まずい。
「ジン、あれは君のせいなんかじゃないんだ。それに、今はつらくてもきっと乗り越えていける。僕だってまだ乗り越える最中だけど――――だからそんなこと言わずに頑張ろうよ」
それは、表面的に言っているわけではなかった。僕だって、乗り越えられたものなのだから。
「うるさい、お前らの知り合いだって家族だって、俺が殺したんだぞ！心の底では死ねって言っているんだろ。だったら早く俺を殺せよ。もうこんな記憶たくさんだ」
ジンは僕の言葉なんか聞いてもいないようで、鬼のような形相で叫びわめいた。
「汝よ」
カンザーが、低く、ゆっくりと口を開いた。それだけで、ジン以外のすべての人のざわめきが、さっとおさまってゆく。あまり表情の入っていない声だが、なぜか空気がピリッと緊張して、それが伝導してゆく。
「汝は自らの生をなげうってその存在を現世から消し去りたいというのだな？」

「ああ、そうだよ！今すぐにでも――――」
「ならば、今すぐにでもお前を殺してやろう」
僕の静止の声を聞く前に、カンザーはジンの首根っこにものすごい勢いで噛みつき、そのまま翼を羽ばたかせて舞い上がった。
「だめだカンザー！」
吹き降ろす突風に人々や荷物は押し倒され、僕の叫びは多くの悲鳴や鳴き声でかき消された。
カンザーは、一滴の血も残さずに、一瞬でジンを空へと連れ去ってしまった。

轟々とした音が、辺りを包んでいた。ものすごい風が、俺の体を突き抜けてゆき、着ている白服が音を立ててなびいて体を叩いている。
ゆっくりと目を開けると、住み慣れたベルタウンの街並みが、まるでミニチュアのように小さく見え、その周りに広がる広大な平原にちょこんと乗っかっているように見えた。
「ここは空の上、遥か世界すべてを見下ろせる絶対な自由の域だ」
首元がぎざぎざしたものに挟まれて痛いが、怪我はしていないようだ。その声の主は、このぎざぎざした存在・・・つまり、竜か。そういえば、一瞬前まで竜と話していたっけ？あれは幻覚じゃなかったのか。
「俺を、殺すつもりじゃないのか」
「無論、殺すつもりだ」
俺は雲を突き抜け、すでに眼下に雲が広がる世界へとやってきてしまっていた。気温はどんどん下がり、肌寒いどころではない。ひどい耳鳴りと頭痛がしてくる。
だが、そんなこと気にならないほどに、空は美しかった。空の上はここまで浄化された世界だったのか。俺の住む街はあまりにも小さかった。世界はこんなにも広かったのか。いや、あの空と地面の境目の向こうには、まだまだここよりずっと広い世界が広がってい

るに違いない。
「礼は聞かぬぞ少年よ。この世界で死ねることを光栄に思うがいい」
その言葉とともに俺は前触れもなく天空に投げ出された。空を飛ぶ竜との距離はあっという間に離れてゆき、ものすごい風を下から受けた。
そこに重力というものはなかった。それはたしかに落ちてはいるのだろうが、それを確認する対象が存在しない。俺は今、空を飛んでいるような錯覚を覚えた。
そこには何もなかった。俺の住む街も、人も、剣も、何もなかった。あるのは———そう、世界だけだ。俺は今、世界を体いっぱいで受け止めているんだ。
そして次の瞬間、俺は死を予感した。はるかなる天空からの墜落。まるでどこかの神話に出てくる存在みたいに、あと数分もすればあの平らな地に落ちるのだろう。
そうすれば死ねるのか・・・。でも俺は死んだらどこへ行くんだろう。きっとあれほどの人を殺したのだから地獄なのだろうな。
俺は、昨日の夜のことを思い出した。だけど、今はどうだろうか。倉庫の中にいたときはあんなに怖かったのに、今は普通の記憶として、しっかりと思い出すことができる。たしかに恐ろしいことではあったけど、今の自分なら、なぜかそれをしっかりと受け止めることができた。それが自分が経験した事実なのだと、強く。
そして、そのあとに思い出されたのは、父の姿。物心ついた時から、俺の父親はあの人一人だった。今時じゃ捨て子なんてそう珍しくもないのに、父さんは俺をすぐに拾ってくれたっけ。育ててもらったこと、今までは当然のことだったのに、今はすごく大変なことだったんだって分かる。お礼も言えずに死ぬのか、俺。
俺と共に進んだ、騎士団の面々、厳しかったけど笑いかけてくれた街の人々、俺の剣となった知竜。
ああ、俺はなんて狭い世界で生きていて、なんて狭いことで挫けてたんだろう。それをこんな死ぬ間際に理解するなんて、遅すぎた。

地面が近づいてくる。雲を突き抜け、俺は地に還るだろう。地に帰ったら、もう晩飯は何なんだろうかとか、そういうのも考えられないんだ。くそ、なんて損なんだ。

刻々と無情に近づいてくる地面に、自然と涙が溢れてきたけど、これは悔しさからだろう。いや、あまりの強風に目が痛いからに違いない。うん、そういうことにしておこう――――

俺が必至に目をぬぐっていると、その空の向こうで青い何かがにじんで見えた。

それは落ち続ける俺の速度よりもそれよりも早く落ちてきた。いや、もちろんそれはものすごい衝撃を発しながら飛んでいたのだ。

羽を広げた空の覇王は、俺の横にぴたりと横付けると、蒼い瞳でじっと俺を睨んだ。それだけで俺は分かった。俺にまだ問うているということに。俺に迷いなんてもうなかった。

「俺は生きたい！」

その言葉ににやりとしたかのように竜は口を開くと、少し減速しながらくるりと体を反転させ、俺の来ていたシャツの襟首を器用に掴み取った。

青い草原で塗られた地面はすぐそこだった。竜はおもいっきり襟首をひっぱり、俺はそれで窒息死なんていう残念な死に方を経験するところだった。

俺の感覚ではもう減速は間に合わないと感じたのだが、さすがに竜の目測は完璧のようで、俺が地面に達するころには、草原の葉は円状になびき、俺は無事に空から帰還したのだった。

正直、あの騒ぎの中だって、カンザーは僕の声をしっかりと聴き分けていたはずだ。

だからこそ不安になった。不安にはなったけど、俺はその不安を振り払った。俺はカンザーを信じているんだ。だから、あの死の谷みたいな失敗はしない。カンザーならきっと、何か考えがあってジンを連れて行ったに違いない。

「バルシュタットさん、大丈夫です。彼は無事に帰ってきますよ」
僕は、周りのだれよりも険しい表情をして空を仰いでいたバルシュタットさんに、冷静に話しかけた。
「――君には分かるのかね」
「はい、分かります。だから安心してください」
僕は、その怪訝な表情の奥にある想いを感じ取っていた。一番心配しているのはやはりこの人なのだ。
僕がそんな確信に似た表情をしていたのか、僕の顔をしばらく見たバルシュタットさんは小さく頷き、部下や人々に大声で話しだす。
「皆、ジンは大丈夫だ。これは竜の試練なのだよ。心配せずに、今は乗り越えられることを祈ろう」
その言葉に部下はすぐに納得いてゆき、やがてその空気は人々に広がっていった。
「見ろよ！あれ」
騎士団の誰かが叫ぶ。その言葉に空を見ると、カンザーが空をほぼ垂直に舞い降りているのが見えた。でもジンの姿が見えない・・・。よく目を凝らすと、なんとジンがカンザーのさらに下で落下しているのが見えた。僕とぞっとした。
街の外に落ちる。その言葉で、騎士団と僕はすぐに城門へと走り出した。数人は街の人が外に出ないように止めるよう回る。
バルシュタット隊長が一番に大門に到着すると、剣を引き抜いて扉を叩く。大門が内側にゆっくり開いてゆくのを、自力ではなんの足しにもならないのに、両手でこじ開け、外に飛び出していった。
僕が息をあげながら城門に到着した時には、そこは人でごったがえしていた。
人々の間を押し進み、必死でバリケードを作っている門番の騎士の人に通してもらって外に出ると、門の内側のあの騒がしさなど嘘のように、そこは静まり返っていた。いや、それは何事もない自然な状態だったけれど、僕の耳が街の活気に慣れていたからだろう。
平原をさらさらと風が流れ、僕の鼻に、甘い草の匂いを運ぶ。数

日ぶりの、文明物もない、人間も存在しない世界は、不思議な新鮮さを持っていた。
僕がカンザーを遠目で見つけた時、二人はちょうど空から降りるところで、地面に降り立ったジンは、バルシュタットさんと何かを話しているようだった。
カンザーはすでに僕の存在に気付いているようで、じっとこちらを見ている。僕はまずどう怒ろうかずっと考えながら歩いていたけど、あの様子じゃあ反省しているだろうと思った。だから、着陸地に着いた時に「すまなかった、貴兄よ」というその一言で許すことにした。なぜなら、ジンの背中はびんと張り、目線もしっかりとして、まるで数分前とは全くの別人だったからだ。
「フィード、ごめん。俺くよくよしすぎてた」
「いや、いいんだ。それより、大丈夫だった？本当に無事でよかったよ」
ジンの苦笑いに、僕は大体察した。無事と呼ぶにはすれすれの状態だったようだ。
「隊長から聞いたよ。こいつ、お前の相棒なのか。すげぇ奴だったんだな」
そういいながらカンザーの首を馬に触れるかのように撫でるジン。
「うん、とはいってもまだ駆け出しで・・・そうだ」
「ああ、分かってる。お前と一緒に行けっていう話だよな。俺も行くよ」
ジンはふと空を仰いで、地平線をじっと眺めていた。

時の街－8（後書き）

お疲れ様でした。

闇暗の渓谷（前書き）

０３－添削済み

闇暗の渓谷

闇暗の渓谷

ベルタウンを出て二日。僕は空飛ぶカンザーの背中で凍えていた。ひどく寒い。この寒さは気温のせいなのだろうか。いや、気温以外に寒さを感じる要因など存在しないはずだが、僕はそれ以外の何か別の寒さを感じているような気がした。凍えすぎると手の感覚がなくなって自分の手がそこにあるか分からなくなってしまうような、そんな感覚だ。だから、不意に自分の手を見て確認してしまう。僕の両手はまだあるということを。

「貴兄よ。降りるぞ」

カンザーは突然そういい、一気に高度を落とした。

すぐ下を漆黒の騎士を乗せた一頭の馬が走っていた。時の街からの使者である最年少騎士、ジーンだ。彼は僕らよりも外の世界に徘徊する存在、幻獣について詳しかったので、僕らにとって心強い存在だ。

僕はカンザーに二人乗りしたほうが絶対に早く着くと主張したのだが、ジンはそれを拒んだ。いくらなんでも二人分の荷物と、鎧を着た人間を一頭の竜に乗せるのは難しいというのだ。

カンザーはそれでも運ぶことは可能だと答えたが、いろいろな考案の末、多少遅くなろうとも、闇暗の渓谷を竜の羽で運べば、時間短縮することには変わりないということ。さらに前回の通り、何もない外から人が突然現れては街の衛兵も混乱するし、ベルタウンからの使者だということも信じてはもらえないだろうという結論に達した。

というわけで、カンザーには最低速度ぎりぎりを飛んでもらうことになったのだが、どちらにしろこの寒さでは今以上に速度をあげ

たら凍死してしまいそうだ。
地面がぐっと近づき、空が狭まる。まるで巨大な壁に、自分らは吸い込まれているのではないかという錯覚をなぜか覚えた。
カンザーはジンの馬の進行上に着地する。吹き上げる真っ白い砂埃の向こうで、ジンが減速しながら近づいてくるのが見えた。
僕はすぐに留め具を外し、固い地面に降りる。あれだけ青々としていた平原はすでになく、僕らは灰色の一枚岩の上にいた。まるで巨人が岩を荒々しく削った後のように、継ぎ目のない粗めの表面がいつまでも地面を覆っている。これが自然につくられたものなのだろうか。
この世界はほんの少し移動するだけで全く違う一面を僕らに見せつける。僕はこれからもこの異質さについていけるだろうか、不安になった。
僕がそう辺りを見回している間に、ジンは僕の横で馬を止めた。ジンも今の僕のように肌寒そうに体を震わせている。
「こりゃあ、流石に竜の鎧でもきついぜ。繋ぎの金属部が触れるだけで凍傷になりそうだ」
僕もたまらず手袋を取り、手を口に当てハーッと息を吐き出す。ところが、肺から吐き出したはずの暖かな息は全く暖かくなかった。それどころか、この気温だというのに吐いた息が白くなることもない。体温はたしかにあるはずなのに、その証拠が何一つなかった。
なんだか違和感がぬぐえない。空を見上げても、たしかに空は青いには青いのだが、いつもの空と違うような――――
「この先、谷に近づくにつれてもっとひどくなるらしいぜ」
少し疲れたようなその言葉に、僕は振り返った。
「ひどくなる？それって寒さのこと？」
「寒さもそうだが、色だよ。自分の鎧とか、よく見てみろよ。そんなに色あせてたものだったか？」
僕は自分の鎧をまじまじと見てみる。たしかにそんな気はするが、それは薄暗いからではないのか――――いや、薄暗いはずはない。太

陽は出ているし、日光も当たっている。これが違和感の正体なのだろうか？いや、僕には彩色以外にも、何かが足りなくなっているような気がした。
「そんな気はするけど――――」
僕は曖昧にかえした。
「まぁ、俺たちに限ったことじゃないからな。太陽の色も、空も、竜の鱗さえ、ゆっくりと色を失っている」
「色を失うと、どうなるの？」
「さぁな。俺も詳しくは知らないよ。命に別状はないし、ここを過ぎればもとに戻るってよ」
ジンは苦笑いをしながら肩をすくめた。本当のところはよく分かってない、お手上げだと目が言っている。
「とにかく、今は急ごう。少し休憩したらすぐに出発しないと。太陽があるうちにここを通過しないと、凍えた夜はかなりきついからな」
この世界のまま夜を迎えるということを想像するだけでぞっとした。これだけ寒ければ、普通は雪が降ったり、地面が凍りついたりする。少なくとも僕の今までの経験ではそうだった。だけど全くその気配がない。空気はからっと乾燥し、地面の岩にも全く水気はない。
「世界が薄まっている。ここは存在の傷口かもしれない」
カンザーがため息まじりにそう答えた。
「――――そうだね。ぼくもそんな感じがするよ」
カンザーの言葉には頷くしかない。何もかもが、消え入りそうな場所だ。早くここから進みたい衝動に駆られた。薄まってるのは世界だけじゃなく、僕らの存在そのものも、消え入り始めている気がしたからだ。
谷への距離はそれほどなかった。だがその間に世界は急激に色を失ってゆき、やっと谷が見え始めたころには全ての彩色は完全にな

くなっていた。あの竜月色に輝いていたカンザーの鱗も、皮のつなぎも、持ってきた果物の色も、白と黒の比率によってのみ表現させるモノクロと化し、そこには現実感などまるでなかった。匂いも全くない。僕らがそこにいるという事実がちょこんと上に乗った絵のように感じた。

空と呼んでいたその広がりは、白い丸が描かれているだけで、それが普段のように僕らに温かみを与えることはない。灰色の地面はきっとどんな色をしていてもここでは意味がない故に灰色なのだと思った。

影だけは今までと同じ法則に従って太陽と真逆に伸びるが、黒く塗りつぶされるということ以外の意味を見出すことができなかった。

そんな幻のような世界にある闇暗の渓谷は、液体が流れる谷という僕の想像とは全く違っていた。遠目では、灰色の大地がある線を堺に突然なんの塗り残しもムラもなく、真っ黒に塗られたかのように見えた。だが僕はそれは錯覚だと思った。今までの常識からして、そんな場所があるはずがない。僕は近づけばそれの正体が分かるだろうと思っていた。

だけど、僕らが闇暗の渓谷の端と呼ばれるその境界に到着しても、僕には結局その正体がわからなかった。

それは渓谷と呼べるのか疑問に思えるものだった。遠目で見た錯覚そのままに、今まで単調に続いていた灰色の地盤は前触れもなく途切れ、誰かがここで地面を割ったのではないかと感じるほどに、そのまま９０度の崖となっている。

そのはるか下は、真っ黒だった。真っ暗なわけではない。黒い何かがのっぺりとただ広がっているだけで、それがただひたすら地平線まで続いていた。

「これが、闇暗の渓谷―――まるで漆黒の海だ・・・」

「噂には聞いてたが、とんでもねえ場所だな・・・」

僕らが発することができたのはそれだけで、あとは何も言えなかった。大地がその場で引き裂かれている光景は、率直に言って絶望

感しか感じない。しかしカンザーは何とも思ってないのか、平然と首を伸ばして下を覗いている。カンザーの爪が削った崖の端がカラリと割れて下に落ちたが、破片がその黒い面に触れても音を発することもなければ、液体のように波面を発することもない。なんのリアクションもなかった。

「ここは、世界の終端だな」

カンザーはこちらを見ることなく、下を覗いたまま呟いた。

「まるで、ね。これを見てると自信がないけど、谷なんだよねこれ・・・」

「ここからは向こう岸が見えないが、地平線の向こうにはあるはずだ」

ジンは自信なさげに嘆いた。だがやがて気を取り直して、馬の荷物に手を伸ばした。

「まずフィードと荷物を向こう岸に運んで、もう一往復で馬と俺を運んでほしい。頼めるか」

「無論だ」

カンザーは谷の観察をやめ、ゆっくりと頷いた。僕らはすぐに荷物を積み始める。こんな場所早く立ち去りたいと、二人は無言で了承していた。

ジンは黙々と荷を移す作業に没頭している。街を出ることを決意したジンだけど、まだ前のような明るさは感じられず、事件の影が色濃く残っている。だがジンへの励ましの言葉が全く見つからない。僕もあれを体験したのだ。何を言っても今は無駄であると何となく分かっていた。だからせめて普通に接していこうと思う。多分だけど、ジンも分かっているだろう。

馬に積んであった分の荷物をカンザーに乗せ、再びカンザーに乗って改めて地平線を眺めるが、このまま対岸がなかったらと思うと身が震えた。

「本当にあの向こうに陸地があるのかな・・・」

「あるにきまってる。幅が広いから今は見えないだけだって」

僕はその励ましに勇気づけられた。
「降りる地がなくばもどってくればよいのだ、貴兄よ」
「うん、分かってるけどさ」
僕は初めてカンザーと飛び立つかのようにしっかりとハーネスを握りしめた。
「いくぞ」
僕が首を縦に振るのを確認すると、カンザーはふっと崖を飛び下りた。
あっという間に陸地から離れる。それにと共に風の音も小さくなっていった。カンザーの羽が発する甲高い小さな音以外、何も聞こえないし、何も感じない。風の圧力さえ、いまはないように思えた。僕らは今、静かな漆黒の水面の上をゆっくりと滑っているようだった。
水面から大体2身くらいの低空を飛んでいるために、下がよく見える。こんな速度で飛んでいるにも関わらず僕らの姿が歪みも滲みもなく綺麗に映っていた。表面は全くムラがないのだろう。
やがて出発した陸地は地平へと隠れ、僕らは二色の世界に取り残された。本当にカンザーは進んでいるのだろうか。もしかして羽を広げているだけで、僕らはずっとここに止まっているのではないか？そう感じてしまうくらいに、ここには何もなく、ある意味浄化されていた。
「貴兄よ、下だ」
カンザーがじっと、水面に映る僕らを見返している。僕もまじまじと下を覗いた。
「・・・特に何もないようだけど、どうしたの？」
そう言っても、カンザーはじっと水面を睨み続けている。時々口を開けたり首を動かしたりして、反射する姿を確認しているようだ。
「貴兄よ、この向こうにいるのは、我々だ」
「それはそうだよ。反射した僕らじゃないか」
僕は水面に映るそれをじっと観察してみた。何一つ違いはなく、

完全な鏡像であることは間違いない。
「僕らが映っているんだもん。当たり前じゃないか」
「いや、映っているのではない。この下にいるのは、もう一つの我々なのだ」
「もう一つ？ただの光の反射じゃないか」
「光の反射ではない。存在している」
どういうことなのだろうか。つまり、僕らと瓜二つな何かが、この下にいるということなのか？
「でも、もしそうだとしてもおかしいよ。もしそうなら、左右逆さまじゃないか」
「そうだ。そして、裏側の我々から見た我々も、表裏逆の存在だ」
カンザーのいうことが本当だとしたらどういうことなのだろうか。僕らの裏の存在はこの裏側で僕と同じ生活をして、同じようにカンザーに会って、同じように今この瞬間この裏側を飛んでいるということなのか？僕は少し驚いて、もう一度水面を覗いた。向こう側の僕は、僕と全く同じく、少し驚いた表情をして、僕を見つめている。あの僕も今、今の僕のような考えをしているんだろうか。僕は不意に、一つの疑問にぶち当たった。
「じゃあ、どちらが本当の僕なの？」
「その答えは、誰にも答えられないし、見つけることもできないだろう。相反するもの同士が触れれば、互いに消滅する」
裏の僕に触れようと、僕が手を伸ばした時、不意にカンザーの高度が上がった。前を見ると、出発した崖をまるで鏡に映したかのような崖縁が、もう見え始めているところだった。

闇暗の渓谷（後書き）

お疲れ様でした。

闇に閉ざされた剣 一前（前書き）

この話のために、これ以前の話のいくつかが修正されています。
つじつまが合わないと思われる方は修正前に読まれた方だと思いますので
ご了承ください。

闇に閉ざされた剣一前

ああ、またここか。

僕は暗い水面に映った一糸纏いぬ自分を見て、無感情にそう思った。

僕は今まで何をしていたんだろうか。それともこれから、どこかに行く予定だったか。何も思い出せない。僕の持つ剣の切先からでる波紋が、僕の心を表すかのように僕の姿を揺らす。

その波とは違う波紋が目の前から広がり、僕ははっとして目を上げた。

そこに立っていたのは、ティランさんだった。僕は咄嗟に声をかけようとしたが、前と同じように言葉は出て来なかった。でも、僕の言おうとしてることは分かったに違いない。ティランさんは静かに薄笑いを示す。

ティランさんの後ろに、いつの間にか多勢の人が立っていることに気づいた。疎らではあるがすぐ近くから水平線の彼方まで、皆一様にあの立方体の何かにむかって、みな僕に背を向けゆっくりと進んでいる。彼は誰だろう。一体どこに向かっている？

ティランさんの筋肉質な腕が上がり、僕を指さす。そしてゆっくりと、その指は僕の持っている剣に向けられた。

僕は初めてしっかりと、その剣を意識した。それは僕自身の一部でありながら、僕が知らないものだ。だが、初めからそうだったのか、それともいつの間にかそうなったのかは分からないが、今の僕にはそれが何か分かった。

ティランさんの斬幻剣だ。この世界で唯一色を持った存在。色あせてはいるが、この世界では唯一、優美なものに見える。

ティランさんはとても愛おしそうに、それでいて、何かもの悲しげな表情で見つめていた。とても僕には分からない、とても高貴な絆で、彼らは何かを話しているような気がした。

やがてティランさんは会話を終えたのか、僕に顔を向けた。その目には、なにかやるせない悔しさと、手に負えない悲しさがにじみ出ていた。僕はそれを問いたかった。

ティランの剣を指す指がこんどはゆっくりと、後ろの遥か彼方にある、立方体のほうへと向いた。いつのまにか、周りにいた人たちはいなくなっている。みなあそこに向かったのだろう、と僕は直感的に感じた。

ティランさんがなにか一言、僕に言った気がする。けどそれを捉えることができなかった。彼はゆっくりと僕に背をむけ、皆が向かったその方向へと足を進め始めた。

僕は持つ剣をぎゅっと握り締め、追いかけようとしたけれど、それにティランさんは背を向けたまま首を横に振り、無言の静止を訴え、そして――――

僕は体が地面に着いていないような不思議な感覚に驚き、目を開け体をよじろうとした。だがその命令に体は全く動かない。これが金縛りかと慌てようとした瞬間、地面の感覚がふわりともどり、全ての感覚が正しく戻った。少し肌寒い夜の空気が肺に入ってくる。

僕は少し身悶え、なんの問題もないと確信してから目を開けた。僕の見える範囲全面に無数の星空が瞬き、月のない夜を平穏に照らしている。

僕はいまだに夢ともなんともつかない世界にいるのではないかと感じ、しばらくじっとその空を眺めていた。隙間無く大小輝く星々を見ているうちに、だんだんと気分が落ち着いてきた。

「眠れないのか？」

僕が顔を横に向けると、ジンが僕と同じように油布を被せ、両手を組んで枕にしながら同じように空を眺めていた。

「いや、不思議な夢を見ただけだよ。ジンこそ眠れないの？」

「俺は今晩は眠らない。どうせ寝ても、また悪夢か。俺をたたき起こすからな・・・」

諦めにもとれる様子で、ジンつぶやいた。
しばらく僕らは無言でいたけれど、ふと気づいた。僕はさっきから右手になにを握っているんだろう。油布からゆっくりと右腕を取り出す。それは細長く、重量感のある何かだった。
それを取り出して見た瞬間、ぼくは自分でも驚くくらいな声を上げて驚いた。ジンもそれを見て、目を丸くしている。
それは星空の光をきらきらと浴びて光る、ティランの剣だった。青い刀身はいつみても素晴らしい模様が彫り込まれ、飾のないつばの部分には、あの時と変わらぬ黒いままの竜玉が暗く渦巻いている。
僕はさっと上半身を起こし、その剣を膝の上においた。どう見ても間違いない。拾い出した時とは違ってすすや血糊はしっかりと拭き取られ、まるで新品のように美しく磨きあげられている。
だが荷物の中に剣などなかったし、第一寝る前に剣を持って寝床に入るわけがない。まるで、夢で持っていたものをそのまま持ってきてしまったかのようだ。
困惑したままジンを見ると、彼も状態を起こし、そして僕の持つ剣を神妙な表情で眺めている。それは、この剣を他の騎士に渡すときに見せた表情と同じだった。
「僕、これどうしたんだろう・・・」
ジンはしばらく黙っていたが、やがて息を大きく吸い込んで、言った。
「それは、多分フィード、お前を追ってきたんだ」
「え、僕を？」
「そうだ。お前を新たな主として求めるために。なぁフィード、頼む。その剣を使ってやってほしい」
「え、剣を？剣とか全く振るったことないよ。無理に決まってる」
「いや、頼む。剣術なら俺が教える。それに、それほど上手くなくてもいいんだ。だから、頼む！」
ジンはなぜか必死だった。僕はその様子に困り、剣を眺めた。底が見えないほどの闇が渦巻く竜玉は、僕に何も言っては来ない。だ

がもし、この剣の意志で今ここにやってきたのだとしたら、僕が今断るのは酷だなと思った。
「そこまで言うなら、構わないけど・・・」
「そうか、ありがとう――」
ジンは小さな声で、安堵ともなんとも言いづらい様子で答えた。その様子を、僕は見覚えがある。
「・・・ティランさんも、そんな顔でこの剣を見ていた」
ジンは絶句した。僕は慌てて付け加える。
「いや、さっき見た夢の中での話だよ。僕が持つ剣を見ながら、そんな感じの顔をしていた気がするんだよ」
「夢？夢の中でティランに会ったのか？」
「会ったといえるかは分からないんだけど・・・」
僕は夢の中であったことをジンに話した。ジンは終始無言で剣を凝視していた。
「そうか・・・」
そう言うと、ジンはほんの少しだけ微笑んだ気がしたけど、この星空の光では確証はなかった。
「フィード。その竜玉に手を当てて、持ち主であることを誓ってくれ」
「え、どうやるの？」
「簡単だ。”我、汝の仮の持ち主であることをここに誓う。我が名はフィード、汝の名を示せ”と唱えるだけでいい。仮の持ち主っていうのは、本当の持ち主はティランだからそうなる。それは変えられないからね」
僕はうなづいて、竜玉に手を当てた。その瞬間、竜玉のとてつもない冷たさに全身が震えた。なんだろう、この感覚。僕の内に流れる竜の炎が瞬く間に消え失せ、体中が冷水の中のように凍える。
「我、汝の仮の持ち主であることをここに誓う。我が名はフィード。汝の名を――――示せ」
僕はその瞬間深い深い闇の底に眠る何かが、ゆっくりと頭をもた

げるのを感じた。ものすごい勢いで、僕を竜玉へと連れ込む。僕を引っ張る何かがひっそりと僕を認めると、それは何かを吐きかけた。
それは、氷雪の世界で何も着ずに猛吹雪に呑まれているかのような、そんな衝撃だった。防ぐものが何もない。心がかじかみ、凍傷から血を吹いた。吐いた息を吸うこともできない。吸ってしまえばそれは瞬時に肺を凍らせてしまうだろう。必死にそれに抗う中、そんな世界で声を聞いた。
（――マーウォルス）
僕は真っ白で真っ暗闇なこんなところで倒れてはいけないと思いながらも、とうとう耐え切れず意識を失った。

ひどく大きな唸り声が聞こえる。僕は何かにもたれかかっているようで、その振動は僕の背中から体全体を揺らしていた。
「貴兄があと一刻でも動かねば、お前をこの場で噛み殺してやる」
「おい、大丈夫だって――目を覚ましたぞ」
目を開けようとしたが、太陽が眩しい。片手で太陽を被いながら首を上げた。
見下ろすカンザーがものすごい勢いと形相で僕を認める。と、真上を向いて空に向かって甲高く鳴き、そしてぐりぐりと頭を押し付けてきた。
「よかった。よかった貴兄よ」
「痛い、角が、角が当たる」
はっと思い当たったかのように、カンザーは頭を離した。弱々しく喉を鳴らす。我を忘れていたことを恥じてるのだろうか？
「よかったフィード。こいつが――」
ジンは僕とカンザーからはすこし距離をあけていた。だが近づこうとしたとたん、竜は彼に威嚇の声を上げた。ジンは困り顔だ。
「フィード、なんとか言ってくれよ」
「カンザー、別に彼が悪かったわけじゃないよ。僕がちょっと力不足だっただけで」

「事は大体知っている。奴のせいで貴兄は死にかけた。命に炎を噴きかけねば、刹那でも遅れていれば、吹き消えていたかもしれぬ」
「だけど実際は助かったんだよ。ありがとうカンザー。だからもう怒らないで」
カンザーは僕をじっと見つめた。吸い込まれそうに渦巻く青い瞳が、僕の心を見透かしているようだ。僕は、僕の今の気持ちがしっかりと伝わるように、その渦に心を開いた。
時間が止まったかのようなほどの後、カンザーはゆっくりとため息をつくとその頭を前足に乗せた。
「貴兄が許すのならば、私も許そう」
その言葉に、今度はジンがため息をついた。カンザーの様子をおっかなびっくり疑いながら、ゆっくりと僕に近づき、そして尻尾を挟んで僕の前に座り込んだ。
「本当にすまなかった。まさかあそこまで剣の悲しみが深いなんて、思わなかったんだ」
「私がその悲しみを味わうところだった」
横槍を入れるカンザーを僕は撫でて鎮めた。
「でも、あの剣は僕になにを期待しているんだろう。どうして僕を選んだのかな。やっぱり竜の血が流れてるから？」
「り、竜の血だって？」
ジンはひどく驚いた様子だ。そして次の瞬間には好奇心の目に変わった。
「じゃあやっぱりフィードは竜の化身なのか？それとも生まれ変わり？竜の子とか？」
「いや、僕は人間だよ。死にかけた僕をカンザーが自分の血を使って救ってくれたんだ」
「へー。知らなかった。じゃあ体のすごい傷跡はその時のだったんだな。教えてくれても良かったのに」
ジンは腕を組んで、あえて不機嫌さを表しているようだ。
「話す時間なんてなかったじゃないか。それに、今話したんだから

いいでしょ」
「まぁ、そうだね。そうだ、体のほうは大丈夫？立ち上がれるか？」
僕はカンザーの胴にてをかけ、試しにゆっくりと立ち上がってみた。疲労感といったものは全くない。体を巡る炎も生きづいてるし、痛いところも全くなかった。軽く体を伸ばし、全快であることを体感した。
「よかった。実はもう昼なんだよ。荷物は全部支度できてるから、すぐに出発しよう」
「うん、急がないと。時間倍率の大きいエリアで休んでよかった。ロスをその分少なくできたよ」
「そうだな。よし、俺はもう行くぜ。どうせすぐ追いつかれちまうんだ。先行して時間を稼がないとな」
そう言うと、ジンはさっと馬に乗り全速力で走りだして行ってしまった。
僕も慌ててカンザーに乗り、荷物と鞍の点検をしてから、空へと舞い上がった。円を描きながら高度を上げ、地面はどんどんと遠ざかり、カンザーはジンの走る方角へと頭を向けた。
そこで僕は気づいた。もしかして僕はジンに、質問をはぐらかされてしまったのではないだろうか、と。

さらさらと流れていく川から夕日をすくい、汗だらけの顔を洗った。ひどい疲労感を心地良い冷たさの水が癒す。僕はブーツと足巻を脱ぎ、足をつけて岸に座り込んだ。
時の街ベルタウンを抜けて、もう一週間が経とうとしていた。無色の谷から流れてくる冷気は次第に薄れ、今は野草が石の間から顔を覗かせる程度には暖かくなった。しかし未だに夜薄着できるほどではない。これから太陽の暖かみはなくなり、ぐっと気温が下がる。この気温差では体調を崩しそうだ。
僕は方時計を川のショルダーから取り出し、時刻を見た。この土地は午前5時、僕らの時刻は現在正午をすぎたところだ。時間倍率

は1．3倍ほど。よい傾向だ。僕らのほうが時間の余裕がある。逆を言えば、多少遠回りでも低倍率の井戸には囚われたくない。旅人はタイムロスの感覚が違うと痛感していた。

僕は時間倍率の傾斜と揺れ動く様子を逐一観察しては、地図は手帳に記録していた。それによると、時間倍率は闇雲に上下するものではなく、ある一定の山と谷を持っており、規則性はないが、観察する傾斜からある程度の山場と谷場の方角を予測することができるようだった。これは今までまっすぐ直線に飛んできたから分かったことであり、普段は蛇行する商隊ルートを通る人たちには予測は難しいだろう。

この川は本来、距離的な最短で進めばぶつかることのない川だった。だが、もし最短で進んでいれば、最大で0．4倍の時間倍率の谷とかちあうことになると、僕は予想した。迂回することで伸びる距離を無視すれば、2．5倍の山を通らなければロスを打ち消せない。勘にすぎないが0．4倍という大きな谷の幅を考えると、最短ルートで到着するまでにそのような山に出会えるとは思えなかった。

それに比べ、この迂回ルートは最低でも常に1倍以上をキープできる。飛んできた方向には暗闇の渓谷があるため、この方角への商隊ルートはなかったが、もしその方向へ道が必要なら、ここに道を作るのが最適だろう。

だが到着の時間が早まるとはいえ、それは世界から見た話であって、僕らが遠回りをしていることに変わりはない。そのため、実感として旅は長引いていた。

「おーいフィード。もう休憩はいいだろ。もう稽古始めようぜ」

その声に、僕は少しだけ嘆息してから、体を持ち上げた。

ティランさんの斬幻剣、マーウォルスを手にして三日。合間を見てはジンは僕に稽古をつけた。とはいっても、あの重さの剣を突然振るうのはとてもじゃないが僕には無理だった。そこでまずは体力づくりから入ることになり、疲れはてた体を今休めていたところだった。

「さすがにもうきついよ。もう少し休ませてくれてもいいのに」
「まぁまぁそう愚痴るなって。きついのは今のうちだけさ。それに、今日はもう筋トレはしないから安心しろよ」
そう言いながらも、ジンは僕にそこらから拾った枝から作った棒を渡した。やる気は満々のようだ。
「分かったよ。もう少し頑張る」
「よし、その意気だ」
僕は構え方から始まって、足捌きから体捌き、しいては基本的な型としての流れを一つ一つ練習していった。僕はこの基本的な動きを学ぶことは好きになれた。敵の動きや体のつくりを想像しながら、位置や重心を考慮して、常に隙のない流れを作り、敵の急所を狙ってゆく。とても長い間に考察され、洗練され続けたその動きに僕は感動していた。
ジンが言うには、多くの場合相手にするのは人間ではなく魔獣や幻獣なのだから、型は剣術を知るステップに過ぎず、結局は気合と力勝負なのだと主張した。でも僕にはそうは思えなかった。どんな存在にも必ずあるだろう急所を狙い、無駄無く一撃必殺で倒すほうが性にあっている。そういう点で、騎士団の剣術には多くの学ぶところがあった。ジンが知る型の動きというものには、見え隠れする知識と知恵がふんだんに込められているのだ。
すっかり手元が見えなくなってからも、カンザーが焚いた焚き火の下で僕の稽古は続いた。夜からは体を動かすのではなく、焚き火の熱に座って当たりながら、地面に型の流れを描き、時には手振りで剣の流れを示し、たまに立ち上がっては棒を振るった。
「貴兄よ。そろそろ出発したほうがよいのではないか」
カンザーのその言葉に僕らは我に返り、僕は方時計を見た。予定を二時間近くオーバーしていた。白熱しすぎて時間を忘れてしまっていたのだ。
「ごめんカンザー。すぐに出発しよう」
ため息を漏らすカンザーを撫でながら、僕は川の下流を眺めた。

この川に沿って進めば、あと数日で目的地に着くだろう。僕は不思議な高揚感を感じながら、荷物を積み込む作業に入った。

闇に閉ざされた剣 ― 前（後書き）

お疲れ様でした。

魔法都市ー１（前書き）

一つ前の章が少し短かったので加筆済み。

０１添削済み

魔法都市―1

カンザーと僕は魔法都市ミーミスブルンに到着する半日まえに羽を下ろした。

空はここ数日ずっと厚く暗い雲で覆われている。今すぐに降りだしても何ら疑いはないのだが、幸いにも雨が肩を濡らすことはなかった。だが肌寒い湿った風が容赦なく吹きつけ、体温を奪ってゆく。耳が冷えて真っ赤になっていた。

暗い色をした石と岩、そして荒い砂の広陵とした大地は、とても農作物が育つ環境には見えない。石と岩のわずかな隙間に、小さな白い花が咲くのが限界のようで、まるで月の上に立っているかのような印象を与えた。一歩歩くごとに、じゃりじゃりとした感触がブーツから伝わってくる。

「もう少ししたら目的地だが、俺達はこのまま目的地入りするわけにはいかない。竜は目立ちすぎるからな」

魔法都市ミーミスブルン。ジンによると、魔法都市の魔術による警戒は地平線から街が見えるはるか前から始まるらしく、これ以上カンザーで近づけばすぐにバレてしまうらしい。ジンはおずおずと話を切り出した。

「すまないが、ここからは俺達二人で行くことになる」

カンザーはきっぱりと反対した。

「それは反対する。せめて私の視界のとどく範囲に貴兄はいてもらいたい。ここから走り始めても、私は貴兄の背を飛ぶだけだ」

「それじゃあ意味がないんだ。頼むよ、フィードからも説明してやってくれ」

ジンは首を振りながら困り顔で座り込んだ。今この時までこの話を言わなかったのは、カンザーの反対を恐れてのことだったわけだ。

「カンザー。君がこれ以上街に近付いたら、僕らが警戒されてしまう。最悪捕まるなんてこともあるんだよ」

カンザーは僕をじっと見ながらも、これ以上譲歩する気はないというふうに無言だった。
カンザーを連れてこれ以上魔法都市に近づくことはできない。しかし、馬で半日の距離ではさすがのカンザーの耳でも距離がありすぎて、笛の音一つも聞こえないだろう。
僕はそのあとも、カンザーの足を背につけて座りながら説得を続けた。けど、そうしているうちになぜか、ふっと僕も不安になってきた。カンザーが感じる不安は、僕の不安でもあった。
また時の街のようになったらどうしようか。ジンがいるとはいえ、僕はやっていけるだろうか。
僕の一部がすっぽりと抜けてしまうような喪失感を感じた。竜に守られながら眠ることの安心感が僕の体にすっかりと染みこんでしまっている。カンザーと共に街に入れたらどんなにいいだろう、という考えにいつの間にか囚われ、はっとして首を振ってその妄想を追い払った。
僕は再びカンザーと離れることになるとという事実に必死で耐えながら、カンザーを説得していたけど、やがて耐えられず、僕は言葉を失ってしまった。
実は泣きそうだった僕を、カンザーは大きな翼で包んでくれた。こんな姿を見られたって、カンザーなら全然恥ずかしくない。
カンザーは深くため息をついてから、静かにこう言ってくれた。
「貴兄が耐えようとするのなら、私もそれに耐えねばならないな」
僕は不安が和らぐのを感じた。僕の不安をカンザーが支えてくれる、そんな気がした。
僕はしばらくそうしていたけど、感傷に浸る時間はないと気付いて、ジンに納得してもらえたことを伝えた。ジンは、長くてもなんとか三日で戻って来ること。それでも様子が心配なら、超高高度からなら警戒も薄いだろうし、夜や厚い雲がかかっている状態なら視認もされにくいから偵察にきても大丈夫だということをカンザーに伝えた。

てきぱき準備にとりかかるジンを、ぼくはじっと眺めた。僕らと話すときは努めて明るく元気に振舞っているが、こうやって見てみるとかなり疲れが顔に出ている。多分、ここ数日はろくに眠れていないんだろう。僕は時の街を出て今まで、一度としてジンのうなされる声を聞かなかった。ジンは僕が寝るまで起き続け、僕が起きたときには、すでに起きていた。僕が不意に目を覚ました夜は、必ず目を覚ましていた。そして僕に気がつくと、薄笑いを僕に向けるのだ。

正直に言えば、僕はうなされなかった。そういう意味で、僕の精神はあの悲劇に耐えられる心をすでに持っており、強かったと言えるだろう。だが、そういう僕の姿を見てしまっているからこそ、ジンに不要な負担をかけているのではないか、と僕は不安になっていた。彼にとっては、初めての体験だったはずだ。僕が自分の村で起きた出来事がずっと夢に出続けたように、ジンも悪夢にうなされても、全然不思議じゃない。むしろそれが普通の精神なのだ。なのにそれを表に見せようとしない。ジンはそれほど強い精神の持ち主なのだろうか。

僕は自分の鎧をカンザーに預け、騎士団の見習い従者に変装することになった。着る麻を折った質素な服に着替え、その上に乗馬用のコートを羽織る。正直鎧のほうがまだ温かかったが、これが普通らしい。厚手のズボンは、剣の触れる場所や、膝を革で補強したものだった。僕の持つ剣、マーウォルスの竜玉の部分は、見習いの剣なのに竜玉があると怪しまれないよう、そして不用意に誰かが危険な暗闇に触れることのないように、包帯で巻いた。剣の鞘がないので、ジンは刃を当て布で保護し、僕の背中に紐で縛った。結び目を一つ解けば、するすると紐と当て布がほどけて剣がすぐに背中から引き抜ける特殊な縛り方だ。

その後僕らは腹ごしらえをした。カンザーとはしばらく話せないことを思うと、僕は自然とカンザーとよく話し、カンザーも言葉数が多いようだった。

そして太陽が登り切る頃、僕とジンはカンザーに見送られながら、馬に二人乗りとなってミーミスブルンへと出発した。

魔法都市ミーミスブルン

空気に乗る振動と、地面に乗る振動は全然違う。
僕は馬が踏みしめる地面の力強い感触に驚いていた。竜の背とは全然乗り心地が違う。僕がいつも感じてきた脈動は、あるいは羽を羽ばたくときの筋肉の脈動、あるいは首や背が動く時の脈動、あるいは地面を歩いている時の背骨を軸に体が波のように動く感覚だった。羽が空気を掴み、羽の骨がそれをさ支え、筋肉が支え、僕の体を押し上げていた。
馬は地面を蹴り上げ、地面を掴んで進んでいた。空では空気の感触をつかんだように、地では地面の感触をつかんだ。馬は地上を掴む天才だ。
僕は、ジンが馬を操る感覚を感じていた。そこで初めて、カンザーと僕は、空で一つになっていたことに気づいた。ジンが今馬と一つになって地を走るように、僕は空でカンザーと一つになっていたのだ。
雲に沈む空が少しずつ夕闇に近づく気配を感じるころ、僕らは大きな丘を超え、その上で馬を止めた。
なんの水の気配もない土地に突如、巨大な湖が広がっていた。見下ろすほどの高さにいるというのに、湖の先は地平線ぎりぎりまで達している。湖は美しいほどに円形だった。まるで人工的に整えたかのように、左右対称に美しい曲線を描いている。多分、ほぼ真円の湖だ。
その湖の真ん中に、街が浮いていた。灰色の空を写した湖の上を、

色鮮やかな光を発した、華やかな街が浮かんでいるのだ。時の街ほどではないが、強固そうな防壁が島を囲い、その中でさまだまな建物が所狭しと建っているのが遠目にもしっかりと確認できた。
だがなによりも驚いたのは、その上である。島と同じくらいの幅を持った平らな板が、島空中に浮いており、その板の上にも街が広がっているようだった。板は中心が穴を開いたドーナツ状になっていて、そこを下の島の最も高い部分から光のようなものが突き上げ、空に登っている。
「話には聞いてたが、ほんとに街がういてらぁ・・・」
ジンの呆けたような声に、僕も何も言えずに頷いた。
あの板のようなものはどうやって浮いてるのだろうか。ところどころ細い柱のようなものが島から上の板に続いているが、どう考えてもあんな細いものであれほど巨大なものを持ち上げることなどできはしないだろう。だとすれば、魔法で浮かしているのだ。それしか考えられない。
漏れている光も、炎だとかそういう種類のものではない。色とりどりの光を発するその街は、まるで宝石がたくさん入った宝箱のように見えた。
「どうやって街に入るんだろう。港があるようには見えないけど・・・」
「そうだな・・・。あそこになにか建物がある」
ジンが指さす方向、そこには、湖の外縁部で、何かアーチのような建物が見えた。
「行ってみよう」
ジンのかけ声で馬は向きを変え、その構造物へと走りだした。
その建物は、石でできた城門だった。鉄柵の簡素な扉でできているが、門の向こう側はすぐに湖が広がっている。門としての性能は全くないように見えた。
だが、僕はその奇妙な雰囲気に見覚えがあった。全く無意味な場所にある門。それはセオのいた村テフヌトの入り口の門と同じ雰囲

気を持っている。あの門ももしかしたら、魔法による出入口なのかもしれない。
僕らが門に近づくと、門の上の見張り台のようなところから、二人の男が顔を出したのが見えた。片方は対格が良く、銀色の鎧をまとっている。もう一方はひょろりとしており、背中に弓を背負っているようだった。狩人のように見える。
僕らは門の少し前で馬を止めて、二人の門番を見上げた。二人とも、なぜかいぶかしげな目で僕らを見下ろしている。
ジンは声を張り上げて叫んだ。
「俺はジーン・サー＝バルシュタット。ベルタウンから来た。ミーミスブルンの魔法都市ミーミスブルン常駐騎士団のジーク隊長に早急の伝令がある。行き方を教えてほしい」
門番はなぜかすぐに返事をせず、しばらく二人で何か相談しているようだった。やがて鎧を着た男が叫んだ。
「後ろの奴は？」
「俺の従者だ。名はフィード・ドンゼル＝バルシュタット。騎士見習いだ」
「伝令の内容はなんだ？」
「ここでは言えない。重要かつ緊急なものだ」
門番はさらに何か相談している。どうも様子がおかしい気がする。だがやがて、鎧を着た騎士らしき男が、横にある木製の梯子を伝って降りてきた。ジンは僕に馬を降りるように言い、僕に続いてジンも馬を降りた。微妙な空気を察してか、馬が低くいなないた。
降りてきた男はやはり騎士のようだった。剣に竜玉が瞬いている。だが鎧は騎士の一般的な竜の鎧ではなく、普通の鋼鉄製の鎧のようだ。
男は腰の剣を引き抜き、掲げた。ジンも同じように剣を掲げ、互いの剣を一度ぶつけた。二つの剣の竜玉が、同じように瞬く。
男は少し肩の力を抜き、剣を鞘に戻した。
「俺はリュヒケ・サー＝ジーク。よろしくな」

見た目の気迫のわりに、静かで物腰のしっかりした声だった。ジンは騎士が行う作法で礼をし、相手もそれに応えた。
「馬でここまで二週間以上かけて飛ばしました。できればすぐにでも馬を休ませたいのですが」
二週間、というのは早くから打ち合わせていた日数だった。実際は13日でここに到着し、ベルタウンからしてみれば7日ほどしか経っていない。
「よほど緊急な用件なんだろうな。おい！」
かけ声は後ろに振り向き、上にいる弓を持った男に向けられた。その男は頷き、親指と人差指を口に当てて、甲高い口笛を吹いた。不規則に短かったり長かったりして、なにか意味のある音のように聞こえる。しばらくすると、街のほうから、返事のような口笛が聞こえてきた。それを聞いたジンがリュヒケさんに顔を向けた。
「羊飼いのささやき声、ですね」
「そうだ。音で会話する、羊飼いがよく使う技だ。我ら騎士団はもともと高山の羊飼いの出身が多くてね。鏑矢も一応あるのだが、それよりも迅速な手続きができる」
リュヒケさんは、街からの返信する口笛を聞くように、目をしどた。
「――今、直接ジーク隊長に判断を仰いでいるところだそうだ。少し待っていただきたい」
「分かりました。しかし、ここまで慎重にならないといけないのですか？」
ジンのその質問に、リュヒケさんはなぜか苦々しい表情を浮かべた。
「今この街は、ちょっとした問題を抱えているのだ」
「問題、なにかあったのですか？」
「実際にことが起きたわけではない。しかし・・・いや、俺にはこの問題について発言する権限はない。我が隊長に直接聞いていただきたい」

何か深刻な事態が起きているのかもしれない。表には出てないが、ジンも僕と同じような懸念を感じてるに違いない。
「分かりました。そうしましょう」
「うむ」
そう言うと、リュヒケさんは手持ち無沙汰になったのか、物珍しそうにジンと僕をじろじろ見回した。
「・・・君はその歳で騎士なのか。しかも従者を従えた・・・・正直信じられんな・・・」
「俺はベルタウンの常駐騎士史上、最年少で騎士になった身です」
「そうだろうな。我が隊を含めても間違いなく、最年少だろう。無闇に命を落とすなよ」
「はい、心がけます」
その後、リュヒケさんは僕に目を向けたけど、僕には何も言わなかった。多分、それが従者の扱いなのだろう。
やがて、空の雲が明らかに暗くなり、もうすぐ夕闇が全てを覆うころ、やっと街のほうから返信の口笛が聞こえた。ジンはその間ほとんど微動だにせず立ち続け、僕もその後ろで立ったままだったが、さすがに堪えてきたころのことだ。
「――――隊長は入城を許可された。少し待っていてくれ」
何か、低い地響きのようなものが聞こえた。地面が微妙に振動し、門の蝶つがいがカタカタと音を立てている。
やがて、ものすごい水飛沫と音を立てて、湖から何かが浮かび上がった。まっすぐに目の前の門から、はるか先の街まで、真っ白な筋を描いている。轟々と音を立てて上の水が逃げてゆくと、それはなんと、石畳の橋だった。とてつもない長さの橋が、突如として浮かび上がって、街への道となったのだ。
やがて水が橋から落ちきると、鉄柵の扉がひとりでに、金属音を立てて軽く開いた。
「ようこそ我が魔法都市ミーミスブルンへ。橋は滑るから、気を付けよ」

当絶な光景に言葉も出ない僕らを見ながら、少し満足そうな表情でリュヒケさんは歓迎した。

魔法都市ー1（後書き）

お疲れ様でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0010i/

竜の下へ

2011年4月11日07時25分発行